
約束はマジカル！！

村上 悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束はマジカル！！

【Nコード】

N4298U

【作者名】

村上 悟

【あらすじ】

小学生の望^{のぞみ}と遊^{ゆう}は、ひょんなことから妖精と出会い、悪い妖精を退治するフェアリーナイトにされてしまう。良い妖精悪い妖精、さらには妖精王や妖精女王まで出てきちゃって、もう大変！ そんな二人の前に、悪いフェアリーナイトとして望のお姉ちゃんが出てきて……

第一場

第一幕

『これが運命のお約束？

妖精の騎士誕生！』

第一場

陽の光を遮って、森が静かな安息の時を与えていた。

私は木陰で一休み、木の枝に身を委ねて休んでいたところだ。

後二日で祭りの夜が訪れる。影法師共も浮かれて昼間にでてくる有様、しかし、私はそういう気にはとなれなかった。姿を消して一休み、というわけだ。

木々の優しいせせらぎが耳に葉の波の音を伝えてくる。お喋り好きな榎の木がひょいと傍らに枝を揺らし、私の顔に光を当てた。

「失礼な榎の木だ。人の安らぎをじゃまするとは」

飛び立ち、私は新たに居心地のよい場所を探しにいった。そこに、
声。

「待ててばあ」

直後に殴打音。そして、

「痛えだろっ、ついて来れないお前が悪いんだよ」

少年の悪ぶった声がする。とつぜん森に木霊したそれを頼りに、私はそっと枝を縫って急ぐ。何のことはない。ただの好奇心だ。

姿を消している私には気付かない様子だが、周囲にはいたずら好きの妖精たちがやってきていた。マールウにアセンス……おや、ロビングットフェローまでいるではないか。いたずら好きのホブゴ布林、妖精王の可愛い従者……妖精パツク。

誰もが眼下で嬌声をあげる少年少女に目を凝らしていた。子供が

この森に入ってくるのはずいぶんと久しぶりのことだ。

少年は太い眉をひそめて少女をなじっていた。

「だいたい、女のくせに冒険についてこようなんてのがいけないんだよ」

迷彩を施した半ズボンに同じく迷彩のＴシャツ、どうやら少年はこの森に探検に來たらしい。ヒップホップショートをつんつんした髪の毛が、その元気を象徴していた。

「なによっ、あたしのパパがここには妖精がいるって教えてくれたんだからっ。あたしにもいっしょに來る権利があるはずでしょ。冒険は男だけの特権とか思ってんじやないでしょうねえ？　今は男女平等、雇用機会均等法なんだよっ」

ジーンズのジャンパースカートをはいた少女は、おそらく自分でもよく分かっていない単語を口にした。特別扱いしないでよね、とでも言いたいのだろう。

ショートレイヤーの髪に、栗色の瞳が気の強さを表している。少女はやきもきしているのか、ぴょんぴょんと飛び跳ねている。頬を膨らませ、そのコロコロとした輪郭を一層丸くした。

迷い込んだウサギ、小学生らしき二人は、さらに奥へ歩いていく。今度は少女が先頭に立った。大きく手を振り上げて、ご満悦の様子だ。

その先には、欠けた十字架を配した教会が見える。青い屋根が、皺のように亀裂を刻んでいた。それでも夏の陽光を、力を振り絞って受けつづけている。そこにある大切なものを護ろうとしているかのようだ。

周りを飛び交ういたずら羽虫たちが、なにやら相談している。頭取は蜂の羽を持ったパツク、ロビンゲットフェローだ。木の葉で編んだ腰みのをまとい、天に向かって立つようにしている赤茶の髪、夏の空のような青い瞳、鼻の頭をこすりながら、あの二人についての噂話をしている。

「へへ、じゃ、おいらが最初におどかすから、アセンズは……で、

マールウはあつちから、な？ 試してやろうぜ、近頃の若い人間を。おいら達の遊び相手にふさわしいか。かつて輪になって踊ったあの国の子供達のようにっ！」

誰も私には気付いていない。

いや、気付かせるつもりなど無かった。知っているのはあいつだけだ。我が愛しき友人、妖精の英知・フェアリードクター。

どうやら、幕を開ける時間らしい。

さあ、役者は揃った。

森よ喜べ、新しい一幕だ。

退屈に食われたその薄汚れた葉を脱ぎ捨て、新しい新緑をのばすがいい。我らの舞台にふさわしいように。

この舞台、全てが私の手の中にある。

この妖精王・オーベロンの手に。

第二場

第二場

さて、物語の視点をこのいたずら妖精共から、か弱く幼き子供達へと向けよう。かつて誰かが言ったように、この世は舞台だ。誰でもそこでは一役演じなければならないのだから。この場での二人の役割が何かはおいておくとして、私は見届けなくてはならない。

「ねえ、ひと休みしようよお」

少女が駄々をこねている。もう既に座り込んで、木陰に身を任せてしまっていた。その様子を見た少年は一言、

「しょうがねえな、これだから女って奴は」

などと文句をたれながら、それでも遠慮がちに少女の隣に座る。二人とも足をのばして、背伸びをするように手を上げた。

「んっ！ 来てよかったあ。遊もそう思うでしょ？」

少女は少年・遊を覗き込む。顔と顔の距離が近くなって、青いリボンが赤く熟れた。少年は頬を染めて、それでも悪態をついている。「ばーか、なにピクニツクに来たみたいなこと言ってるんだよ。だから望となんか来たくなかったんだ」

そっぽを向いて、頭の後ろで腕を組んでいる。

ジャンパー・スカートの少女・望はそれについた土をはたいて、立ち上がった。

「ふーん、そういうこと言うわけ」

そっぴいながら、背負ったデイパックの中からリボンのついたブルトン帽をだす。

「なんだよ……」

少々口ごもりながらも、彼はまだ強気だ。しかし、足を縮めて抱えて座ったその態度に、気弱さが見え隠れしている。

そんな彼に向け、少女は帽子をかぶった後で頬を膨らませた。

「このっ」

思い切り遊のスネを蹴る。瞬間、少年が飛び上がった。声にならない声を涙で表現し、患部を両手で押さえている。

「今度そんなこと言ったら承知しないからね」

勝ち気な少女は、さつさと少年に背を向け、教会に向けて歩いていった。その様子を見ながら、遊は片足飛びで彼女を追う。

さらにそれをパックが見ていた。

「すげえ女……」

これには悪戯者も目を皿のようにしている。が、ブンブンと首を振ると、気を取り直して彼らの後を追った。

「悪かったよ、ゴメンって言ってるだろお」

少年が望の前に出て、手を合わせている。ずいぶんと腰が低い。さつきまでの態度が嘘のようだが、私にはこれが彼の本当の姿のように思えてならない。フェミニスト、というわけではないだろうが、そういった弱さのようなものが感じられる。

厚く生い茂る草を踏みつけながら、望は歩いていった。そして、ある地点で立ち止まる。

「反省した？」

少年がこくこくと頷いた。顔だけ振り向いて見ていた望は、半ば冗談ともとれるようなその動作がツボにはまったらしい。クスクスと口に手を当てて笑い出し、ついには大笑いをする。

「あはははは」

それが不満だったらしく、遊は唇を噛みしめて怒りをこらえていた。夏の果実が一つ丸ごと入りそうなほど大きく口を開けて笑う望に、その怒りが行動を伴って爆発する。

「このやろっ！」

遊と望の追っかけっこが始まった。うにゃあ、などと訳の分から

ない奇音を発しながら、望は頭を押さえて走り回る。帽子が飛びそうになるほど揺れている。それを遊が追いかける。追いつけるのに追いつかない。そんな足取りだった。それはそのまま二人の距離を表している。白樺の太い幹を軸に望がクルクルと回り、それを塞ぐと遊が幹の左右から顔を出す。

痴話喧嘩は唐突に終わった。まるで綱の切れた緞帳のようにして、遊が望に追いついた。二人は転びながら草に顔を埋める。その、埋めた草の下から、おどけた調子でキノコが顔を出した。

『ひゃあっ！』

同時に声をあげて二人が飛び退き、硬直して見ている。キノコは、そのまま伸びきって、飛び上がった。空中にある間に、ポン、と音を立てて手足が生えてくる。二人は少しだけ後じさった。

遊が、望の肩を後ろから支えている。いや、どうやら望を後ろから押しだそうとしているようだ。最初の男らしかった態度はもうどこにもない。

「なによ、これっ このこのっ」

少女の方が勇ましかった。そこらに落ちている枝を拾うと、キノコをつつきだす。キノコは少しずつ前に歩き出している。表情のない悪戯坊主が、つかねながらも二人の間近に迫った。

「うっ……」

さすがに望も泣き出しそうだ。

寄り添うように、二人は後ろに下がっていく。やがて、一本の白樺の木を背にした。

ジリジリとキノコがにじり寄る。少女はジャンパースカートの裾を握り締め、少年は唇を噛みしめて涙をこらえている。太い眉が、ピクピクと揺れている。

そして、キノコが弾けた。

ポンッ、と音を立てて。

「わあああああああっ！」

我先にと、二人は駆けだした。後には芥が舞い、水を打ったよう

な静けさが、波紋と広がっている。

キノコがいた場所には、赤茶の髪の腰みの妖精、ロビンゲットフエローが鼻をこすりながら笑っている。悪戯が成功してよほど嬉しいようだ。彼　パックは、仲間の首尾を見るべく蜂の羽をふるわせ、韃靼人の矢よりも速く翔ていった。

森は深く、しかし、夏の暑さを感じさせないくらいには涼しく、二人を迎えていた。

キノコのお化けに驚いて駆けていった幼き子供達。彼らは知らずの内に、より奥へ、奥へと抜けていった。

「おかしいなあ、明るい方に行ってるんだけど」

遊が不思議がるのも無理はない。彼らには見えないが、私には木の枝をそつと持ち上げて、たくさんの木漏れ陽を地面に注ぎ込ませる妖精の姿が見えた。さながらそれは死者を導く天使のよう、二人はマールウとアセنزに導かれ、妖精の世界へと迷い込んだのだ。

「ちつとも出口に出ないじゃない。なにやってんのよ」

少女が愚痴を漏らす。赤い二枚の花弁からもたらされる辛らつな言葉が、少年のプライドを刺激した。

「なんだとつ、オレだって真剣にやってるんだぞ。ただ……ちよつと間違えただけじゃないかつ、それを　っ！」

再び喧嘩が始まる。サラサラした望の髪をつかんだ遊に、彼女はその腕に噛み付いて反撃する。迷彩の薄いシャツが、裂帛音をたてて引きちぎられた。今の二人のように解れた糸が、同時に彼の叫びを呼んでいた。

「あーっ！　このシャツ、高かったんだぞお」

細かいことを気にする男だ。しかし、それがやりすぎだということくらいは、勇ましい少女にも分かったらしく、その割けた部分をとっさに繋ぎ合わせるような仕草をし、その後でうつむいて、

「……ごめん……ね」

と言って、恐れるように後ろに下がる。少年は、なにも言わない。

「あ、あの……それ、あたしが直すからっ、だから、怒らないでっ、ねっ？」

手を合わせて必死に頭を下げる。長年の付き合いらしく、少年の怒りが分かったようだ。この様子からすると、彼は相当の癪癢持ちらしい。大人しい者ほど、怒ると怖いものだ。

が、その怒りが外に出ることはなかった。

すぐに、少女の足場が消える。いつの間に掘ったのか、すぐ後ろに片足が入るくらいの……そう、ちょうどモグラが掘ったような……穴ができていた。

「きゃあっ」

足を取られた望が、思い切り頭を打ちながら仰向けに倒れた。

「のぞみっ」

怒りも忘れ、少年が駆け寄る。望は頭をさすりながらも、瞑っていた目を開け、起きあがろうとしていた。だが、その視界に入ったものは……、

「いやあああああっ」

大量の木の葉だ。あわてて駆け寄ってきた騎士もろとも、その下に埋められてしまう。

銀世界の木の下を思い出す。よく、悪戯する子供に雪を落としてやったものだ。それを木の葉で代用するとは……やったのはアセンズのようなが、これはパツクの入れ知恵に違いない。こんな楽しい悪戯、あいつ以外に誰が思いつくものか。

のそのそと這い出してきた二人は、ようやく、これが何かの意図によるものだとは勘付いたようだ。虫食い木の葉を払い落とし、どちらからともなく顔を見合わせると、二人は一目散に教会に向かつて駆けていく。道が分からない今、この辺りで一番大きく、分かりやすい目印……さすがに悪戯者でも教会を動かすことはできない。

遊と望が去った後には、手を叩き合って浮かれる三人組がいた。

教会まであと少し。埋積した木々の葉も失せ、海のように薄いグリーンを敷き詰めた庭が現れた。

芝の感触を確かめて、二人はここに人が住んでいると気付いたようだ。一定の長さに刈られたその美しい庭を見ただけで、それは伺い知れる。

「でもさ、もし、ここに住んでるのが、さっきのキノコお化けだったら……」

遊が情けない、空に溶けてしまいそうなか細い声をあげた。望がそれを聞いて、思い切り頭をはたく。

「ばっかね、なに言ってるの。男の子でしょ？　ちゃんとあたしを守ってね、王子様っ」

茶化した風に、彼女が笑いかけた。何の迷いもない、屈託のない笑顔だ。私までつられて笑みをこぼしそうになる。この無類の明るさ、これが彼女の強さなのだ。それに比べて、遊の情けないこと……。ヒップホップショートのツンツンした髪の毛が、今では萎れて見える。案の定、望の笑顔にも、曖昧な笑みで応えただけだった。その、彼の顔が一瞬でひきつる。

ボタン、ボタンと音を立てて、ドアが閉じたり開いたりしたのだ。もちろんそれが誰の仕業か、もう既に明白ではあるのだが、舞台上上がったばかりのこの二人には、想像だにできない。

「やつぱりだ……」

遊があわてて逃げ出そうとしているのを、望が後襟を取って引き留まらせた。

「もう怒ったっ！」

あくまで勇敢な少女だ。迷彩服の少年は未だに、太い眉根を下げて情けない顔で逃げようとしている。

望が、遊の両肩をつかんで正面から見据えた。そのあまりの真剣

さに、遊は肩をすくめて縮こまった。

「ユウツ、あの中にはいろっ」

「えーっ」

言い出したのは……話の筋から……遊の方なのに、今ではずいぶんと後込みしている。それもそのはず、影法師達の姿は、今の二人には見えない。座敷童ではあるまいし、純粋な心を持った子供だからといって見えるものではない。妖精を見るには、コツがあるのだ。そんな、目に見えない恐怖からは、誰だって逃げたくなるものだ。四つ葉のクローバーもない。影法師は人間が大好きだが、人間に見られるのは大嫌いだ。それは、見られることの煩わしさを知っているからだ。そのためにひどい目にあつた仲間達を、私は数多く知っている。

役割の入れ替わつた子供達は、その方が本来の姿のように見えてしまう。元気で快活な望、優柔不断で……しかし優しい性格をした遊、この二人が、私の力になってくれるはずだ。

「約束でしょ？ 今日はこの森を探検して、あの教会に入るんだって。あたしがパパからこの森の話聞いて、それを遊に話して、したら遊がいくつて言い出したんじゃないっ。そりゃ、パパやママはダメつていつてたけどさ、全然怖いことないよ。大丈夫　だいたいようぶっ」

自分に言い聞かせるように、そしてこれが義務なのだと思います。ことで力を奮い立たせているようだ。

「約束つても、勝手についてきただけじゃん。だいたいようぶつて……でもなあ……」

望に聞こえないように言って、遊はチラリと教会の方を見る。今は治まっているが、さっきまで騒霊現象のようにあらゆる扉がバタバタ鳴っていた場所だ。私だつて、タネが分かつていなければ入りたくはない。

そんな遊の手を引っ張って、彼女は強引に中に入ろうとする。しばらくすると諦めたのか、遊も引きずられるのをやめて一緒に歩き

出した。扉に近づいていく。白い壁に青い屋根、ひび割れ、傷ついた古い教会だ。過去に何があったのか、その傷み具合は長い歴史だけを示している。

そんな教会の、チヨコレート色の扉に望が手をかけたとき、逆に向こうから押し開かれた。

「きゃあっ」

どうやら彼女も本当は怖かったらしい。可愛い悲鳴を上げて飛び退く。そして、そのまま遊の後に隠れてしまった。遊は、そんな彼女を守るうともせずに後じさっていく。

押し開かれた扉の向こうには、ロマンスグレーの短い髪と、まっすぐに見つめる瞳を持った、一人の男が立っていた。彼が現れた瞬間、ピタリと騒霊現象も止む。

「何をやっている」

よく通る声で、彼は二人を問い質した。その片手にはなにやら薬の瓶を持っている。その手の平には、いくつかの古傷が刻まれていた。教会と同じ、歴史を示している傷……彼、木下の過去が、少しだけ思い起こされる。私と出会ったときのこと、そして数々の事件……彼は、私のパートナー、妖精王の騎士だ。

少女達は、そんな彼に少し怯えたようだ。おどおどしながら上目遣いに彼を見ている。

その内、やはり望の方から話し出した。

「あの……森を散歩していたら、変な物に会っちゃって……」

「変な物？」

男が聞き返す。

「お化けキノコとか、木の葉っぱがたくさん落ちてきたり……さつきは……その、ドアがバタバタ鳴ってたんですけどお　　気付きました？」

それを聞いて、男がニヤリと笑った。嫌みではない、爽やかな笑いだっただ。

「いつものことだからね。そうか、君たちにはまだ見えないんだな

よし、何とかしてあげよう」

そう言っ、男は叫び声を上げた。

「パックッ！ いるのは分かってるぞ。出てこい」

そして、ある一点を見つめて満足そうにうなずく。私には、おずおずとうつむき加減に出てくるロビンゲットフローの姿が見える。どうやら、木下は望と遊に妖精の塗り薬を塗るつもりようだ。

予想通り、洗礼の儀式を行うみたいにして木下は二人の瞼に薬を塗っていく。少女達は訳が分からないなりに、萎縮して動けないでいる。緑色したその薬は雪の結晶を手の平に乗せたように静かに溶けていく。瞼にじつくりと浸透した薬が染みてか、二人は飛び上がるがごとく目を開けた。

そして、開口一番、パックを見て同時にこう言った。

『飛んでるっ！』

第三場

第三場

二人の前に、物音一つ立てずにカップが置かれた。木下の妻が、ニコリと微笑む。

「どうぞ」

望は恐縮しながら取っ手をつまみ、遊はそのまま手をつけない。両手を膝の上にそろえて、じつと正面の木下を見ている。

教会の中、その大広間に二人は通されていた。ちよこんと座った望と遊の正面には、三人の人物の姿がある。大きな影が一つと、とても小さな影が二つだ。

「どうした、飲みなさい」

そういつてコーヒーを勧めているのはフェアリードクター・木下昭治だ。ロマンスグレーの髪が印象的で、優しくもしっかりとした目つきが好人物だと思わせる。灰色のシャツとビリジアンズボンが、さらに誠実さをおわせていた。さすがに、かつてサラリーマンだっただけのことはある。

「飲まないんなら、おいらが……」

そういつているのは木下の右隣に座ったパツクだ。

「こら、ダメでしょ」

遊のカップに手を伸ばしたパツクを、一人の妖精がはたいた。銀色の髪、セミロングのレイヤーボブだ。月光のように、美しい輝きをしている。そして、同じく大きな銀色の瞳、こちらは好奇心で輝いていた。か細い体に浅黄色の服……これは百合の花で編んだものだろうか。少しだけ染色しているようにも見える。ラッパ型のスカートがとても愛らしい。彼女の背中に、虹色の羽が生えている。それは、優雅なトンボの羽だ。今はたたまれているが、広げると陽光を跳ね返して、優しく輝く。

「最初に紹介しようか。こっちの、右隣にいるのが妖精パック、そして、左にいるのがキーノ……僕は木下だ。木下昭治」

紹介されて、二人が挨拶を始めた。まずはキーノから。

「初めまして。キーノよ。あなた達、名前は？」

握手を求められて、思わず望がその手を握り返す。幼い彼女の手よりも、キーノの手は小さい。仕方なく、指を差し出しながら、望は自己紹介した。

「あ、えっと……あたしは月森、望っていいです。こっちは、幸野、遊です」

緊張しているのか、さっきまでの調子がない。居住まいを正して、望が頭をかいた。何だか調子が狂ってしまうのだろう。

遊はまだ警戒しているのか、ピクリとも動かない。これでは居間に飾られた銅像だ。

キーノとパックの外見は、望たちよりも遙かに小さい。ちょうど、全身が人間の顔くらいの大きさしかないのだ。その小人がそつと羽根を飛ばたかせ、浮き上がった。

「妖精って知ってる？」

そうやって投げかけるキーノに、望は頷いた。遊は動かない。

「森の影法師、昼と夜の繋ぎ目、黄昏時の悪戯者、陽気な踊り子、小さな神、良き人々……私たちは色んな名前で呼ばれている。果てはヨーロッパから、こんな辺境の小さな島まで、今では、色んな国に私たちはいる」

でもね、キーノはそう付け加えた。

「私たちの姿を見ることが出来る人はなかなかいないの。それはなぜかっていうと、私たちが姿を見せないからなんだけど……」

どうやら、話を繋ごうと思って、失敗したらしい。彼女自身、何を言っているか分からない様子だ。そのまま空中で止まって、ぽりぽりと頭をかいている。

しばらくして、クルンと宙返りをした。銀色の髪が流れ、電灯の光を映し出す。そのまま、キーノは望の肩に来て、ちょこんと座っ

た。

「とにかく、私はあなたが気に入ったわ。勇敢そうだし」

そういうと、今度はパックが一直線に遊の頭の上に飛び乗る。遊はびっくりして少し首を振ったが、すぐに硬直し直した。まだ、一言も発していない。

「じゃあ、おいらはこいつをいただいた。ちょっと頼りないけど、いい奴みたいだしな」

そういつて、彼の頭をポンポンと叩く。

それが合図になったのか、遊がようやく口を開いた。まるで意地悪な貝殻のような口だ。

「だいたい話は分かったぜ。結局、こいつらがオレ達をここに連れてきたわけだ。キノコも、葉っぱも、ドアも、全部こいつらの仕業なんだろう？」

「ちよつと、ユウ……」

「その通りだぜ。意外に分かってるじゃん。でもな、キノは違うぜ。やったのはおいらとアセンス、そしてマールウの三人さ。もちろん、このフェアリードクターの言いつけでね」

遊の、膝に乗せた手が震えていた。

彼は必死に勇気を振り絞っているのだろう。口ばかり達者なやつに、実行力なんてありはしない。彼は黙して力をこしらえ、そして戦おうとしている。この、自分の置かれた状況と。

その様子を見て、木下が腰を上げた。

カップを片手に、ゆっくりと部屋を歩き回る。誰も動かない。フェアリードクターの動向をじっと探っている。皆でパントマイムを見ているかのように。

銀の燭台が……飾りの燭台がその静けさを象徴している。明かりを灯さぬ蝋燭は沈黙しているものと同じだ。

が、木下が軽く手を挙げた瞬間、テーブルの上に置かれた、そして、壁に据え付けてあるそれが、ゆっくりと火を灯す。

場がざわめいた。同時に、照明が消える。カーテンが閉まる。仄

かな赤みを帯びた顔達がお互いを見つめ合う。

まるで、舞台を作っているかのようだ。実際に、彼は……木下はそうしていた。彼の髪が、暗い火を受けて錆びたように瞬いている。そして、ようやく彼が座った。

シン、と静まり返った中で、一言も口を利かぬ男がコーヒーを一啜りする。

それを見て、パックもキーノも飛ぶのをやめてしまった。大人しく座り込んでしまう。今度は、望と遊の隣、だが。

「どうしたんだよ」

不審そうな眼差しで遊が二人を見る。望は、木下から目が離せないようだ。

「そろそろ本題に入ってもよろしいかな」

少し凄味を利かせた声で、フェアリードクターが四人を見つめる。揃ってうなずいた彼らは木下の口元をじっと見ているだけだ。蛇に睨まれている蛙のように。

その口から、優しい音が漏れた。

「知っていることを話そう。昔、この世界にあった話だ。そこでは妖精が人間と同じ生活を営んでいた。時には王の結婚式に呼ばれたり、人々の生活に混じって手伝いをしていたりした。森は彼らの土地だ。そこに入ったものは口バの頭をかぶせられたりもした。な、パック」

そついわれて、パックがぺろりと舌を出す。

木下はさらに唄った。

「今も昔も変わることなく、彼らはすごしている。場所が日本に変わっても、だ。旅する内に流れ着いたその場所を、彼らは永住の地と定めた。だけど、同じ事は何度でも繰り返す。それはたとえ王様やお后様でも同じだ」

遊と望には、何のことだか分からないらしい。私も、この様な話の持つて行き方には時に困ることがある。

もう一口、コーヒーを飲んでから、口調を変えて話し出す。今度

はずいぶんと落ち着いている。

「妖精は、悪戯者だつて話を聞いたことがあるかな？」

これは、人間二人に問いかけたものだ。目尻を下げて、安心する笑顔でそう話しかける。

遊は、首を傾げたただけだった。だが、望は知っていたようだ。元氣よく手を挙げて、大きな声で返事をした。

「はいっ！ 知ってますっ。妖精は、人間に悪戯したりするのが好きなんでしょ？ でも、とってもへそ曲がりで……うーんと、例えば家が散らかったりしていると片づけてくれたりするんだよね。ほら、あの優しい靴屋さんの話みたいに」

詳細な、とまでは言えないが、子供にしてはしっかりとした物言いだ。妖精の特徴をよく捉えていると言えよう。木下はそれが気にいって、つい余計なことを喋る。

「ほお、さすがはあの男の娘だね」

「パパのこと、知ってるの？」

キョトンとした瞳で、彼女が訊いた。彼はちょっと舌を出して照れてみせてから、応える。

「ああ 豊、だろ」

その応えに、望はうなずいた。

そうして、木下はまた話を続ける。

「やはり、君はびつたりだ。じゃあ、話の続きだ。……コホンッ、えー、妖精は悪戯好きだ。その妖精が、悪戯以上のことをしだしたら、大変だ。何しろ、彼らは魔法を使うことができる」

うんうん、と二人はうなずいている。

「それが今、現実を起こっている」

一瞬の間が開く。フィルムに映し込まれた二人の表情。セルロイド画の一枚を見せられているかのようだ。

それを無視するように、木下は立ち上がった。暗い室内に、靴音だけが響く。カップはテーブルに置かれたままだ。

ウロウロと歩き回りながら、話し続ける。

「妖精たちが度を越した悪戯を始めている。我々でも手に負えないくらいだ。しかも、そういうときに調停役になってくれるはずの妖精王と妖精妃が見あたらなない」

それに、キーノが付け加えた。

「実は、アルテム……王女様も行方不明なのよね。しばらく前から」木下が歩くたびに壁の燭台の炎が揺れる。それは影を揺らし、場の感覚を奇妙にずれさせた。ちょうど、黄昏時に似ている。

木下は室内にあるタオルを手繰り寄せ、望と遊にそれぞれ放る。

「瞼に塗った妖精の塗り薬を拭ってくれないか。普通なら、それでパック達の姿は見えなくなる」

同時に、二人は顔を拭いた。念入りに、何度も何度も拭っている。本当は、奇妙な薬を塗られて気持ち悪かったのだらう。もちろん、タオルで拭ったくらいで染み込んだ薬がとれるはずがない。あれには、別の秘薬が塗り込んであるのだ。マニキュアに対する除光液のようなものだ。

そして、たつぷり一分間、顔をゴシゴシとこすった二人は、目を開けた。

「ねえ、私たちが見える？」

キーノがそう言う。

望が、目をパチクリさせた。

「全然変わらないよ」

それを聞いて、木下が息をつく。

「ほお、やはり予見は正しかったか。しかし、あの男の娘だとすると、当然のような気もするがな」

天を仰ぎ見る。神に祈る聖者のように、その姿は輝かしい。

望の反応を聞いて、キーノ達も目をパチクリさせている。

「遊、お前は？」

パックが遊に訊く。

「見えるよ」

二人の妖精が顔を見合わせる。

『透視能力だ』

同時に、そう言った。

その先を、木下が フェアリードクターが引き継ぐ。

「そう、その通りだ。それが第一条件。そして、第二の条件はお前たち妖精の仲間として迎える資格があるかどうか、なのだよ」

まだ、望たちには分かっていない。彼らが何の目的でこんな事をしたのか、そしてこのような説明をしているのか。

だが、最後までその説明はされなかった。木下は一言、

「後は彼らに訊いてくれ」

と、キーノ達にその役を譲った。

キーノがゆつくりと飛び上がり、フェアリードクターと子供達の前に立ちはだかった。

そして、厳かに言葉を紡ぐ。

「ようするに、君たちに、妖精の悪戯を止めてもらいたい。やってくれる？」

キーノが、わずかに自信なさげに言った。そんな姿が可哀想だと思っただのか、望も遊も、コクリとうなずく。

「約束してくれる？」

またもうなずき、しかし、今度は、遊が質問した。

「でも、オレ達にそんなことできるのかな？」

ちよっただけ不安を口にすると、パックがピツ、と指を立ててこう言った。

「透視能力を持っているお前たちになら、妖精が見える。そして、おいら達はお前らに妖精たちに対抗する力をあげることができる。それが、掟だしな」

素早く羽根を鳴らす。ビー、という響きが部屋に木霊する。彼の羽は蜂の羽だ。

そして、キーノが二つの小物を出す。

真っ白な水鳥の羽をあしらった羽ペン。それと、銀色の、剣のキールホルダーだ。

「羽ペンは望ちゃんに」

「剣は遊に」

それぞれキーノが望に、パックが遊に渡す。二人はしげしげとそれを見つめているが、どこも変わったところはない。それが何の役に立つのか、説明なしでは解りかねるようである。

私の想像通り、望が、そして遊が疑いの眼差しを向ける。

「で？」

「これが何になるってんだよ？」

それぞれの問い方で妖精を追いつめていく。悪戯坊主共はその針のような視線を受けて冷や汗を流しながら説明の続きをする。

パックが遊のツンツン頭に座り込んだ。

そして、頬杖を突く。

キーノは望の肩に乗り、笑いかける。

二人は同時に言った。

『変身するんだよ』

どうにも分からない話だったようだ。私から見ても、二人の説明が足りない。木下のもったいぶらせる癖がうつつたようだった。

「それで？」

やはり意味が分からなかったのだろう。遊が訝しげに問いかけた。それに対し、キーノが応える。

「妖精の悪戯を止めてもらいたいんだけど、相手は自分を見失っている。たぶん、話しかけても、応えてくれないと思うの」

パックが彼女に続く。

「そんな、聞き分けのない奴らに対抗するために、お前らに妖精の力を……魔法を渡すんだ。変身して、戦ってくれ。そして、魔法の力であいつらを正気に戻してやってくれよ」

悪戯者だが、仲間を思う心は熱い。パックが長い間慕われてきたのも、一つにはそういう性格があったからだ。

遊は少し不安そうな表情をしていた。望は、元気いっぱいに応える。

「やるつ、ユウツ！ 妖精さん達、困ってるじゃないっ。あたし達で、助けてやるうよ」

今までの行動から見て、どう考えてもユウに断ることはできない。こうして、遊と望は帰ることになる。

二人の妖精を引き連れて。

そして、外に出た私は、そこである人物を見る。真っ黒な服装をした女だ。杖に乗って宙に浮いている。

「ふーん、そういうこと……。オーベロンも考えるわね」

そして、もう一人。こちらはよく知っている。妖精妃、ティターニアだ。

「あの人のやりそうなことだわ。結局あたし達は敵扱い、ってことになったってわけ」

二人はそういいながらも、嬉しそうな表情だ。

「それじゃあ、遠慮することないね。言葉のない正義は悪と同じだと教えてあげる」

「手始めは、ブラウニーですね」

「宣戦布告、ってね」

私には気付かずに、通り過ぎていった。

どうやら、一混乱ありそうだ。

第四場

第四場

森から出て、町にはいる。この町は四つのブロックに区切られていて、その第三地区に望と遊の家がある。白い壁と暖かい色の屋根、そして、その中ではやはり暖かな人々が迎えてくれた。もちろん、私は呼ばれざる客だったのだが、それはキーノやパツクも同じだ。

全員が、望の家に入る。新しい仲間のことを知るためだ。

玄関のドアを開けるなり、一人の女性が料理に使うボウルを抱えてやってきた。

「待ってたわよ、のぞみ。これ、食べてみない？」

艶のある黒髪をポニーテールにまとめている。年の頃は四十過ぎか。望と同じく、元気で明るい印象が残る。彼女の母親だ。

「ママあ、今朝も食べたばつかでしょ？ 今度は生クリーム？ あたし、このままじゃブタさんになっちゃうよお！ 料理好きもいいけど、ほどほどにしといてよねっ。食べさせられるこっちはたまらないよっ！」

美味しそうな匂いはしているのだが、望は難色を示している。しよっちゅう、しかも一日とおかずに手作りのお菓子を食べさせられているらしい。

母親は遊に気付いた。

「あら、遊君も、どう？」

遊は首をブンブンと思い切り振った。横に。彼もこのお菓子攻撃の犠牲者の一人のようなだ。

ボウルの中では、クリームが美味しそうな具合に泡立っている。エプロン姿の母親が、仕方なく、といった様子で攻撃を諦めた。そして、「ほらほら」と急かしながら、遊を家に上げようとする。元々そのつもりだろうが、こう急がされると逆に遠慮深くなっ

まうものだ。

「恵、いい加減にきなさい、遊君が困っているだろ」

「あら、豊、寝てたんじゃないの？」

「あれだけ騒がれればヨルムンガンドだって起きるよ」

ずいぶんと古い例えだ。豊も、恵と同じく四十代で、ボサボサの頭と鼻にかかった丸眼鏡が印象的だ。片手にはコーヒーの入った白いカップがある。縁が真つ茶色になっていることから、この男が相当のコーヒー好きだと分かる。ほとんど病気ではあるまいか。髪の毛と同じく、だらしない格好をしている。アイロンをかけていない茶色のズボンに、ピンクのカッターシャツ、その上に白衣を重ねている。最悪のセンスだ。

その父親に、望が飛びついた。

「パパ、ただいま」

豊は相好を崩して彼女を抱きしめる。

「お帰り……おや？ ……ふーん、で、森の探検はどうだった？」

彼は数回瞬きすると、望にそんなことを訊いてきた。

「え？ 何で……」

「望なら行くと思ってさ。で、どうだった？」

望は何も応えない。本当は言いたくてウズウズしているのだろうが、キーノが豊の後ろに回って、人差し指を立てて唇に当てている。「う、ううん、別に何もなかったよ。そうそう、木の上から葉っぱが落ちてきてさあ、ドサドサって……それで参っちゃって、帰って来ちゃった」

ぎこちない様子で言い逃れようとする望に、豊がさらにいう。

「ふーん、それは妖精の仕業かも知れないなあ」

コーヒーを一啜りして、彼は胸ポケットからタバコを取り出す。

とんとん、と指で鳴らして、口にくわえた。火はつけない。

じっ、と望を見ている。

「そ、そうかも知れないね。パパ、前に言ってたでしょ？ あそこには妖精さんがいるって……ねえ？」

それを聞いて、父親は一つうなずいて、去っていった。なにやらブツブツ言っている。何か勘づいているのだろうか。恵もそれに続いて台所に向かう。

「じゃ、とりあえず上にあがろっか」

そう言つて、望たちは二階に上がろうとしていた。が、それは叶わぬことだったらしい。

「きゃああああ！」

恵……望の母親の悲鳴が、木霊してくる。

台所からだ。妖精二人が、顔を見合わせた。何かを感じ取っているようだ。私も、その『力』を感じる。それは、誰かの願いだ。誰かの想いだ。誰かが、魔法を使った形跡だった。

妖精二人はうなずいた。

「出番だよ、お二人さん」

キーノが、楽しそうに笑った。

第五場

第五場

「ブラウニーはね、人間の手伝いが好きなんだが、へそ曲がりなところがある。安手の物を贈られたり、姿を見られたりすると、途端に反旗を翻したりするものだ。しかし……これはやりすぎだな」

望の父、豊がそんな解説をしていた。妻の恵に向かって説明しているようだ。恵は、涙ぐんでいた。豊は、相変わらずクシャクシャになったタバコをくわえている。火はついていない。禁煙でもしようというのだろうか。

惨状はこうだ。たった今まで艶のある光沢と清潔な空気で満たされていたであろうキッチンには、今やゴミと不快な匂いでいっぱいだった。ひっくり返されたゴミ箱、中身の飛び散った冷蔵庫、コーヒ―は辺りに独特の臭気を漂わせ、ミートソースが床に血反吐を撒き散らしている。割れた皿の数は髪の毛の数ほどで、さっきまで泡立てられていたクリームは母親の鼻にアクセントをつけていた。

「なにこれっ？」

「ひっでえ」

子供達が入ってくる。それを見て、豊が説明を終えた。しげしげと二人の頭上を見ている。そこには、呆れた顔の妖精たちがいた。

豊は眼鏡を中指でかけ直して、改めて恵に向かう。

「恵、とりあえず、妖精が落ち着くまで待つてみようじゃないか。気まぐれ影法師の機嫌がよくなるまで、少しの間、外に出ていようか」

何だか含むような言い方だ。それに、恵の方の対処も意外だった。チラリと子供達の様子を見ると、

「そうね、どうやら、少しブラウニーさんにはお仕置が必要みたいだから」

と豊の手を取る。

「豊さん、あたし、ケーキが食べたいな。駅前に美味しそうなケーキ屋さんがあったんだけどお？」

「あれだけ作っておいて、それでもまだ食べる気なのかい？ お腹こわしてしまふよ？」

二人がそういったやりとりをしている。まるで恋人同士の会話だ。そうは言いながらも、豊は白衣を脱いで、ハンガーに掛ける。

キッチンの惨状は無視だ。

「あの、ママ……パパ……」

何だか分からないなりに、二人の様子がおかしいと気付いたのか、望は遠慮がちに声をかける。

そうすると、彼は恵が絡めてきた腕をほどいて、望の頭に手の平を乗せた。

「頑張りなさい。彼女が付いているなら、大丈夫だろう。多少おつちよこちよいだけどね」

そういつて、望の頭上にいるキーノにウインクする。それで、彼女も諦めたようだ。

「知ってたんですか？ あなたに対して姿を消していたのに。絶対に見破れない魔法だと思ってたのになあ」

豊がキーノの頬に触った。

「私も年季の入った透視能力者なんでね」

その横から、恵が手を出す。遊の頭上に。

「こちらは有名なパックさんね。よろしく」

パックは呆気にとられている。

「あ、ああ」

恵が伸ばした指を、軽く受け止めた。遊が目だけを上にあげてそれを見ている。

子供達は何の話か全く分かっていない。ただ、キッチンの隅でゴソゴソと動くものが気になっていた。塵や芥の一種ではなく、ちゃんと意志を持って動く生き物のようだ。

その生き物は、積み木のように鍋やヤカンを積み上げて楽しんでいる。茶色い皮膚と、頭に生えた一本の角……。

豊と恵が満足げに部屋をあとにしようとしていた。そこに、
「ちよ、ちよつとお……なにこれえ？」

と、さつき聞いたような台詞が飛び出してくる。

「あら、灯じゃない。ねえ、一緒にケーキ食べにいかない？」

長い髪を後ろで束ねている。チヨコレート色の瞳をした少女だ。制服を着ているところを見ると、いま学校の帰りらしい。

灯は軽く首を振って否定している。どうやら目の前の現実を信じたくはないようだ。ひもで結ばれただけの後ろ髪が何度か頬に当たる。そんな彼女を、両親は無理矢理連れて出ていこうとしていた。

「待つてよ、パパ、これって……説明……」

灯の断片的な質問を無視して、ずるずると両親は引きずっていく。『お人形』は、盛大なゴミの山にいるよりは、現実逃避で外に出た方がいいと判断したのか、それ以上の抵抗をしなかった。

「じゃ、頑張つてねえ」

恵が、去り際にそんな言葉を残す。

「なんなのよお！ いったいいい」

灯の声が反響し、次いで、ドアが閉まる音がやけに大きく響いた。

さて、これで、この場には五人しかいなくなってしまった。私は数えないで 望、遊、キーノ、パック……さらに、豊が説明していたように、悪戯者の妖精が一人だ。

「ちよ、ちよつとお、なんなのよ……これっ」

急に、望が取り乱した。いきなり現実に戻ってきたようだ。三匹の猿のようにいままでは何も感じていなかったのだろうか。それは遊も同様らしく、望の声で我に返った。びくつ、と体が震える。

試練だ。まだ、二人には何も説明するわけにはいかない。彼らはまだいくつかの試練が残っており、それを成就しないことにはこれから先の話なんてできようもない。

だから、まだ彼らは何も知らなくていいのだ。ただ、目の前の出

来事を、何も考えずに処理していただくで。その内、自ずと知恵が付いてくる。大人になっていく。

与えられた逆境ほど身のためになるものはない。それはあたかもヒキガエルのように毒を含んでいるが、頭の中には貴重な宝石が隠されているものだ。

今はそれさえしのいでいれば、いつか話す時もあるだろう。

私の考えを反映したのか、キーノが望の額に触れる。遊は呆然としたままだ。ひよっとしたら、怖くて動けないのかも知れない。

「望ちゃん、いい？ これは現実で、望ちゃんは騎士なの。約束したでしょ？ 妖精たちの悪戯を止めるって。さあ、さっきあげた羽ペンを持って」

言われるままにペンを持つ。

ブラウニーがこちらを振り向いた。積み木遊びには飽きたらしい。その姿は大きく、とても妖精の一人とは思えないほどだ。

「こう言って……『アンテ』」

望がプルプルと震えている。ギョツと羽根ペンを握りしめ、ゆっくりと顔を上げた。そして、やけになったのかこんな事を言いながら、それでもキーノの言葉を繰り返した。

「もう、何だか知らないけど、やってやろうじゃないのよつ。さつきから積み木してるあいつも誰だか知らないけど、ヒトンチでやりたい放題してさつ。もうムカツいたからやつつけてやる。変身でも何でも、やってやろうじゃないつ　　アンテッ」

「わっ」

望よりも、隣の遊の方が驚いている。そして、キーノが次に何かを渡した。

「望ちゃん、これも持って」

はんこ……普通の三文判が渡される。

「もう一回、アンテって言って」

「アンテ」

今度は先ほどよりも力を込めないで気楽に言ってみる。やはり、同じくはんこが大きくなった。どちらも両手で抱えないと持てないくらい大きい。

「私に続けて言ってみて。『妖精王の名において、我、汝と契約す』」

望が続く。すると、目の前に巨大な…… A二くらいのサイズの西洋紙が現れた。あとは、教えられてもないのに体が動いていく。

望が、両手で羽ペンを抱える。ペン先を西洋紙に当てると、『O a t h』の文字を描いた。そして、羽ペンを投げ捨てると今度ははんこを持つ。肩に抱えるくらい大きなそれで、彼女は紙に…… 契約書に印を押した。契約書にはこう書かれている。

『変身して、一生懸命戦いますっ』

はんこが押された瞬間、契約書が熔けるように細切れになった。それは紙吹雪となり、望を包んでいく。

姿が消えていく。帽子をかぶり、ジーンズのジャンパースカートだった望の姿は、今や紙吹雪の中に消えてしまっていた。

そして、声が聞こえる。

「よくもウチの台所を荒らしてくれたわね。台所は綺麗に。常識なんだから。みんなのお約束っ。約束破ったら、ハリセンボンだぞっ」
望の声だ。紙吹雪が薄れていく。

彼女の姿はすっかり変わってしまった。…… 大人になったり、仮面をつけていたりはいしない。ただ、その服装が全然違っている。花びらを模した虹色のミニスカートの下に、スパッツをはいている。上は、薄手の青い長袖のシャツに、さらにピンクの半袖シャツを重ね着している。腰には大きなリボンのように、赤い布が巻き付いていた。頭には帽子の代わりに黄色いカチューシャが。心なしか表情までキリッとしているようだ。

彼女は右手を天井に向けて掲げ、大きく足を広げてポーズを取った。そして、名乗る。

「契約の騎士、オースナイト参上ッ」

その周囲だけ、時間が止まっていたかのごとく誰も動かない。一人、キーノだけがヤンヤと囃し立てている。

「決まったね。望ちゃん……ううん、オースナイト」

そんなキーノに向かって、親指を立てて返す。気が大きくなっている。そんなオースナイトの手に、羽ペンが握られた。先ほどよりも少しだけ小さくなっている。片手で持てるくらいの大きさだ。

そんな二人を見て、ブラウニーが一声吠えた。

「きゃあつ、何よ、あたしとやろうつての？」

ふんつ、と鼻を鳴らすと、オースナイトは中指を立てて挑発した。「やれるもんなら、やってみなさいよっ！」

その言葉が分かったかどうか、ブラウニーは彼女に向かって突進してくる。

もはや、オースナイト……望の頭の中からは全ての疑問が消えてしまっている。どうして、ろくに教えられもしないで変身ができたのか、ブラウニーとキーノ達が何でこんなに姿が違うのか、両親とキーノとの関係、そもそも、豊達にキーノが見えること自体疑問だ。それに、肝心の妖精たちが暴走しだした原因さえ教えてもらっていない。だが、そんなことはどうでも良いのだ。

私もかつて経験したことがあるが、変身はすごく気持ちがいい。別人になれるし、気持ちが大きくなる。何でもやれそうな気になる。脳内麻薬が放出した、酔っているような気分になる。望もそんな状態なのだ。

突進してきたブラウニーをかわそうと、オースナイトがジャンプした。

軽く、敵の頭を越えてしまう。

ゆっくりと、着地した。

「あは、軽い軽い」

後ろを気にせず、ナイトがはしゃぐ。

「危ないっ」

キーノが叫んだ。彼女の後ろからブラウニーが突進してくる。ナ

イトはそれに気付かず、まともに体当たりを食らってしまった。

遊が一瞬飛び出しかけて、気が付いて顔を背けてしまう。怖いのだ。

「あいたたた……」

お尻をさすって、オースナイトが頬を膨らませた。

「よくもやったなあ。あたしの怖さを思い知らせてやるんだからあつ」

そういうと、ナイトはガスコンロに羽ペンで文字を書く。『いつしよにたたかいましょ?』、そこにはそう書いてあった。そして言葉を唱える。

「妖精王の名において、我、汝と契約す。ガスコンロッ」

オースナイトの髪が、ゆっくりと持ち上がっていく。カチューシヤが、淡く色づいた。ナイトは、頬をすぼめながら大きく息を吸う。「いっけえ!」

吐き出す。出てきたのは息ではない。炎だ。これには呆然としていた遊もびっくりしたらしい。

「わあっ! 何なんだよ、いったい……おい、パックッ」

「何だよ」

パックが遊の方を振り向く。

オースナイトが吐いた炎は、ブラウニーを遠ざけた。熱がっている。

遊にパックが説明する。

「オースナイトの力さ。契約した物の力を使うことができる。だから、火を吐き出すってことができたんだよ」

それを聞いて、遊が俄然張り切りだした。

「俺はどうやって変身するんだよ」

遊がパックに詰め寄っていた。その手には、剣を象ったキーホルダーが握られている。彼は何となく不安を感じているようだ。その証拠に、さっきから足踏みを繰り返している。

「ダメだね」

それに対してパツクはこう応えた。

「お前にはまだ足りない物がある。望みたいに、あっさり変身なんかできやしないさ」

冷たくあしらわれる。

ナイトは炎を武器にブラウニーを追いつめていた。しかし、ブラウニーは改心どころか、逃げ出す気配さえない。遊の心配そうな表情も、その辺にあるのだろう。何しろ、彼らはろくに妖精のことを知らないのだから。

ふいに、ナイトの吐いた炎を敵が屈んで避けた。そのまま、滑るように突進してくる。

悪戯しか能のない彼には、体当たりくらいしか思いつかないのだ。炎で視界が遮られていたオースナイトは、彼の接近に気付いていない。

「のぞみつ！」

悲痛な叫びを、遊が放った。

「え？ きゃあああつ！」

今度はさっきのような軽いものではない。ゆうに二メートルは飛ばされている。

バシッ、卵で汚れた壁面に、オースナイトが打ち付けられる。

「くうう、いた……っ！」

絶句、それほどの痛みが、彼女を襲っている。畳みかけるようにして、ブラウニーが走り出した。角を前に……頭突きをする気だ。このままでは、彼女の土手っ腹に穴が開いてしまう。幼い子供に起こる悲劇にしては、あまりにも悲痛すぎた。羽ペンで抵抗しようと身構えているが、それは武器にするには貧弱だ。

遊はその状況を、目を凝らしてみている。叫ぶだけでは、何か足りない、そんな気配が伝わってくる。唇を噛みしめて、彼女に迫る刃を見ている。何か行動を起こしたいのに、何もできない憤り……それが、彼に一言を発せさせた。

「アンテッ」

握り締めたキーホルダーが大きくなる。彼はそれを確認もせず、ブラウニーに投げつけた。

ちょうど、オースナイトと敵の間に、そのギリギリの所に剣が突きたつ。目を閉じていたナイトが、

「ふえ？」

と、半泣きでそれを見上げている。

「ユウが……やったの？」

ブラウニーが吠えながら振り向いた。茶色く、しかし体毛のない体が、怒張って見える。それだけ邪魔されたことが気に入らなかったのだらう。

キーノが飛び出した。敵の目の前を飛び回って、翻弄する。

「オースナイト、今の内に何か新しいものと契約してっ」

オースナイトは、目をこすりながら辺りを見回す。しかし、混乱した頭ではよい考えが浮かばない。

「あーん、ダメだよお」

「そんなこと言わないでよ。しっかりして、約束でしょ」

契約書のことを言っているのだ。しかし、無理なものは無理で、彼女は必死に辺りを見回すだけになっている。

遊は、その時パックに詰め寄っていた。

「パック、教えるよ。どうやって変身するんだよ」

パックは返事さえしない。遊はさっきから足踏みばかりだ。気が急いで仕方ない。

ちょうどその時、キーノが叩き落とされた。

「きゃあっ」

頭を打ったようで、起きあがろうとしない。気絶しているのだ。そして、関心は改めてオースナイトに向く。

「来るなっ！」

炎を吐いて応戦するのだが、いかんせん既にブラウニーは馴れてしまっている。全く動じず、ナイトの息が切れた瞬間にゆっくりと歩み寄る。

横つ面を叩かれた。

勢いで倒れる。

そこで、遊が何か吹っ切れたような表情をした。

「パック、頼む。この通りだ」

彼は、土下座して懇願していた。何度も頭をこすりつけている。

「頼む、あいつを助けたいんだ。でも、いつものオレじゃ助けられない……頼むから、変身の仕方を教えてくれっつ」

今まで、腕を組んで傍観していたパックが、羽ばたいた。

一瞬でブラウニーの顔面にぶつかる。

「グウッ」

たまらず彼は体勢を崩した。

なおもパックはブラウニーを挑発する。

「ほら、来いよ、ノロマ野郎！」

それと同時に、遊に目で合図した。

剣を取るように。

彼はそれを察して走る。走ったままで剣を取り、オースナイトの前に出て構えた。

「ゴメンな、望……お前にばっか戦わせちゃ、男がすたるってもんだよな」

今までの彼と、違っていた。目の輝きが、口元が、それまでの幼さを残していなかった。一人の少女を守る、騎士の顔だった。そんな彼を、彼女はボーっとした面持ちで眺めていた。

「妖精王の名において、我、汝に命ず……」

ふいに、パックがその言葉を口にした。相変わらず飛び回って攪乱している。スピードはかなり速い。それこそ、目に止まらぬ速さだ。

「妖精王の名において……我、汝に命ず……」

遊が同じ言葉を詠唱した。同時に、剣を高く掲げあげている。

「精霊よ、集え」

「精霊よ、集えっ」

剣の柄に、四本の帯がついている。赤、黄、白、黒……それが、それ自体が輝きだした。光は増し、四色の帯となって遊を包む。迷彩服に身を包んでいた遊が消えた。

そして、言葉。

「望はオレに勇気をくれた。望の勇気がオレを変えてくれたんだ。そんなちっちゃな勇気、応援してるぜ。望、一緒に戦おう」

光が薄れていく。

コットン地のグレーの半ズボンに赤い衛兵のような服装、頭にはこれも赤い、ベレー帽だ。腕には金のわかをつけている。そして黄色いスニーカー……ゲリラ戦には向いていない選色だが、そういった雰囲気はある。

戦うために生まれた、ナイト。

彼はゆつくりと構えた。

剣を斜めに構えて、相手を睨みつける。そして、名乗った。

「勇気の騎士、ブレイブナイト、参上」

まるで気色が違う。

望は、変身してもそう性格に差がでなかったが、彼は全く違っていた。彼の理想、だろうか。ずっと男らしい気配を身にまとうている。

蛹が孵った。

彼は台所の惨状を見回し、キーノを見て、最後にオースナイトを見た。彼女は遊の変化に気付いたのだろうか。ボーツとしている。

ブラウニーは光に反応し、ブレイブナイトの方を向いた。グウウ、という呻き声が、彼の心中を表しているようだ。

遊は……ブレイブナイトは手を差し出してオースナイトを助け起こす。

「あ、ありがとう」

戸惑いながらも、彼女は礼を言った。そして、勇気の騎士は自分の手を眺めながら何度もうなずいている。

「なるほどな、どういうことかは知らねえけど、自分が何をすれば

いいのか、分かるぜ」

剣を再び高く掲げあげ、彼は詠唱する。

「妖精王の名において命ず……エアリエル」

柄に垂れ下がっている四本の帯の内、黒い一本が切れて離れる。

やがて一つの女性を象ったそれが、剣に宿る。

パックが、やれやれ、といった感じで遠く離れて行く。その先には気絶したキーノがいた。

それを見送って、ブラウニーがナイトに突進してくる。

落ちて着いてそれを見ているブレイブナイト。

上段に構え、そして振り切った。

まだ距離はかなり離れている。少なくとも剣撃が届く範囲ではない。

だが、ブラウニーの体は裂けた。縦に、真つ二つに。ちょうど、ブレイブナイトが振り下ろした剣の軌跡と同じだった。

断末魔の叫び、そして、敵は倒れた。

「チョロいぜ」

ナイトは吐き捨てるように言う。

オースナイトがそつと彼の腕をつかむ。気分が悪いのだ。真つ二つに割けた死体など、私もあまり見たくはない。が、それは違った。裂け目から、何かが這い出してくる。ゴソゴソと、可愛い角が、そして茶色い皮膚をもった子鬼のようなものがでてきた。

「プハッ、ああ、なにになに？ いったい、何があったんです？ ああっ！」

望がビクツと、体を奮わせた。いつの間にか変身が解けている。遊も同じだ。構えていた剣も、小さなキーホルダーに戻ってしまった。小鬼は二人に構わず、いそいそと台所の片付けをしていた。

「まったく、いったい誰がこんな事を…… 恵さんに頼まれていたのに…… ホントにもう……」

その様子を見て、パックと、意識の戻ったキーノが笑った。
「戻ったみたいだな」

「そーね。後は豊に任せましょ」

それを、望は聞き逃さなかった。

「ねえねえ、キーノお、さっきからあたし、訳わかんないことばかりなんだけど……」

再び、キーノが笑う。

「そうね、じゃあ、豊が戻ってきたら、話しましょうか。パツク、いいわね？」

パツクがうなずいた。

どうやら、二人……遊と望は合格点を与えられたようだ。妖精の騎士としての。

食器を片付ける音がする中、不安と好奇心が広がっていった。

第六場

第六場

「つまりね、この原因を作ったのは、王様とお后様なの」

キーノはそう言った。間違っではない。私も、そう思う。

「夫婦喧嘩、ってやつよ。お后様は八つ当たりで妖精たち……あ、暴走した妖精のことを、私たちはボガードって呼んでるわ……それをけしかけて、王様を困らせようとしているの。王様は私たちに……正確にはフェアリードクターに後を任せて、どこかに消えてしまった。どこにいいのか分からないけど、きっと王様は事態の收拾のために頑張ってると思うの。だから、望ちゃん、遊君、私たちも頑張らましようね」

勘のいい奴だ。私はここにいます。ただし、妖精の中でも最も魔法力のある私が姿を消しているのだ。キーノやパックになど、見つかるはずもない。

片付いた台所が見渡せる。居間で、豊、恵、望、遊、キーノ、パック、そしてブラウニーが談話している。灯はない。まだ帰ってきていないのだ。たぶん、遊びに行ったのだろう。

「それは分かったけどさ、パパ、聞かせてよ。パパ達は、キーノのことを知ってるんでしょう？ パックのこと……。それに、ブラウニーだって……ねえ、パパっていったい、何者なの？」

望は泣きそうな顔でそう尋ねた。今まで知っていた父親が、知らない一面を見せた。そのことが不安なのだ。

豊は笑って、望の頭に手を置く。もう片方の手で眼鏡を直しながら、話を始めた。

「望、お前にもブラウニー達の姿は見えただろう？ 私たちの家系はね、代々そういう『透視能力』を持つ家系なんだよ。見えないはずのものが見える力、それがセコンド・サイトだ。私も恵も、それ

を持っている。遊君がもっていたのは意外だけど、望にはその素質が十分にあつた。妖精王はたぶん、そのことを知っていたから、望を選んだんじゃないかな？」

彼が喋るたびに、くわえたタバコが揺れる。やはり、火はつけていない。望は頭に置かれた手の隙間から父親を覗き込む。その瞳を見て、豊は続けた。

「フェアリー・ナイトに、だよ。妖精は、自分たちを見た者に力を授けることができる。それが君たちの変身能力だ」

豊がキーノを見る。彼女はうなずいた。

「その通りよ。あなた達には、その素質があつたの。望ちゃんにはなんでもやり通す行動力……つまり、約束の力、結束の力があつた」
「遊の奴はてんでダメだったけどな。最後に見せたあの土下座、あれが、おいらが欲しかったお前の力なのさ」

遊がパックを頭の上から降ろす。手の平に乗せ、改めて問う。

「オレの力つて、なんだよ」

パックは望を親指でさして言った。

「何かを守るためなら自分のプライドを捨てられる勇氣、つまり、騎士道精神だよな。のぞみい、聞いてたか？ こいつ、あの時『望を守りたいんだ』なんて言ってたんだぜ」

遊があわてた。パックの口を押さえようとしている。しかし、彼の軽口は留まることを知らない。

「そういえば『望が好きだから』なんて事も言つて」

「ないだろうがつつ」

両の手の平で、パックは挟まれた。望は顔を真っ赤にしている。

キーノが大声で笑った。パックのことを笑っているのだ。

遊は、そんなトマトの望に弁解している。

「言つてねー言つてねえ……絶対にそんなこというもんかあつ」

その絶叫は、逆効果だったようだ。

「なによ、ユウ……そんなにあたしのことが嫌いなわけ？ ふんっ」
思い切り足を踏んづける。

「ぎゃああああ」

遊が飛び上がった。それを、キーノとパックが眺めている。ぴよんぴよんと跳ね回っている彼を追いかけていった。

三人がいなくなつて、望が改めて訊いた。

「じゃあ、ブラウニーは？」

それは恵が答える。

「ああ、彼はね、あたしが連れてきたの。ほら、住むところないつて言つし、なんでもお手伝いしますから、なんていうから、ね？」
そういつて、恵は豊の腕を掴んだ。仲のいい夫婦だ。毒氣に当てられそうで怖い。

「じゃあ、家でいつの間にか食器が綺麗になつてたりするのはこの子の仕業？」

ブラウニーは先ほどまでの面影が無く、ずいぶんとごちんまりした、可愛げのあるものになつていた。こちらの方が、本来の彼の姿だ。『こいつ』呼ばわりするのは難しい。

その彼が、自信満々の顔をして、喋りだした。

「そうですよ。私が頑張つているというのに、望さんも灯さんもちつとも気付いてくれないんだから……ああ、この前、望さん夜中に起きて来てジュース飲んだでしょう？ ちゃんと後かたづけしてくださいよ。それに、ゆで卵が好きなのは分かりますけど、金属の食器にカラを入れないでください。あれつて薄皮がとつても取りにくいんですからね」

望が呆れてみている。暴走して呻つていた彼とのギャップに、驚いているのだ。ひとしきり呆れた後、溜息をついた。

「はあ……あたし、こんなのと戦つてたの？」

豊が言葉を返す。

「妖精はみんなお喋り好きだからね。キーノも、昔はもっとお喋りだったよ」

その話題に望が飛びついた。

「知つてたの？」

「昔ね……ちよっとお世話になったの」

いつの間にか、望の短い髪の上にキーノが乗っていた。豊が補足する。

「もちろん、フェアリードクター木下さんのことも知ってるよ。彼とは今でもたまに会うからね。今回のことも、ちよっただけ相談されて……もしかしたら、とは思ってたんだ」

いつの間にか、遊が戻ってきている。パックはその頭に乗っている。遊は望を睨み付けていて、それに対して彼女は苦笑いを浮かべた。照れ隠しか、望は立ち上がったて息巻いた。

「よおし、大体の事情は分かった。ようするに、ラスボスは女王様なんでしょ？ 見つけたして、ぶったおすっ！」

物騒なことを言う望に、キーノが飛びついた。

「キヤー、ダメダメ ティーターニア様をぶったおすなんてとんでもない。とにかく、私はしばらく望ちゃんと一緒にいるから、ボガードが現れたら戦って欲しいの。遊君も、いい？」

意気を削がれた望は渋々、遊は自信満々の表情でうなずいた。どうやら、一段落したようだ。

その様子を見ながら、豊がこう呟いた。

「夏の夜の夢、か」

そして、タバコに火をつけた。

幕間一

幕間一

『THE TEMPEST 泣き虫の王女様』

簡単に得た宝は簡単に失うように出来ている。

「窓の外は雨……つまんないね」

今日、私は友達を無くしちゃった。いいんだ、そんなに好きな子じゃなかったし。

私は泉、愛。小学四年生の女の子。

いま話しかけてたのは、ペンギンのぬいぐるみ、源さん。雨の日に遊びに来てくれる友達なんて、私にはいない……。

でも、寂しくなんかないんだあ。だって、私の部屋にはたくさんぬいぐるみ達がいて、源さんも、太郎君も、北島さんも、みんな私のことを好きだって言ってくれてる。

たぶん……。

「源さん、ねえ、遊びましょう」

あ、ダメだ。雨がうつったみたい。目からポロポロ……こぼれてくる。

雨はひどくなるばかりで、やんでくれそうにない。いま外に出たら、風邪ひいて、明日、学校休めるかも。やってみようかなあ。

は……あ。

こどくう。

つまんない。

「う、グスッ……ふえーん……」

泣いちゃダメってわかってるのに、どうしてもダメだ。泣いちゃう。

想父様や恋母様がやってきちゃう。

涙を拭いた。しゃっくりは出るけど、泣き声は出さない。だって、

シンパイかけたくないもん。

「えーん」

え？ 私、泣いてないよ？

でも、聞こえる。小さな小さな声が。

ちよっとだけ、怖い。

でも、行ってみたい。

「どうしよう、源さん……」

決めた。源さんと一緒に、見に行こう。

カサをもって裏庭に回る。ウチってすっごく広いんだあ。動物は飼ってないけど、花壇があるし、春にはチューリップがたくさん咲いてくれる。夏には少し小さいけどプールで遊べるし、秋には焼き芋を焼けたりするの。冬は……嫌い。

小さな足音、私のだ。パチャパチャ……鳴っている。

源さんはだっこしてる。

ギュツと抱きしめて……源さんの目が飛び出すくらいに。

その角から、泣き声が聞こえてきているみたい。

「お母様あ……どこあ……」

迷子かな？ お母様を捜しているみたい。

私は、急に怖くなくなつて、角を曲がりながら声をかけた。

「迷子なの？」

私も、迷子の子もビクツとなつた。ずぶ濡れの小さな子供……青い髪、緑の目……チヨウチヨの羽。

私の手の平に乗るくらいの小さな人だ。

チヨウチヨの羽が付いている人だ。

私はそれを、想父様に聞いて知っている。

「妖精さん？」

そつと近づいていく。その子は、怯えたようにあとじさつて、飛んで逃げようとした。だけど、羽が濡れて飛べないみたい。

追いつくのは簡単だ。だって、体の大きさが全然違うもの。

カサが飛んだ。でも、いいの。私は妖精さんを手の平で包む。妖

精さんは大きく目を見開いた。

「あなた……セコンド・サイトの持ち主なの？」

私には、何のことだか分からなかった。

ハンドタオルをかぶせてあげながら、私は妖精さんに話しかける。

私も、頭を拭いている。恋母様へのいいわけに困っちゃった。

「ねえ、お名前はあ？」

「アルテム」

「どこから来たのお？」

「十二夜の森」

「この羽、綺麗だねえ」

「モンシロチヨウの羽ですわ」

おもしろくない。いじわるう。

妖精さんは……アルテムさんは黙って頭を拭いている。

綺麗な髪、暖かそうな羽毛の服……彼女はハンドタオルの端を持つて、ゆっくりと羽を拭きだした。両手で挟むようにして、ゆっくり、ゆっくり拭っていく。

「大事なんだね、その羽」

アルテムさんがこつちを向いた。目と目が合う。私はにっこり微笑んだ。

そうしたら、アルテムさんはちよつと顔を赤くして向こうを向いてしまった。可愛いなあ。

そして、ちよつとどもりながら、応えてくれる。

「は、羽が無くなったら、ただの小人でしょ」

それがおかしくて、笑っちゃった。妖精さんには、それがクツジヨクだったみたい。

「なによ、笑うことないんじゃないですか？」

「やん、怒らないでよあ……ごめんなさい」

素直に謝ると、クスツと、漏らしたような笑いが聞こえる。

「むう、アルテムさんも笑ったあ！」

「あはは、ごめんなさいね……だって、おかしいんだもの」

何だか、打ち解けてしまったみたい。

そして、全身隅々まで乾いてしまった妖精さんは、改めてお礼を言ってくれた。

「ありがとう、まさか、こんな所でセコンド・サイトに会えるとは思いませんでしたわ」

私にはそれが疑問だった。

「ねえ、セコンドサイトって、なあに？」

彼女は、薄く微笑んで、口を開く。何だか、とっても綺麗に見えた。

「セコンド・サイトというのは、透視能力のことですわ。もって生まれた力で、第六感みたいなもの。それがあると、妖精を見ることができるのです」

うーん、ようするに、もう一つ特別な目がある、ってことだろうか？

そのことを言うと、アルテムさんは笑った。

「ふふ、確かに直訳するとそういう意味になるかもしれませんがね。でも、違いますわ。そう……言ってみれば、心の瞳、でしょうか？

ここに」

そういつて、アルテムさんは私の胸を指す。

「わたくしとあなたを繋ぐ何かがあるの。だから、見えてしまうのですわ」

その言い方は、私には少し難しかったけど、何となく分かってしまった。私には、妖精さん達と似たところがあるんだ。だから、見えるんだと思う。

私が自分の胸に手を当てていると、彼女が言った。

「あなた、わたくしの騎士になりませんか？」

どういうことかと訪ねると、お母様を捜すのを手伝って欲しい、ということみたいだ。

「いいよ」

私はあっさりと返事した。

浮かれていたのかも知れないなあ。

友達が出来た、それが嬉しかったの。

でも、後悔はしていない。

それは、ずっと後になっても同じだと思う。

何があっても、どんなことになっても、私はこのときの返事を後悔したりしない。

私には、友達がない。でも、それを寂しく思ったことはない。

それは、源さん達、ぬいぐるみさんがいるから。

私と、アルテムさんは、心のどこかで繋がっている。

私と、ぬいぐるみさん達も、きつとどこかで繋がっている。

「これをもつてちょうだい」

小さな、お菓子みたいなステッキだ。

「そして、こう言ってみて『アンテ』」

私の心が、どこかで弾けてしまう。

黄色い星が、私の周りをクルクル回っている。目の前が、全部黄色になった。

そんな中で、アルテムさんの声が聞こえた。

「あなたは、どんな願いを、どんな自分をもっているのかしら？」

星が消えていく。私は独りでに叫んでいた。

「純真の騎士」

第一場

第二幕

『良い子、悪い子、普通の子。この娘はいつたい何なのよ?』

第一場

太陽が、眠たそうにその光を射し込ませていた。

屋根の上で、私は相変わらず一休みだ。電線にとまる雀たちも、私には一向に構わないでいてくれる。それが、何よりも嬉しかった。ゆっくりと、目覚ましが私の視界を明るくしていく。天然の目覚まし、陽の光。遠くからゆっくりと、登校する学徒のように。

「ん、朝とは辛いものだな」

影法師たる我らにとつて、朝は全てを暴く真実の光だ。できることならそつとしておいて欲しいのに、ことさらに人の秘密を暴き立てようとする。

それとは別にしても、普段気ままな生活をしている我らにとつて、長いのと短いのとに追いついて立てられている人間たちの暮らしは、理解できない。

曙の女神との追っかけっこだ。

しかも勝利者に何が与えられるわけでもない。人間とは大したボランティア精神の持ち主だと、私は常々思っていた。

それにしても、太陽の光が眩しい。人はみな、泣きながら、この世にやって来たのだと言うが、なるほど、この眩しさでは泣きたくもなるというものだ。

「のーぞーみつ、お姉ちゃんはまだもう用意してるんだからねっ、急がないとおいていかれちゃうわよ」

恵の声が聞こえる。そろそろ、幕が開く頃だ。

第二場

第二場

窓の外からでも、望の大きなあくびが聞こえそうだ。

目をこすりながら、彼女は服を脱ぎ始める。

可愛いクマ柄のパジャマ、その色は赤い。

脱いだ、というよりも脱ぎ捨てられたそれを、望が一瞬見やる。
たたもつかどうか考えているようだ。

しかし、ボーっとした瞳ですぐにクローゼットに向かう。クリーム色したジッパータイプのクローゼットだ。未だに眠りに捉えられたまま、その中からブルーのブレザーを取り出す。緩慢な動作、ブラウスを着て、スカートを履く。その時点で、望はくるりと振り返った。プリーツスカートが風に煽られたカーテンのごとくはためく。ロボット猫の目覚まし時計と視線があった。

針は八時半を指している。

沈黙、ストロボを当てられたかのようなコマ単位の動き、そして、望の大きな口が開く。

「なによお！ もうこんな時間じゃないっ！」

窓ガラスを越えても、その叫びは十分に聞こえた。
ドタドタと駆け下りていく望。

私は、その隙に姿を消したままでガラスを通り抜けていく。そつと窓枠に腰を下ろす。

直後、悲鳴が上がった。

「え〜〜！ なんてえ〜〜！」

望の声だ。

その時、クスリ、と小さな笑い声が出た。
途端に時計の針が動き出す。そして、階下からドタドタと駆け上がってくる音がする。

針は、七時五十分を指している。

派手な解放音を立てて、望が部屋に入ってくる。床がきしむような足音を立てながら、時計に近づいていき、おもむろにそれを持ち上げた。

そこには、苦笑を浮かべたキーノが立っていた。

「どう？ 遅刻しないで済んだでしょ？」

望の頬が、焼き上がった餅になった。

第三場

第三場

「もうっ、信じらんないっ」

望はまだ怒っている。先ほどのからのティタンのごとき行動からも分かるように彼女は感情屋、気分屋だ。見てみると全く飽きないが、少しは自重してもらいたいものだ。

それでも、ご飯を口に運ぶことは忘れない。

白いお米にタマネギが入ったみそ汁、望のリクエストでハムエッグが食卓に乗っている。後は少々 of 漬け物、海苔……。納豆は食べない家系のようだ。

そんな典型的な日本食の中、豊の持つカップには黒々とした液体が注がれていた。

「パパあ、いい加減、ご飯にコーヒーっての、やめてよね」

灯が非難する。望の隣に座っている彼女は、溜息をつきながらご飯を口に運んだ。

豊が返事する代わりに、その妻である恵が、灯にお茶をつぎながら応える。

「しょうがないでしょ？ 豊はコーヒー中毒で、コーヒーを飲まないで死んじゃうんだから」

その言葉に望が反応する。

「えっ！ そうなの？」

豊と恵が笑い、灯が呆れた。

「ばっかねえ望。んなはずないでしょ？ コーヒーの禁断症状で死んだ、なんてニュース、聞いたことある？」

「ない」

「いくらバカでも、ちょっとは考えなさいよね」

ひどい言われようである。しかし、灯の言葉にさほど傷ついた様

子も見せず、彼女は「はい」、などと返事をしている。

その横、望と灯の間のテーブルの上で、キーノがクスクス笑っている。

それを、灯が小突いた。

「笑ってんじゃないの。あんたもご飯食べなさいよ。居候さん」

怒ってはいるが、その表情は嬉しそうである。

灯にも、セコンドサイトはあった。昨日の夜、帰ってきた灯に豊が妖精の塗り薬を塗ったのだ。そして、改めて除光液で薬を拭いた灯は、望と同様にキーノの姿を見ることができるようになっていた。つまり、この家族に限っては、全員が透視能力の持ち主、ということになる。

そんな灯の言を受けて、キーノが頬を膨らませた。何だか望と似ている。

「だって、私は日本食なんて食べられないんだもん……そりゃ、全然ダメってことはないけど……やっぱり妖精バターの方が好きだなあ。ねえ、恵さん、ないの？ 妖精バター」

それに、ブラウニーが応える。

「森の司祭さん、私でさえ、月に一回しかもらってないんですから、贅沢言ってはダメですよ」

頭の上の角をピクピクと動かしながら、いなしている。

「ねえ、妖精バターって何？ 美味しいの？」

箸を口にくわえたまま、望がキーノに聞く。さすがに恵に怒られた。

「のぞみ、行儀が悪いわよ。えっとね、キーノちゃん、残念だけど、家には妖精バターは置いてないの。たまに、豊が木下さんの所からもってくるけど……我慢して、あたしの料理でも食べてくれない？ 後でケーキも焼いてあげるから」

最後の言葉を発しているとき、恵の瞳はとても輝いていた。どうやら、彼女は家族や遊の他に犠牲者を見いだしたようだ。

爪楊枝が二本、キーノの前に置かれている。彼女はそれを、不器

用につかんだ。しかし、上手く持てない。望が手伝ってあげようとするが、何しろこの大きさだ。手伝いようがない。

そこで、彼女は楊枝の先でご飯を突き刺すことにした。お猪口に入れられたみそ汁をすする。トン、とそれがテーブルに置かれ、次にキーノが感想を漏らす。

「美味しいじゃないっ」

昆虫を捕まえる蜘蛛のように、恵はその言葉を取り逃さなかった。「あら……それじゃまるで、あたしの料理がまずいみたいじゃないの？」

なぜか包丁をもったまま、彼女はキーノの背後に立つ。妖精は振り返って顔をひきつらせた。

望は箸をくわえたまま、その様子を黙ってみていた。灯も、興味はなさそうだがとりあえず横目で見ている。望は未だに妖精バターのことが気になるらしく、渋々、といった表情だったが。

恵の様子を見て、キーノが言い訳を始める。

「だって、昨日、望ちゃんがあなたの料理から逃げたから……きつとまずいんだと思って」

望が思わず、あつ、と声を上げる。その拍子に、口から箸がこぼれた。

同時に、笑い声が聞こえる。

それは、今までずっと食事を続けていた豊のものだった。

ゆつくりと立ち上がり、オーディオコンポに近づいていく。一枚のCDをセットし、ボリュームを調整しながら再生ボタンを押した。流れてくる曲にうなずきながら、白衣を着始める。

その行為で、恵とキーノのいざこざは消えてしまった。まるで予定されたことのように、皆はそれを見ている。もう一度、彼が席に着いた。

「妖精バターとは、古木の根元から生えてくる黄色い菌類のことだ。しかし、どれでもいいってわけじゃない。トリメラという種類が、一番好まれている」

豊が説明を始める。それに、キーノが補足を加えた。

「ついでに言うと、花崗岩の中に溜まった油も妖精バターっていうわね。あれは、とってもいい匂いがするし、それに甘くて美味しいのよ」

言葉と言葉の間に、音楽が漏れ聞こえる。

ヴィジュアルディの『四季』だ。

春の優しい音色から、夏の雷鳴に移り変わる。

恵が、皆にお茶を運んでくる。豊以外は全員が日本茶だ。

望が、それをすすって溜息をもらす。

「はあ、やっぱり、パパがいないとダメだね」

灯が賛同する。

「何だかんだ言って、主らしいことやってるしね」

恵は黙ってお茶を飲んでいる。湯飲みを置いて、そっと豊の腕をとった。

これが、月森家の毎朝の風景なのだろう。望と恵が騒ぎを起こし、灯がそれを冷ややかな目で見ている。そして、時間が来ると豊が収拾する。

キーノはその中に溶け込んでしまったようだ。齢二百にもなるう者が、よりによって望、恵と騒ぎを起こす役になるとは……情けない。が、彼女は前の騒ぎの時もそういった傾向にあった。結局はトラブルメーカーなのだろう。

時間は刻々と過ぎていく。

時計を見ていた皆が声もなく、一斉に立ち上がった。無言劇を見ているようなその風景に、キーノが戸惑っている。

灯はバックを、望はデイバックを、豊は通勤鞆をそれぞれ手にした。望がキーノをそっと手招く。

彼女を肩に乗せて、望が率先して玄関に向かう。続いて灯、豊、恵の順だ。

木の質感を漂わせた玄関に、靴を履く音だけが響く。カツ、カツ、カツ。三人の踵が鳴った。

「行って来ます」

「行ってらっしゃい」

日本人の一日の始まりだ。

第四場

第四場

望が通っている学校は聖ヘンリ学園という。

それくらいは下調べ済みだ。同じく、灯の学校も聖ヘンリ学園だ。つまり、そこは附属小学校、附属中学校があるのだ。望は附属小学校の六年生、灯は学園高等部の一年生になる。

制服はそう大した違いはない。

ブルーを基調としたブレザーで、胸元の赤いリボンが印象的だ。

望は、同じ服を着ているが頭に帽子をかぶっている。昨日の物と違うが、赤いリボンの付いたブルーのブルトン帽だ。それに、キーノからもらった羽ペンをつけている。ワンポイントになっていて、おしやれな感じがした。

ポニーテールを軽く跳ねさせながら、灯は望の横を歩いている。たれ目気味の、チョコレート色の瞳、スタイルのいい体をしている。望と比べると同じ人間の体から出てきたとは思えないくらいだ。

「ホント、同じ人間の体から生まれてきたとは思えないくらいね」
キーノが私と同じ表現で茶化した。

「どうしたことよ」

目を細めて睨み付けながら、望がキーノを責めている。

「あんたの頭も体も、貧弱すぎるってことよ」

二一、と目を細めて微笑む灯。そのすぐ後にケラケラと笑った。

自覚があるのか、望は頬を膨らませてから口を尖らせた。年齢差があるのだから、気にすることもないと思うのだが……やけに彼女はそれを気にしている。

「ぶう　、でも……やっぱりあたしって可愛くないのかなあ……」
珍しく殊勝な悩みを口にする。

「なに？　遊君のことが気になるの？」

キーノが冷やかす。

「ち、違うよお！ 誰があんなフニャフニャ男……好きになったりするもんか」

そうは言っているものの、表情は戸惑っているように見える。つまらぬ男でも女に惚れているときは、いつもよりちつとはましく見えるものだ。遊の方にはその気配を見た。しかし、望の気持ちは、どうも私には見えない。調査不足だ。思ったほどにも口が回らない、それが娘心というものだが、彼女もそうなのだろうか？

望の否定を笑って、それからキーノが疑問を投げかけた。

「それにしても、人間って不思議ね。愛する者同士が結ばれることで繁殖していくなんて……」

「それって、素晴らしいことじゃないの？」

灯が不思議に思って返す。

「でも、逆に言ったら、繁殖しなければならぬから、人間は恋をするのでしょうか？ それって非生産的な考えだと思うけど……」

いつでもキーノの胸には好奇心が宿っている。それはまるで髪の毛のように離れもせず成長していく。それは尽きることなく、ゆえに彼女は長い間日本を離れ、世界を旅して回ったのだ。

「じゃあ、妖精はどうやって増えるの？ たまご？ まさか、種から……芽がでて膨らんで、花が咲いてしぼんで、実がなって生まれてくるなんて言うんじゃないでしょうね」

『芽がでて』の部分から、歌うように調子をつけて望が訊いてくる。妖精はちよつと悪戯っぽく笑ってから、

「そうね、私は木の股の間から生まれてきたわ」と言った。

「ええ！ 本当？」

望は本気にする。そんな彼女の頭を、灯が小突いた。

「バーカ、冗談に決まってるだろ。木の股から生まれる奴がいるかっての」

鼻から息を出し、呆れている。しかし、キーノは望の反応を笑っ

てはいなかった。

「あのく、本当のことなんだけど……」

今度は、灯が驚く番だ。

「嘘でしょ？ 妖精って、勝手に生まれて来ちゃうもんなの？」

それを受けてキーノが説明を始める。望の帽子の縁に腰掛けて、指を一本立てた。望はそれを上目遣いで見ている。

「つまりね、妖精ってのは、一年に八回、ケルトの祭りの日に生まれてくるの」

望には、ケルトの意味が分からなかったようだ。首を傾げてしまう。結果、キーノはバランスを崩してしまつて、危うく落っこちそうになった。

「ケルトってのは、アイルランド地方のことよ。そこには、古代から八つの祭りがあつて、今日が六月二十三日でしょ？ 明日はミッドサマーといって、祭りの日の一つなの。夏が始まる日、ってことでね。その日、人間界と妖精界の扉が開いて、行き来できるようになったり、祭りに混じって妖精たちが踊ったりするの。そして、妖精は祭りの最後に妖精王の祈りによってその土地で最もお年寄りの樹木から生まれてくるのよ」

その光景を思い出すようにして、キーノは空を見上げた。

「老木が光り、枝がざわめく……。波のような音が、見ている私たちを包んでいくの。上を見上げると空には一面の雲。そして、その一部が割れて、月の光が舞い降りてくる。樹木はそれを受けて、いつそう輝く……。私たちは妖精王に続いて祈りを捧げるの。すると、光の粒がポン、と弾けるのよ。そこには、新しい命……。妖精はね、祈りが形になって生まれてくるの。純粋な心だけの命。自然に一番近い形で、私たちは生まれて来るんだわ」

ハア、と溜息が二つ漏れる。月森姉妹の物だ。

「素敵ねえ」

「かつこいいねえ」

前者が灯の感想、後者が望のだ。

「でしょ？……ところで、急がなくていいの？」

時計は、八時二十五分を指していた。学校が始まるのは四十分からだ。

そして、ここから学校までは、公園を通っていかなければならないので、どうしても十分ほどかかってしまう。

のんびりしすぎたようだ。

望が走り出す。

灯がそれを追う。

望の帽子の上で、キーノが二人を笑顔で見つめていた。

遊の家は、月森家から二分の所にある。

しかし、のんびりと立ち話をしていたために二人は遅れそうになっていた。

走って玄関までたどり着くと、ベルも押さない内にドアが開く。

「よう、朝から元気だな、灯」

まるで、遊を大人にしたかのような人物だ。つんつん頭も健在だ。しかし、がっしりとした体つきは、遊とは似てもつかない。

途端に、灯が表情を変えた。マーガレットのような笑みを乗せたのだ。

「まさるっ！ おはようっ」

「おう、遅かったな。ん？ ちょっと、やせたか、お前？」

勝が灯に顔を近づける。灯の頬が真っ赤に熟れた。そのままつつむくようにしている。そして、

「望ちゃんもおはよう」

灯から望に視線を移すと、彼はにこやかな顔で彼女に挨拶した。

が、望はいつもと違っていた。真っ赤になってうつむいている。

「ま、勝さん。お、おはようございます……はい」

照れているのだ。ところが、そこは望のこと、どうにもおかしな

調子になっっている。

そんな彼女の目の前に、勝が近づいてきた。屈んで、そっと望の顔を覗き込む。

キーノはそれを帽子の縁から見ていて、思わず顔を覆ってしまった。

「顔が真っ赤だね、風邪でもひいたかな？」

顔を合わせる。灯は望の気持ちを知っているらしく、楽しそうに笑っていた。

「ひゃあっ」

望が硬直して目を瞑る。心臓まで止めてしまいそうなくらいに、思い切り。

勝は、そんなことを意識せずにやっているのだろう。
と、大きな音を立ててドアが開いた。

「いつてきまーすっ」

口にはパンをくわえている。

遊だ。

望と勝の状態を見て、ポロリとパンを落とす。そして、走り出した。

「なにやってんだよ、兄ちゃんっ」

跳び蹴りを食らわせると、勝はバランスを崩して膝を突いた。後ろからパックがさらに追い打ちをかける。

立ち上がりかけた勝の足を思い切りすくったのだ。それで、彼は無様に転んでしまった。

灯が駆け寄る。そして、そのすぐ側にいたパックを殴りつける。

「お前かぁ。悪戯パックってのは」

ギロリと睨んだその顔は凍るほどに冷たい。

あのパックが萎縮してしまっただけくらいだ。

「いてて……まいったな、朝っぱらからひどい目にあった」

灯の肩を借りて勝が立ち上がる。遊を怒ろうともしない。それどころか、

「悪かったな、遊。彼女に不用意に近づいちゃってさ」

などと謝りさえたのだ。

「なっ、ち、ちがつ」

違うと言おうとした遊は、昨日のことを思い出したのか、そこで言葉を止めた。望はまた真っ赤になっている。

そんな望に、キーノが訊いた。

「ねえ、この人、誰？」

空に飛び上がり、一回転して、今度は遊のツンツン頭に乗る。その隣にパックが座った。

「遊の兄ちゃんだったさ。見たら分かるだろ。遊の奴、こいつに憧れてるんだってさ。ほら、髪型、同じだろ？」

恥ずかしさで口を利けない望の代わりに彼が答えた。キーノは、ふうん、と言って改めて勝の方を見る。さっきからの言動を見ていると、勝と灯は恋人同士で、それを知ってなおかつ、望は勝に仄かな恋を抱いているらしい。

しかし、その望のことを遊は好きなのであって……。なるほど、先ほど望の心がよく分からなかったのはこのためだったのだ。一人の男に一人の女、こんな簡単な法則が、人間にはどうして納得できないのか……。もっとも、だからこそ人間は発展してきたのであるうが。

「それにしても、遊君も大変ねえ。望ちゃん、灯ちゃんの彼氏に恋してるみたい」

「ああ、おいらも今見てそう思ったよ。灯と勝、似合いのカップルだと思わないか？ 望と遊も似合いの凸凹コンビだと思うんだけどな」

などと、本人の頭の上で勝手な世間話をしている。豊が言ったように、妖精は本来、口から先に生まれてくるものなのだ。

そんな状況に、遊が怒りだした。

「おい、こら、お前ら、人の頭の上で何くっちゃべってんだよ。さっさとどけっ」

頭をかきむしって追い立てる。勝はその様子を不思議に思い、灯は笑ってみている。勝には透視能力は備わっていないらしい。

飛び上がったパックが、遊をからかって舌を出す。それを、キーノがいさめる。

その時、ふと時計を見た望が、ようやく立ち直った。

「あーっ！ ほらほら、みんな、急がないと遅刻しちゃうぞお」

その声に、追いかけてこを始めたキーノとパックも振り返る。

時計は既に、八時半を指していた。

ちよつと駆け足気味に、四つの足音が木霊する。

聖ヘンリ学園の周囲には、一面の緑が張り巡らされていた。つまり、学園所有の公園である。

この町『御世路町』は、学園を中心に発展してきた町だ。町の中心に学園があり、その周囲に公園が、さらにその周囲に四つのブロックに分けられた住宅街が、そのさらにさらに外側にジャンルによって四つに分けられた商店街が並んでいる。まるで円舞台のように同心円上に配置されたこの町は、この町を興した人々の意向でこうなっている。彼らは、木下と同じく、我ら妖精を助ける身の者だ。この町は、妖精のためにこういった配置になされている。つまりかつてのフェアリードクターが霊的に安定するように町を配置したのだ。

今でも、晴明のことを思い出す。

彼は、私たちに安住の地をくれた人物だ。

さて、かつての友の話も良いが、今のナイトのことも気にかかる。この私の窮地を救ってくれる人物だ。

公園を抜けて、四人は校門までたどり着いた。正面に大きく掲げである時計は始業前一分を指している。

「じゃあね、お姉ちゃん」

「望もね」

そういつて、二組に分かれる。

高等部は東、附属小学校は西にある。この学校は、エスカレーター式ではない。だからこそ、附属の小学校と附属の中学校になっているのだ。だから、望たちが中学校に行こうとすれば、隣の公立中学に行くか、試験を受けて附属中学校にはいるしかない。バカだバカだと言われていても、望は意外に頭がいいのだ。ちょっと抜けてはいるが。

「それにして……勝さんの話じゃないけど、お姉ちゃん、近頃やせたよね」

望が思い出したように言う。

「そうなの？」

キーノが、望の耳元でそう返した。

「うん、なんだか、みるみる痩せていつてるみたい。恋煩いかな？」

「そりゃあ、お前のことだろ？」

パックがからかった。

「なによそれ？」

どうやら、望は自分の勝に対する想いが気づかれていないと思っているようだ。両手を持ち上げて、パックが呆れる。

キーノは、何かを考え込んでいた。

校庭にはいる。

一気に音が広がる。

歓声、さざ波のような子供達の嬌声だ。

キーノがびつくりして耳を塞ぐ。それを、パックが茶化した。

「何だよ、このくらいで。これだからガキはダメなんだよな」

ムツとして、キーノが言い返す。

「何よ、じじい」

口を思い切り広げて、イー、と舌を出す。

二人が再び喧嘩を始める前に、遊と望は二人の手を握り、走り出した。

同時に、チャイムが鳴る。

「いっくよ、ユウツ。今日も元気にがんばろおっ」

「ばっかやろうつ、お前は少し大人しくしとけよっ」
風が、二人の声を運んでいった。

第五場

第五場

望たちの教室は、第一棟の三階にある。ここまで言えば分かるだろうが、棟は二つあって、第一棟に四、五、六年生が入っている。第二棟はそれよりも下級生が使っている。

望たちの教室から真下の方に、プールがあった。反対の廊下側からは校庭が見える。校庭は、二つの棟に囲まれるようにしてあるのだ。

「おつはよお！ あつ、よかったあ。間に合ったみたいだよ、遊つ」
望が教室にはいると、一気に人だかりができた。

「望ちゃん、昨日の探検どうだった？」

「遊君と何か秘密の遊びしたってホント？」

「お化けがでるんだよね、あそこ」

「違つて、亡霊がでるんだよ。あそこには戦争の時の兵隊さんが夜な夜な……」

勝手なことを言っている。その亡霊だかお化けだかが私たち妖精のことだとすると、ずいぶん心外だ。だが、まあ、悪戯して人をおどかす、という意味では大した違いはないか……。

望たちは昨日の森の探索のことをみんなに予告していたみたいだ。しかし一体どうなっているのか、皆目その正体も分からぬというのに噂だけを信じてしまうなんて。

これでは、私たち妖精がこの町の邪魔者のようではないか。いつだってこの町を守ってきたのは私たちだというのに。

望は、複雑な表情で頭の上のキーノを見ている。遊も同様だ。しかし、いつまでも話さないわけにはいかない。

「そうねえ、話しちゃおうか、ユウ」

「勝手にしろよ、だけどな」

意味ありげに時計を指すと同時に、古風な音を立てて扉が開き、先生が入ってくる。

「なーにやってるっ、朝の会を始めるぞ」

わー、と各々叫び声を上げながら席に着いていく。どうして子供というのはいちいち声を上げなくては気が済まないのだろう。

かくて、授業は始まった。

窓側、後ろの席に帽子を脱いで望が座り、その前に遊が座る。

「なあ、これからなにすんだ？」

パックが遊の髪を引っ張って聞き出そうとしている。

「ああ？ 授業に決まってるだろ。勉強するんだよ。学生の本分さ」
気取った言い方で遊は返す。

「楽しい？」

今度はキーノだ。望に向かって首を傾げる。

「楽しいわけないじゃない」

こちらは溜息をつきながらだ。二人とも、学校は好きだが、授業は嫌いな人間のようだ。

キーノとパックは顔を見合わせた。

『じゃ、どっか行つてよう』

言うが早いか、あつという間に窓から飛び出してしまふ。

「あいつら……」

遊が頬杖を突いて呆れる。

外は、日本晴れだ。

妖精とは本来、黄昏時の生き物だ。だが、浮かれ小坊主達は陽気に誘われて外にでてくる始末。ロビングットフェローも例外ではない。キーノはその好奇心の強さから、学校を見て回らずにはいられなかった。

誰だって、妖精を一カ所に留めることなどできないのだ。

突然、スピーカーから雑音が漏れ出す。

かと思うと、一定の拍を取りながらチャイムが流れてきた。

鈴の音に反応して餌をねだる犬のごとく、彼らは一斉に吠え立てる。

ざわざわ……わあわあ……教師もそれに追いつてられるように授業を切り上げてしまった。

「じゃあ、今日はここまで」

それを合図に、騒ぎがぴたりと止まる。

「きりーっ」

ザッ、と音を立てて総勢三十五人が立ち上がる。

「れーい」

今度は思い思いの角度で頭を下げる。

「ちやくせき」

ガタガタと、これだけは揃っていない。すぐに動き始めるもの、一度席に座って教科書を片付けるもの、大きなあくびをするもの、人それぞれだ。

先生がでていくと、遊が椅子の背に腹を当てながら座った。つまり、椅子に馬乗りになった格好だ。

「あいつら、どこまで行つたのかな？」

妖精二人のことを噂する。

「さあ？ 意外にプールでおぼれてたりして」

「蚊と間違えられて潰されたり」

「図書室でかくれんぼしたり」

『校庭の木の上で昼寝したりっ』

最後の噂だけ、二人の声が重なった。

「あはは」

「はは」

思わずふきだしてしまう。

「楽しそうじゃない、お二人さん」

そんな二人を冷やかす者が現れた。望が振り返る。

「キーちゃん」

呼ばれた少女は、ボーイッシュな髪型をし、望よりも多少ふくやかな体つきをしていた。太っているわけではなく、体が大きいのだ。「相変わらずじゃないの。昨日何かあったの？」

彼女の興味も、森でのことにあるようだ。

「え、え？ なにもないよお」

望は手をブンブンと振り回しながら否定している。それを見て、キーちゃんはひよい、と肩をすくめた。

「なによ、せっかくのチャンスなのに、なーんにもしなかったの？」

これは、遊に向かって発せられた言葉だ。どうやらこの少女、かなりのお節介焼きらしい。

「何だよ、それ」

「告白とかさ、キスしたりとかさ、それ以上は……子供には言えませーん」

ずいぶんませた娘だ。意味が分かって言っているのだろうか？

望は、顔を真っ赤にしているので、知っているようだ。遊は平然と受けている。顔色も変わっていないし、恥ずかしがってうるたえたりもしない。

それがいつもの彼の反応と違ったのだろう。キーちゃんは「へえ」と驚きを露わにした。

「なんだか、変わっちゃったね、ユウ」

「え？」

遊も望もキーちゃんの顔を覗き込む。

「何だか大人になったっていうか……格好良くなったみたい」
それが何を意味しているのか、三人には分からないだろう。原因は昨日の変身にある。彼は自信をつけたのだ。『本当の勇気』を身につけたからこそ、彼は変わることができたのだ。もちろん、自覚はないだろうが。

その証拠に、遊はこんなことを言っている。

「いまさら誉めたって何にもでねーよ」

それが、彼が大人になりきれない証でもあるのだが。
しかし、望は違っていた。

何だか真剣に考え込んでいる。

遊が、怪訝に思っ望の顔を下から覗く。

「わあっ」

大げさに驚く望に、

「何だよ、お前、変だぞ？」

と訝しがって見せた。

「何でもないよ。ほら、だって、遊が格好良いなんて、ひょっとしたら地震でも起こるんじゃないかって……」

ずいぶんな物言いである。

案の定、遊は手を振り上げて望を追いかけ回す。おなじみの光景らしく、学友達はヤンヤと囃し立てた。

その中で、キーちゃんだけは未だに首を傾げている。

「こりゃ、なーんかあったわねえ」

勘のいい少女だ。

そして、次の授業が始まった。

遊び疲れたのか、キーノとパックは帰ってきて窓にもたれかけながら居眠りしている。二人並んで寝ている姿を見ると、まるで人形のようなようだ。

そんな姿を見て、遊はシャープペンを口にくわえながら毒づく。

「こいつら、何のためにここにいるんだ？」

「暇だからでしょ？」

こっそりと望が話しかけてくる。

先生が本を持って教室内を歩き始めた。慌てて口に手を当てた望は、首をすくめて、言い訳のように外を眺める。

窓の下では、歓声が漏れていた。

背の高い木々が、それでも望の眼下にある。その木漏れ日の中で、望よりも小さな子供達が水泳の授業を始めていた。六月二十三日、下級生のプール開きの日らしい。よくよく見ると、今週の予定、の所に『プール開き』と書いてある。他には、ない。夏休みも近づくと、子供達の心は既に海やプール、スイカにアイスなど、夏の風物詩に飛んでいつてしまっている。そこに、虫取りなどが入っていないのが、現代の子供らしいといえbraしいのだが。

望は、その一枚の風景を見て微笑んでいた。羨ましいという思いが半分、下級生達が微笑ましいという思いが半分だろう。まだまだ、無条件に郷愁を覚えられるほど、望は大人ではない。

ふと、プールサイドで走り回っている内の一人が立ち止まった。長い髪が、キャップに収まり切れていない。宝石のような輝いた瞳を持った少女だ。

望も、その子に気付く。

どうやら、望を見ているらしい。

ちょっと不安そうで、しかし何かを言いたそうな瞳……二人は、ほんの少しの間、見つめ合った。

そして、何を思ったのか望が手を振る。たぶん、軽い気持ちで、だろう。

それを見た少女は、急に顔を真っ赤にして走り去ってしまった。そのままプールに飛び込む。

望は、びっくりさせてしまったと思い、ちょっと舌を出して笑う。その背後から、望は頭を叩かれた。

「いたっ」

同時に舌を噛む。

振り返ると、先生がいた。かなりご立腹のようだ。表情のない瞳で望を見下ろしている。

「にやにひゆるんえふか、いひやいにやにやい」

上手く喋れないらしく、何を言っているか分からない。

「何するんですか、痛いじゃない。そう言ってます」

傍らで、遊が翻訳している。生徒達がどつと笑った。

だが、先生は穏やかでない。

「このこのこのこのお！ お前は どうして いつも いつも 先生
の授業を聞いてくれないんだあ」

絶叫である。泣いてさえる。拳を作って、彼は心から叫んだ。

そんな彼の肩を叩きながら、望は「どうどう」と慰めている。望
が授業を聞いていないのは、嫌いだからではなく、単に集中力がな
いからだと思うのだが。

「そのくせ、成績だけはいいいんだから……先生は……先生の立場は
一体どうなるんだああああ」

もはや苦笑いを浮かべるしかない。遊も どうして いいか分からず
におろおろとしている。

キーノが半目を開けてそれを見ている。あまり興味を引かれなか
ったみたいで、すぐにまた目を閉じる。パックに至っては いびきさ
えたてている。声が聞こえないからいいようなものの……。

その時、下の方から別の絶叫が聞こえてきた。

「きゃああ、せんせいっ、あすかちゃんがつ」

プールの方からである。

生徒が一斉に窓に駆け寄る。望も、遊も素早く窓から身を乗り出
した。彼らの担任は一人置いてけぼりである。誰も相手してくれな
くていじけていたが、教師の責任感が顔を出し、何事かと生徒達と
ともに顔を窓の外に出した。

「こら、ちよつとどきなさい……高橋先生っ、いったい、どうした
んですっ」

呼ばれた先生が、上を見上げた。両腕に女の子を一人抱えている。
「何でもありません。心配しないでください」

やや小さめの声で、彼はそう言った。そのまま、何事か生徒に指
示を出して、自分はスタスタと歩き去ってしまう。

「先生、あたし見たよ。女の子がおぼれたんだ」

望が教師の袖をつかみ、眉根を下げて話しかける。心配ではない、といった表情だ。教師は望の雰囲気や和らげるために、少しだけ微笑んだ。

「……大丈夫、何も心配することはない。高橋先生もそう言ったのだろ？」

「でも……」

何度も袖を引っ張る。行かせてくれ、と言っているのだ。

そんな彼女の頭に手を置き、教師は言った。

「月森は優しい娘だな。でもな、いま行ったら、せつかくゆつくり寝ているあの子を起こしてしまうだろう？ 先生が様子を聞いてくるから、ここで少し待ってなさい」

その言葉に、望の顔がパアツ、と明るくなる。彼女の表情を見て、先生がもう一度言った。

「先生の話も、そんな風に真剣に聞いてくれたら嬉しいんだけどなあ……はあ」

情けない溜息に、教室の全員が笑った。

だが、一人だけ、笑っていない者がいた。遊だ。

「起きろ、このぐーたら妖精」

パックを小突いてたたき起こす。

「んあ？」

頭を振りながら起きあがったパックに、彼は質問する。

「水の中に棲む妖精って、いるのか？」

第六場

第六場

『立入禁止』と書かれた札を、もののみごとに無視して、人間二人と妖精二人が屋上に上がる。

入道雲が彼らを飲み込もうと、威嚇するようにどんどん大きくなっていく。青空はどこまでも均一の青を提供し、この好き日に思い切り背伸びのできる環境を作り上げている。

「きつもち い」

望はその誘惑に乗って、弁当箱を包んだ袋を握ったまま、腕を空に伸ばした。望の視界からだど、青に混じった赤が鮮明に見えるだろう。

赤をベースに、白い水玉を配したそれを、慌てて正しい位置に直す。中身が崩れたら大変だ。

その後ろで、遊が「脳天気」、と呟いた。

「なによ、遊も思わない？ こんな気持ちのいい日に勉強するなんて、お日様に失礼だよ」

太陽はあからさまな怒りを向けるがごとく、二人に日差しを降り注がせている。

妖精二人が高く飛び上がって町を見下ろした。

「すつごーい、ここからだど、望ちゃんの家も見えるんだね」

キーノが額に手をかざして感動する。

「そんな高く飛ばなくても、ちゃんと教会まで見えるよ」

パックがそう言った望の肩に乗りかかった。

「おつ、ホントだ。おいら、この辺はあまり来たことがなかったからなあ」

「何で？」

「そりゃ、学校っていったら、勉強する場所だからさ」

単に学校が嫌いなだけだったらしい。恐らく、木下にでも聞いたのだろう。あの悪戯者め、パックをからかっていたのだな。

だがまあ、その気持ちは分らないでもない。いくら妖精を見るのに年齢は関係ないとはいえ、若年者ほどセコンド・サイトを身につけているものだ。それは年をとると無くなってしまうことがある。なぜなら、それだけ子供というものは可能性を秘めているからだ。未だ分岐点にさしかかっていないこの時期の子供ならなおさらだ。平和に暮らしていくためには、知られない方がよいこともあるのだから。

パックの返答に呆れて、望は会話を中断し、弁当箱を開いた。

「じゃーん、ママ特製の卵弁当っ」

大好物の卵をあしらった弁当だ。卵焼き、ゆで卵、カニ玉、そしてプリン……およそ小学校六年生が食べる、バランスのよい食事とは思えない。

横から遊が覗き込む。

「げっ、お前、卵ばっかで飽きないの？」

「だって、好きだもん」

箸を口にくわえてそう答える。最初の卵焼きを口に運んだ所だ。

「そういう遊は、なに弁当なのよ」

遊がふたを開ける。パックとキーノが上から覗き込んだ。

「オレか？ オレは、ふつーの弁当だよ」

そういう割には、色とりどりの綺麗な作りをしていた。

ポテトサラダにサンドイッチ、グリーンアスパラとウインナー、さらに唐揚げまでついている。

実にカラフルな弁当だ。

「それと、これさ」

そういつてパックから取り出したのは、ラベルに『魂の紅茶』と書かれた缶ジュースだった。

「あっ、それっ、話題の……でも、学園の売店にしか売ってないっ
て」

望がうらやましがると、遊は、へへ、と鼻をこすって、

「昨日兄ちゃんに買ってきてもらったんだ」と自慢した。

キーノとパックは物珍しいらしく、二人の間を行ったり来たりしている。

「ねね、魂の紅茶って……なに？」

キーノがたまらずに質問した。

遊が自信たつぷりに答える。

「魂の紅茶ってのはさ、ごく限られた学園にしか売ってないっていう幻の紅茶さ。なんでも『男の渋みが売り』らしいんだけど、味わい深くてすごく美味しいって評判で、すぐに売り切れちゃうんだ」
もう一度鼻をこすり、そういつて一口飲む。

「んまいっ」

くう、つと苦みを味わって、遊が叫んだ。そうされると、本当に美味そうに見えるから不思議だ。

「あーん、あたしもひとくちい」

望が物欲しそうにねだる。遊は「ちょっとだけだぞ」と言って渡す。

望の喉が二、三度鳴った。

「んまいっ」

体を痙攣させ、遊と同じ反応をしながら、口を袖で拭う。まるで酒飲みの親父のようだが、なぜか望には似合う。

「つぶは。……んー、お茶飲んでんだか、銀紙かんでんだか分からない渋みがいいよね」

電気が走るような旨味、ということだろうか。私にはいまいち想像できない。

キーノとパックもそれを見て飲みたくなったらしく、缶にしがみついて「飲ませてえ」とねだった。

二人にも分けてあげながら、ようやく望と遊は食事にはいる。

「ところでさ、今日のプールの出来事なんだけど……」

箸をつけると同時に、遊が訊いた。

「あれって……ボガードの仕業だと思うか？」

「なんでそう思うの？」

結局、おぼれた児童の命に別状はなかった。ちょっと水を飲んだのと、びつくりしたのとで気を失っているだけだそうだ。それも、次の授業までには回復したらしく、わざわざ心配してくれた望のところまで挨拶に来た。礼儀正しい娘だ。

「影を見たんだ」

「影？」

遊の言葉に、望は首を傾げた。

「あたしは見なかったよ」

「お前はおぼれた娘ばかり気にしてたからだろ？ オレはあの後もずっと水面を見ていた。そしたら、端っこの方に、長い影が映ったんだ。すぐに消えたけどな」

今度はキーノが口を挟む。

「雲の影じゃないの？」

空を指さしながらそう反論する。が、遊は譲らなかった。

「いや、違う。あれは雲の影なんかじゃなかった」

それを聞いて、キーノとパックが表情を曇らせた。望が箸をくわえながら問い質すと、二人は声をそろえてこう答える。

『水に棲む妖精って危険なんだ』

遊と望の体が一瞬、痙攣する。怯えてしまったらしい。

そんな二人に向かって、申し訳なさそうにキーノが言った。

「それでも、やってくれる？」

望も遊も、弁当箱を置いて後じさる。首は嫌だというように横に振り続けていた。

「　　ですう」

「うるさいっ　　聞き……い」

階下に通じるドアから何か聞こえてくる。

それに四人とも気付いたらしく、顔を見合わせた。

「だってだってえ」

「言い訳してはいけません。あなたはわたくしのナイトなのでしょう?」

一方はのんびりした調子の幼い声、もう一つは小さいが威圧的な調子の、よく響く声をしていた。ドアのすぐ前にいるらしく、今でははっきりと声が聞こえる。

「誰だろ?」

望が遊に訊く。しかし、遊が知っているはずがない。彼女はそのまま、そつとドアに近づいていった。

そして、その時、ドアが開く。

飛び出たのは小さな顔。人間として小さい顔と、妖精として小さい顔が一つずつだった。

「あーっ」

「あー!」

「あーっ!」

望とキーノとパックが声を上げる。他三人はそれに驚いて呆然としていた。

「プールの子だあ」

「アルテムッ」

「姫さんじゃねえかつ」

どうやら人間と妖精では声を上げた対象が違ったらしいが。

と、今度は違う悲鳴が響く。

「えーっ」

「えー?」

「えーっ?」

少女と、望と遊だ。どうやら妖精二人の言動に反応しているらしい。

「アルテムさんって、お姫様だったのお?」

少女はそういってアルテムを問いつめ、小学生二人は声を合わせてこういった。

『あれが行方不明の王女様あ？』

キーノとパツクに向かってそう叫ぶ。妖精たちはこちらも声をそろえて返答した。

『そうだよ』

人間たちは双方の妖精を見比べて、疑わしげな瞳を見せる。その間、アルテムも少女も一言も発しはしない。

やがて、十分に吟味し終えたのか、遊が口を開いた。

「ぜんぜん元気じゃん」

その言葉にキーノがキョトンとする。

「あの……それってどういう意味？」

キーノが羽をゆつくりと動かしながら、水平に遊の近くに飛んてくる。苦笑いを浮かべてそう問いかける彼女に、遊はさらに説明した。

「だってさ、行方不明っていうから、食べ物もなくて、ボロボロになつてると思つてたら、なんだよ、あれ。綺麗な服きて……あれ、お前のより上等なんじゃねえか？」

そういわれて、キーノが自分の服とアルテムの服を見比べる。王女の服は鳥の羽で作った暖かく優雅な物だった。それに比べ、キーノはいつもと変わらず花で編んだ粗雑な服だ。見た目はキーノの方がカラフルだが、どちらが良いものかは一目瞭然だ。

それが恥ずかしかったのか、キーノは遊の鼻の頭を殴った。

「いてっ、なにすんだよ」

鼻を押さえて痛がる遊に、彼女が言う。

「なによ、あの服はきつと、あの子が作ってくれた物なんだわ。私だって、望ちゃんが作ってくれさえすれば……」

そう言つて、そつと目頭を押さえる。

そんな彼女を、パツクが笑っていた。

「あなた達、いい加減に始めてもよろしいかしら？」

姫様が怒った。

一同の注目が一気に彼女に集まる。

「まったく、相変わらずですわね、キーノお姉様。パックも悪戯は治ってないのですね」

「悪かったな、姫さん。だってよ、いきなりでくるんだもん」
パックがアルテムの前に飛んできた。その素早さに、少女が声を上げる。それで、パックはようやく少女の存在に気付いたみたいに、彼女の周りを飛び始めた。蜜の周りを飛び交う蜂のように、その吟味するような動きは嫌らしい。同じことをキーノも思ったらしく、すかさず飛んできてパックの頭を叩く。

「やめなさいよ、怯えてるでしょう？」

頭を押さえてうずくまったパックが、そのままの格好でキーノを見上げた。

それを無視して、キーノは少女に近づいていく。

そつと鼻先に触れ、注意を促し、歌うように囁いた。

「あなた、だあれ？」

少女が、妖精を見上げてキョトンとした表情を見せた。そしてすぐに瞳が輝きだした。迷子の子猫が親を見つけたときに見せるようなその安心の表情を、だ。

「えへ、私はあ、泉……泉愛ですっ」

望と同じ制服、しかし、リボンの色が違う。薄いグリーンだ。健康そうな桜色の肌にウェーブのかかった長い黒髪、ちよつと垂れている目も愛らしい。身長は望よりもだいぶ低い、発育は彼女の方がよろしい。誰からも愛されて育ったのだらう、甘えん坊気質が見え隠れしている。

のんびりとした喋り方の彼女は、花に例えると霞草のようだ。タンプポの望とは全く違った趣を見せる。

「さっきプールにいた娘だよね？」

望が、弁当箱を置いて愛の隣に立つ。愛が首を縦に振った。

「そっかあ……四年生だよ」

リボンの色を見ながら望が訊いた。少女がコクコク、再びうなずく。

「妖精さんが見えるってことは、あなたも　なの？」

望は、あえて『なにか』を言わなかった。それは、望自身が、自分たちが何であるかをよく理解していないせいだ。

その、疑問とも思える質問に、愛は立派に答えてみせる。

「はい、私も……妖精の騎士ですつ。お姉さまあ」

「なるほどね、で、おまえは何か見たのか？」

今度は遊が訪ねる。こちらの方は望よりもよっぽどしっかりしている。

愛はそれを聞いて、遊の方をじっと見つめる。彼はそれが恥ずかしいのか、頬を人差し指で掻くと、そっぽを向いてしまった。それから、彼女は順に皆を見て、最後にアルテムを見た。

「あの　それについて、さっきからアルテムさんが話そうとしてるんですけどお」

ハツと息をのんでパックがアルテムの方を見ると、すっかり怒ってしまっていた。今にもこの場に雷を落としかねない。

彼女はそつと愛の肩に乗り、耳打ちした。

愛も何事かうなずき、首からぶら下げている小さなステッキのようなものを取り出す。端っこにかわいらしいリボンがかけてあるものだ。

それに向かって、彼女は一言声をかけた。

「アンテ」

ポンと煙を出しながら大きくなったそれを、軽く振る。こう言いながら。

「転んじゃえ」

すると、望と遊が転んだ。本人達は訳が分からない様子でキョロキョロと辺りを見回している。

それを、キーノとパックが笑っていた。

「落っこちちゃえ」

もう一度、愛がステッキを振ると今度はキーノとパックが地面に落ちる。こっちも訳が分からない様子だ。

そして、改めてアルテムが話し出す。

「さて、お仕置きはこれくらいにして、本題に入りますよ」
今度こそ、全員が車座に座った。

「皆さんも気づいていると思いますが、このプールで起きた事件はボガードの仕業ですね。それも、ケルピーの仕業だと、わたくしは確認いたしました」

演説しているアルテムの前で、食事風景が繰り広げられている。望が卵だらけのご飯を、遊が母自慢のサンドイッチを、愛は小さい弁当箱に唐揚げとベジタブルミックス、それにスモークサーモンが入っている。

その周りに二人の妖精が飛び交っているといった感じた。誰もアルテムの方を向いてはいない。

愛の『一緒にお弁当食べましょう』から始まったことだ。だからアルテムも止めようとはしなかった。どうやらアルテムは愛にだけは一目置いているらしい。あのわがまま娘にしては、珍しいことだ。私もここで一休み、屋上の給水塔に座り、木の実を一囓りする。下では、楽しそうな会話が繰り広げられていた。

「わあ、愛ちゃんのお弁当、カラフルだあ」

望が騒ぐ。悪戯者がそれを覗いてひょいとグリーンピースをつまむ。

「あー！ 妖精さん、マナのお豆とったあ」

「しょうがねえだろ、おいらだってハラ減ってるんだから」

その様子を見て、望が不思議がる。

「あれえ？ 妖精って、日本人の食べ物食べられないんじゃない……むぐむぐ」

あわててキーノが彼女の口を押さえる。パックは片眉をつり上げて、ため息をついた。

「キーノお嬢様はまだそんなアマチなことってんのか。だからい

つまでもガキだつてんだよ」

今度は遊が言葉を返す。

「おまえは大人だつてのか？ この悪戯小坊主が」

それを、ロビングットフェローはせせら笑う。

「へへん、言葉というものは、持て遊んでいるうちに、いい加減なものになってしまうものだ。おいらだつてもうずいぶんと小坊主だつて言われちゃいるが、それでもシーシアスの時代から生きていたんだぜ。お前なんかよりも、たった二百年しか生きていないキーノなんかよりも、ずっとずっと大人なんだからな。おいらを誰だと思っている？ 妖精王様のお付き、永遠のかわいい悪戯小坊主ロビングットフェロー様だぞ？」

能劇のような振りをつけて格好を付けている。確かに年齢という点ではあいつも大した部類にはいるようだが、それが偉いというところと同義かどうかは世間の批評に任せるところだろう。

その頃、アルテムの眉間には皺が寄っていた。いくら何でも、はしやぎすぎだ。

厳かに、しかし子供っぽい感傷を交えて、彼女は話し出す。

「あなた方……少しは人の話を聞こうとは思いませんか？」

誰も返事はくれなかった。今度は、愛でさえも一緒になって騒いでいる。

王女が、手の平を天高く掲げた。

「宙に舞う精霊達、この不屈き者達に罰をお与えなさい」

にわかに、空中放電が始まる。

その音を察して、愛が逃げ出した。自分だけだ。そつとアルテムの側に寄り添い、ごめんね、と両手をあわせる。

直後、四人の中心に雷が落ちた。

「わあっつっ！」

同時に仰け反る四人、その姿はまるで花卉のようだ。

ブスブスと煙が上がり、地上から喚声のような声が聞こえる。児童達が騒いでいるのだ。望、遊、キーノ、パックはそのまま固まっ

てしまった。

「そろそろ話を聞く準備ができてまして？」

居丈高に見下ろしながらアルテムが鼻でせせら笑う。

言葉もなくうなずく四人に、アルテムはようやく満足したようだ。

「さて、お座りなさいませ」

いわれたとおりに四人が座る。それに、愛も加わった。すでに弁当は食べ終わっている。

アルテムが地面に降りてきた。

「先ほども言いましたように、今回の事件はお母様の仕業です。プールにいるのはたぶんケルピー、非常にどう猛な妖精の一種だといえましょう」

キーノの、ユリの花のスカートを、望が軽く引つ張る。

「ねえ、ケルピーって何？」

言われて、キーノはアルテムを気遣った。そちらを見て、何事が訴えようとしている。

「そうね、説明がまだでしたわね。ケルピーとは、水に棲む馬です。肉食性で、その皮膚は粘着質、一度触ると絶対に離れることはできず、水の中に引きずり込まれてしまします。そして、浮かび上がってくるのは内蔵のみ……」

ゾツとしたのか、望が肩を震わせる。遊は、なんだか思慮深く考え込んでいるようだった。そして、おもむろに手を挙げる。

「あのさ、だったら、何で昼間の女の子は助かったんだ？」

アルテムはちよつとだけ感心したような表情を見せて、それから話を続ける。

「ただのお馬鹿さんじゃないみたいですよわね。つまり、飼い慣らされた妖精など、何も怖くない、ということですよわ」

それでは、あんまりにも演繹的すぎた。彼にはそれ以上のことは分からなかったみたいだ。

アルテムはさらに続ける。

「という訳なので、今回は皆さんはでてこれなくて結構ですよわ。」

わたくしとマナさんだけでお片付けいたします」

四人から非難の声があがった。

「ええ〜！　なんでえ？　みんなでやった方が楽しいよ？」

望は少し勘違いしているようだ。それを、遊が訂正する。

「馬鹿、そうじゃねえだろ？　危ないってんだ。だいたい、何でオレ達じゃだめなんだよ」

ふう、そうやって王女が溜息をつく。遊の前にそつと飛んできながら、彼女は指を左右に振った。

「ちつつち、甘いですわ。仮にもあなたの方が相對するのはわたくしのお母様ですよ。うまく力も使い切れない方々が、もしもお母様を傷つけてもしたら大変ですわ」

即座に遊が言い返す。

「じゃあこのお嬢様はちゃんと力を使いこなせるってのかよ」

思い切り指を振って、愛を指す。彼女はその仕草に怯えたのか、ビクリと体を震わせて目に涙を溜めだした。

それを見て、遊が急にうるたえだす。彼はフェミニストなのだ。

望はまだ事情が飲み込めていないらしく、指をくわえて黙っている。しかし、愛が泣き出したことで何かをしなければならいと思っただけ、いきなり遊と愛に抱きついた。三人で肩を組んだような格好になる。

「どうでもいいじゃん、そんなことっ！　みんな楽しんでやろうよ。妖精さん、いいでしょっ？　あたし達、一生懸命やるよ？」

そう言って、笑う。何の迷いもない、ある意味達観した表情だ。

妖精の王女様も、さすがにこの笑顔には勝てなかったらしい。もう一つ溜息をついて、それから笑顔を返した。

「これだから市井の娘は……勝手になさい」

さらに大きな笑いが、屋上の空にこだまする。入道雲のような歓声だった。

第七場

第七場

み空に引きしぼられた銀の弓さながら、月がその姿を横たえていく。

日はたちまち夜の闇に融け入り、そしてまた、夜もたちまち夢と消え去りゆくのだ。

闇に映し出された影のように、望達の姿が浮かび上がる。

校門の前に、望、遊、愛、キーノ、パック、アルテムが一堂に会する。

「ありがとうね、愛ちゃん。おかげで抜け出せたよ」

望が愛の肩を叩いて礼を言う。それに対し、愛は照れながらも身を寄せた。

「別にいいんです、お姉さま達のお役に立ててえ、私も嬉しいですよ」

こういうことだ。夜、小学生が外を出歩くというのは両親にとって歓迎できないことだ。だから、遊と望が愛の家に泊まったことにしておいて、外出した。

「でも、お前の家は大丈夫なのか？」

私にも浮かんできた疑問を、遊が口にする。彼女は満面の笑みを浮かべてそれを肯定した。

「はい。想父様が外で遊んできていいっていつてくれました。後は上手くやっておくからって」

「おおらかな育て方をする父親なんだな。ウチなんてさ、ちょっと泊まって来るっていっただけで根ほり葉ほり、そのうえ女の子の家だっていったら……ああ、もうっ」

余程のことがあったのだろう。それがなんなのか、私には伺いしれない。遊のことなので、実は大したことはないのかもしれないが。

薄闇に照らされたプールサイド、フェンスの緑が、仄かに灯っている。かすかな水の音、通り抜ける風が、皆の背中を冷やしていく。今頃、全員冷や汗をかいているはずだ。相手はケルピー、淡水の猛馬なのだから。

ゆつくりと歩き、そのフェンスが見える位置まで進んでくる。六人が横に並んで、それぞれの思いを確かめるかのようにうなずいた。「そろそろ、変身しておこうか」

まずそう言ったのは、遊だった。不安もあったのだろうが、正しい選択だ。

そう言った本人が、ポケットからキーホルダーを取り出す。剣を象ったものだ。それを上に放り投げ、同時に小さく叫ぶ。

「アンテ」

空中で大きくなった剣の柄が遊の手に収まった。そして、それをすぐに掲げてもう一度叫ぶ。

「妖精王の名において、我、汝に命ず……精霊よ、集え」

柄に付いている四色の帯が輝き出す。光は増し、四色の光の帯となって遊を包む。

遊の姿が消え、代わりに声が聞こえる。

「愛みたいになちっちゃい娘が頑張ろうってんだ、そんなちっちゃな勇氣、応援してるぜ。オレも一緒に戦うつ」

光が薄れていく。

コットン地のグレーの半ズボンに赤い衛兵のような服装、頭にはこれも赤い、ベレー帽だ。腕には金のわっかをつけている。そして、黄色いスニーカー……。

戦うために生まれたナイト。

彼は剣を斜めに構えて、そして、名乗った。

「勇氣の騎士、ブレイブナイト、参上」

言った後で、彼は正気に戻った。

「これってさ、敵がいないうちに言っても、格好付かないよな」

その横で、望が帽子から羽ペンをはずした。同時に、ポケットか

らはんこも取り出す。

「アンテ」

はんこと羽ペンが、大きくなった。もう驚いたりはしない。とりあえず、はんこを傍らに置いて、望は羽ペンを抱えながら叫ぶ。

「妖精王の名において、我、汝と契約す」

途端に、巨大な西洋紙が現れた。そこには『変身して、一生懸命戦いますっ』という契約の文字が書かれている。それに向かって、望は『Oath』と自分の名をサインした。ついで、はんこを抱えて印を押す。

その瞬間、契約書が弾けるようにして散らばった。次第に望の姿を包み隠していく。

「プールはみんなで遊びましょう。これはみんなのお約束。約束破ったら、ハリセンボンだぞ」

紙吹雪が薄れていく。

姿が変わっていた。花びらを模した虹色のミニスカートの下に、スパッツをはいている。上は、薄手の青い長袖のシャツに、さらにピンクの半袖シャツを重ね着している。腰には大きなリボンのように、赤い布が巻き付けてあった。頭には帽子の代わりに黄色いカチューシャが。

彼女は右手を天井向けて掲げ、大きく足を広げてポーズを取った。そして、名乗る。

「契約の騎士、オースナイト参上」

そして、遊と同じく言った後で何となく首を傾げる。

「やっぱり、敵がいないと決まらないね」

満足のいかない表情をしている彼女たちに、愛が拍手を送った。
「お姉さま達、格好いいですよ」

キーノとパツクも、ヤンヤと囃し立てている。一人、アルテムだけが冷めた目で「やっぱり未熟者ですわね」と言っていた。それを聞いて、ブレイブナイトが反発する。

「ふーん、それじゃ、愛の変身を見せてもらおうか……って……お

前、その荷物は何だよ」

見れば、愛は大きな紙袋を抱えていた。今まで見あたらなかったということは、『アンテ』の呪文で大きくしたのだろう。

それを脇に置いて、愛は首から提げているペンダントをはずす。そこには、昼間見た小さなステッキが付いていた。

それだけを取り外し、軽い声で唱える。

「アンテ」

ステッキが大きくなる。

「それじゃあ、見ていてくださいねえ」

愛がそういうと、ステッキが光り出した。それを軽く左右に振る。
「えいっ」

そういいながら、クルリと一回転する。まるでダンスを見せるようなその姿は、かわいい。そして、同時に回転しているステッキから、輝く星が飛び出してきた。ディフォルメされた小さな星々が、愛を包むように広がっていく。そうやって、愛の姿が隠れていった。元々、愛は制服を着ていた。それが隠れ、中から声がする。

「さーで、そろそろ時間ですね、お遊びの時間……楽しいお遊び、一緒にしましょ」

星が天に昇っていく。それにつれて、愛の姿が見え始めた。

あっさりとした格好だ。オレンジを中心とした、寒くない程度のワンピース。手には、ステッキを持っている。

「えっと、純真の戦士、イノセントナイト参上……でしたっけ？
決めゼリフ……」

片手を額に当てて、ポーズを取る。二人のナイトは、それを見て呆然としていた。イノセントナイトがオースナイトの顔の前に手をかざす。それで気がついたのか、彼女は勢い込んでキーノに食ってかかった。

「ちよつと、キーノッ！　なによ愛ちゃんの変身、あたし達のと全然違うじゃないっ」

キーノはガクガクと揺すられて、返事さえできないでいる。それ

をパックが笑っているが、その次の瞬間には、パックもブレイブナイトに詰め寄られていた。

「お前ら、オレ達にあんな恥ずかしい変身させといて、からかったのか？ もっと簡単な変身方法があるんじゃないか」

「ちょ、ちよつと待てええっ」

パックの制止も聞かないで、彼は揺すり続けている。イノセントナイトは二人を止めようとしているが、どっちを先に止めていいものか迷っている。そんな様子を見て、アルテムが一言いった。

「あなた達……なんにもご存じないのね」

先輩ナイト二人が、一斉に振り返った。

『どういうことだよっ！』

声を合わせて、今度はアルテムを揺するうとする。その前に、何かが立ちはだかった。

ペンギンである。

正確に言うと、ペンギンのぬいぐるみといったところか。でつぶりしていて、どうにもおかしい。プラスチックの眠たそうな瞳を向けて、アルテムの前に立ちはだかっている。

それが、ゆつくりと口を開いた。しっかりと糸で縫われているはずのポリエステルのくちばしを、だ。

「マナの友達いじめる奴は、ゆるさんかな」

妙に粹な喋り方をする。

ブレイブナイトが眉をひそめた。腰に手を当てて『なんだこいつ？』といった表情をする。

「きゃあああ！ かわいいっ」

オースナイトは、抱きついた。明らかに女の子している。目を瞑って、頬ずりを繰り返す彼女に、ペンギンも辟易しているようだ。

「ちょ、こら、やめいつ、ワシはこれでも……」

「源さん、お姉さま、やめてくださいよお」

そこに、愛……イノセントナイトが仲裁にはいる。二人とも……オースナイトは仕方なく、だが……離れて彼女を見た。

「アルテムさん、意地悪しないで教えてあげてください」

アルテムは憮然とした顔で反論する。

「あら、わたくしは別に意地悪した覚えはなくてよ。この人達が話を聞く態度をとらないから、タイミングを逃しただけですわ。でも、わたくしのナイト、あなたがそういうのなら、今からでも遅くはないわね。話して差し上げましょう」

再び会話が始まる。皆、校舎入り口の階段に座り、アルテムの話を待っている。キーノとパツクが気まずそうなのは、変身の秘密を知っていて教えなかったせいだろう。

「つまり、妖精が人間に与える力とは、正確には変身ではなく、ほんの少しの夢を叶える力なのですわ」

今度は邪魔されずに話せるからか、ちょっとだけアルテムは得意げに話していた。

「夢って……？」

「言い換えれば、ささやかな願望ですわね。見たところ、望さんは皆さんと仲良くなりたいたい、という願望があるようですわ。それが、結束や、約束という形を取って変身として現れる。遊さんは男らしくなりたいたい、誰かを守ってあげたい、そういう願望があつて、それが剣士、騎士というイメージと結びついたのでしょう」

オースナイトの疑問に答えて、わかりやすく例を挙げる。なるほど、いってみれば、その二つの例は正しかった。

「愛さんは誰からも愛されたい、という願望があるみたいで、それが純真という、無条件の愛の形に変わってしまったのですわ。ただ、あなた達が決まったポーズを取らなければならないのに対し、イノセントナイトが自由に変身できるのは、変身に必要なものをちゃんと知っているからなのです。これから先は、森の司祭さん、あなたの方がよく知ってらしてよね？」

矛先を向けられて、キーノがあわてる。

「え？ あ、ああ、そうね。確かに、変身の呪文とか、本当は必要ないの。アイテムも、魔法があなた達の性格に合わせて形を変えた

だけのものだし。望ちゃん、最初に変身したときに言ってたでしょ？ 教えられていないのに勝手に体が変身の仕草をとってたって」

そういいながら、キーノはオースナイトの肩に乗る。

「うん、あのときはね、キーノに変身アイテムの大きさを変える呪文を教えてもらってから、急に体が動いちゃって……」

「そういえば、オレもそうだったな。どうすればいいのか、まるで知っているみたいに勝手に勝手に動いた。それに、変身してからは、なんか何でもできるような気がして……」

彼女の話を受けて、ブレイブナイトが補足する。パックが彼の頭の上に乗った。ベレー帽のような赤いそのの上にだ。

「こいつは、最初、自分が出せなかったんだ。本当の自分をさ。願望を押さえている奴に……願望を怖がっている奴に変身なんかできない。だからおいらはお前に言っただけ。今のお前には足りないものがあるってな。男らしくなりたいて思ってるくせに、自分じゃそれは無理だって、最初から諦めているような奴に妖精は力を貸したりしないぜ。妖精ってのは気まぐれで、自分の気に入った奴しか相手にしないんだからな。素直で、自分に正直で……子供に透視能力者が多いってのは、そういうことなんだぜ？」

さすがに最年長だけあって、よくものを知っている。まあ、その大半が私の受け売りではあるが。ブレイブナイトは恥ずかしそうにしている。自分の中を見透かされて悔しいのだろう。そして、同時に、オースナイトも顔を赤くしていた。昨日の『望を守るために』云々を思い出したのだ。

長い話の中断を経て、キーノが続きをしゃべる。

「そうね、パックの言うとおり。普通の人は、願望を全開にしつつ、なんて言われてもいきなりは無理よね。だから、私たちは変身の呪文を……つまりキーワードね……それを与えてあげて、変身しやすくするの。ノリがよくなると、人間、自分を出しやすくなるものなのよ」

キーノの説明を聞いて、まず、ブレイブナイトが質問した。

「ようするに、オレ達がああいう風な変身の仕方をしたのは、それ
もオレ達の願望の一つだ、っていうのか？」

キーノの代わりに、アルテムが返事をする。

「その通りですわ。マナさんがそういった形態をとらなかったのは、
彼女がいつも自分を素直に表現しているからに他なりません」

そういわれて、イノセントナイトがうなずいた。彼女の膝には、
さっきのペンギン、源さんが座っている。相変わらずの眠たそうな
瞳で。

その源さんが何度もうなずきながら言った。

「そだな、マナはいい子だもんな」

のほほんとした声で、彼は愛の手を取る。それにしても、奇妙な
感じた。ぬいぐるみの声を聞くというのは。しかし、それがイノセ
ントナイトの『望み』だというのなら……。

アルテムが、不意に飛び上がった。羽毛の服が軽やかに揺れる。

「さて、お客さんが参りましたようですよ」

瞳はプールの方に向かっていている。

決意を秘めた瞳が……。

それが何か、私は知っている。

それは、まだナイト達が知らない真実への扉だ。アルテムがそう
いうのなら、相手はケルピーだけではあるまい。この一幕が、ただ
の夫婦喧嘩でないことが分かったとき、妖精の騎士達はどうするだ
ろうか。彼らに資質があったのは偶然かもしれないが……望に関し
てはかなりの打算があったにしても……彼らを選んだのは偶然では
ない。彼女らはこの劇に参加せねばならなかった。

めいっばいに引かれた銀の弓が、彼女らに光の矢を放ってくる。

月は我ら妖精の太陽、その光は処女神の優しさに溢れ、妖しの力
を体に、そして心に満たす。かつて一介の機織りが神に挑んだよう
に、彼らの所業もそれに当たるのかもしれない。だが、彼らにはア
テネに対するユピテルがついている。他でもない、この私だ。妖精
王である、このオーベロンだ。

私の場が近づいているようだ。

パズルはわずかなピースを残し、彼らに教えるべきことはもうない。後は、彼らが知らなければならぬことが残るのみだ。

妖精の営みに翻弄されていく彼女らを、哀れにも思うが、同情は聴衆に任せ、私は語るにとめよう。

第八場

第八場

水音は静かに、そして幽かな光を目に映し出し、たゆたっている。

何がそこにあるうというのか、この場にいるものを除いてそれを知る者はいない。まさに、この場にいる者達こそ、それを知る者なのだ。

ナイト達、それぞれの肩にお付きの妖精たちが乗っている。源さんはイノセントナイトの脇に立っている。

自分たちの心を分け与えた者を、妖精は永久に慕い続ける。アルテムのそれは依存に近いかもしれないが、それは仕方のないことだ。何しろ、他の二人に比べ、王女は生まれてそう年月を経っていないのだから。

服装を変えて、心構えも変わる。

オースナイトはより元気に、明るく……正義感に溢れ、ブレイブナイトはいつもと違い、男らしく、格好良く。そして、イノセントナイトは普段と変わらぬその性質を保っていた。彼女の力だけは、私にも想像がつかぬ。

「ねえ、アルテムさん。私、もう一回変身していい？」

イノセントナイトが、突然そんなことを言い出した。

「どうして？ 今のままでも十分ではなくて？」

アルテムが問いただす。他の二人も、怪訝な様子で彼女を見ている。

「だって、私だけお姉さま達と違うんだもの」

……ただ、それだけの理由だったようだ。イノセントナイトはステッキを取り出し、再びそれを振り回す。

「えーいつ」

星が彼女を包み、姿を変化させていく。

次第に上空へ消えていく星達……後には、すっかり衣装替えしたイノセントナイトがいた。

これはよく知っている服装だ。カジノなどでよく見かける。黒い服と網タイツ、頭にはウサギの耳……いわゆるバニーガールというものだ。なぜこんな格好を……そう思っていると、当の本人が説明してくれた。皆の視線が気になったらしい。

「だって、私はマジシャンなんだからっ」

だが、よく意味は分からなかった。仲間達も同様で、突然の異様な格好にポカンとしている。

「まなあ、かつこええぞお」

一人、源さんだけが褒め称えている。

「あ、あの……マナさん？　とてもお似合いではありますけど……ちよっと肌を露出しすぎではなくて？」

そういわれて、少し恥ずかしくなったマナは、顔を赤くしながら、もう一度変身した。

ステッキを振る。

「じゃ、これはあ？」

星々が消えた後、そこにはタキシード姿のイノセントナイトがいた。

今度は少ししましかもしれない。

「満足した？」

キーノが彼女の頭に乗りにかかりながら問いかける。

ナイトはうなずいた。

パックが空に飛び上がり、一直線にプールに向かう。

オースナイト、ブレイブナイトが構える。

源さんが、イノセントナイトの前に立ちはだかった。

「さーで、でてきてもらおうか。悪戯好きの妖精さんによっ」

パックが水面すれすれに疾空する。派手に破裂音を立てて、塩素臭い水が跳ねる。蜂の羽が、耳をつんざくような音波を発する。

と、突然水面が弾け飛んだ。

ミルククラウンのように放射状に飛び散る水を避けて、パックが
高く飛び上がった。

ちょうど一瞬の後、そこにヒレを持った馬が現れる。

大きく口を開けて、パックを食べるつもりだったようだ。

「わあっ！」

「きやあっ」

ナイト達が叫ぶ。

「あー、お馬さんだあ」

イノセントナイトはマイペースだ。

馬 ケルピーはそのままプールサイドに降り立った。その瞬間、
ヒレだけだった足が『馬脚』を現す。どうやら地上で彼らの相手をするつもりらしい。よく見ると、首輪がついている。飼われている証拠だ。

気を取り直して、ブレイブナイトが言葉を唱える。

「妖精王の名において、我、汝に命ず……サラマンダー」

四本の帯の一つ、赤いものが柄からはずれ、空中で蜥蜴を象る。

その色は真っ赤で、どちらかというと蜥蜴よりもサンショウウオに似ている。

それは彼の持っている剣に宿り、刀身を赤く発光させる。つまり、
水には火、という単純な発想だ。

ブレイブナイトが走り出すと、オースナイトが彼に続くようにして言葉を発する。

「妖精王の名において、我、汝と契約す……………あれ？」

と、物質名を唱えるところで彼女が首を傾げた。キーノがカチューシャをはめた彼女の頭に乗りかかり、話しかける。

「どうしたの、オースナイト？」

オースナイトは、モジモジしながら舌を出した。

「ここ、なんにもないから……契約するものがないの、てへっ」
苦笑いを浮かべているが、そういう場合ではない。ブレイブナイトは一人でケルピーに向かっていった。彼女への罵倒を残して。

「のぞみの馬鹿やろっつ！ 契約するものくらい自分でもってきておけよっ」

だつてえ、と口を突き出す彼女をよそに、イノセントナイトが前に、ずい、とでてくる。

「お姉さま、私に任せてください」

そういつて、例の紙袋からなにやら取り出す。ホースと小さな扇風機だ。他にも、ガスボンベやらなにやら、いろいろと入っている。「お姉さまの魔法の力を聞いてから、何かの役に立つとおもつてえ……私、役に立ってます？」

オースナイトは喜色満面で彼女の頭をなでる。タキシード 可愛い燕尾服の尻尾がピコピコと跳ねる。

その時、ブレイブナイトは第一撃をケルピーに放っていた。間合いの遙か先から剣を振り抜くと、一条の炎の渦がボガードに向かって疾走する。

「いつけえっ」

が、それはケルピーの皮膚で滑ってしまった。

「あらら？」

落とした彼の肩にパツクが座り込み、忠告を与える。

「馬鹿かお前は。間抜けで役立たずの兵隊さんめ。ケルピーってのは、皮膚の表面がヌルヌルしててさ、大抵のものは滑らせてしまうんだぜ。それくらい調べとけよ、この勉強嫌い」

勇気の騎士がボソリと「お前だつて勉強が嫌いで学校に足踏み入れたことなかったくせに」といったが、それはしつかりとパツクに聞こえていた。彼が小突かれているが、そんなことで争っている場合ではない。

「じゃあ、どうしたらいいんだよっ」

悪戯者のロビングットフェローは、またもやだんまりを決め込む。ブレイブナイトがうんざりとした表情で溜息をついていると、ケルピーがこちらを向いて上唇を持ち上げる。ちょうど猿が人間を冷やかすときのように、上歯茎を見せるような形になる。

「このやろうつ、ふざけんじゃねえぞつつ」

その仕草に、彼の怒りが膨れあがった。叫びながら足を速めていく。フェンスの外から攻撃していた彼が、走りながら飛び上がった。常人とは思えない跳躍力で、軽々とフェンスを越えていく。

「妖精王の名において、我、汝と契約す……扇風機とホースッ！」
その時、ちょうどオースナイトは契約の魔法を終えたところだった。ついで、イノセントナイトが魔法を唱える。

「さーで、北島さん、そろそろおつきしましよ」

そう言つて、紙袋からイルカのぬいぐるみを取り出す。『おフロにいれてもだいじょうぶ』と、タグには書いてある。

ピクリ、イルカの北島さんの尻尾が動いた。同時に、高らかに声を上げる。

「あーっ、きーもつちいいー。はーるばるつとくらあ」

仕舞いには歌い出す始末だ。どうにもイノセントナイトのぬいぐるみにはまともな言語使用法を持ったものがないようだ。

「やっとでてきたか、おやじ」

源さんがそう言つて肩を組む。もっとも、イルカではどこが肩なのか分からないが。

二人なごんでいるところに、彼女が両手をあわせてお願いする。

「源さん、北島さん、お兄さまを助けてあげて？」

『よっしゃ』

二人声をそろえて、元気よく飛び上がる。その様子を、イノセントナイトが見ている。そんな彼女の背後から、契約を終えたオースナイトが声をかけた。

「マナちゃんの魔法つて、ぬいぐるみを動かすことだったんだね」
笑いかけるオースナイトに、彼女は首を振った。

「違いますう、お姉さま。私のマホーはあ、大好きなものと話すことができる、マホーですう」

ブレイブナイトとともにケルピーに向かう二人を見て、彼女はそう言った。その瞳は、心から彼らを信じている。オースナイトは、

そんな彼女を見て、お姉さまらしく、が、彼女らしさは失わずにニツ、と微笑んだ。

「マナちゃん、んじゃ、ここにいて？ あたし達、ちょっと行ってくるからさ」

「はいっ」

オースナイトもさっきの会話で見抜いたのだろうか。イノセントナイトには、自分自身で戦う力がないということ。だからこそ、ここにいるようにいったのだろうか。それとも、後輩が単に可愛かったからか……それは彼女に訊いてみないと分からないが、鈍感なオースナイトのことだ、後者であることだろう。

「源さんっ、北島さんっ、いっくよお！」

「おうっ」

フェンスをよじ登っている二人への彼女のかけ声に、またもや同時に応える。オースナイトはそれを受けて、手の平を後方にかざした。指が、ホースの口のように開く。ちよつと異様な光景だが、本人は見えていないので何も感じていないようだ。そこから、勢いよく風が飛び出てくる。それはすでに風というよりも、気流のような強さを持っている。ぬいぐるみ達はそれを見てフェンスから飛び降りた。

気流で宙に舞い上がった契約の騎士は、途中でジェット噴射を止め、両手でぬいぐるみ二人を抱える。

「よっしゃあっ」

今度は三人ともが叫ぶ。勢いに乗った彼らは、ブレイブナイトとケルピーを眼前に眺めている。彼は少しだけ押され気味だ。馬の口から放出される水玉を受けるだけで精一杯の様子だ。剣で弾き飛ばしてはいるものの、相手は水だ。その余波を多少はうけることになる。ブレイブナイトの体がどんどん赤くなっていく。打ち付けられたダメージで、皮膚が腫れ上がってきているのだ。たかが水といえど、高圧で射撃されれば野球のボールと同じだ。場合によっては銃弾ともなりえる。それができるはずのケルピーがこの程度の威力で

留めている。やはり、あの首輪のせいなのだ。

「ユウツ、どいてっ」

オースナイトが叫ぶ。遠くから「お姉さまあ、がんばってえ」と、後輩の声が聞こえてくる。どうやらこちらに近づいてきているようだ。

「姉ちゃん、手、放してくれよ?」

源さんがオースナイトに乞う。オースナイトは大きくうなずき、今度は手の平を左右に向ける。噴射の威力で、三人の体が回転する。遠心力で勢いをつけようという魂胆だ。独楽のように互いの顔を判別できなくなつたところで、契約の騎士は二人を放り出した。

弾丸のようにぬいぐるみ達がケルピーに向かって飛んでいく。本人達に対する配慮が全く見られないのは、相手がぬいぐるみだと思つているからだろう。さすがにオースナイトといえど、人間を遠心力付きで放り出すような真似ができるとは思えない。

「うひゃあっ」

ブレイブナイトがあられもない叫び声をあげながら飛びのく。その横を、繊維質の弾丸が飛びさつた。

ゴウン、鈍い音を立ててケルピーとぬいぐるみ二人がプールに落ちる。

「あつ、源さん、北島さん、死んでないっ?」

プールサイドに降り立つたナイトが、虹色のスカートをはためかせながら駆け寄ってくる。

水面をのぞき込み、それからブレイブナイトを見た。

「遊、だいじょうぶ?」

頭を手の平で押さえながら、彼が起きあがる。さっきの衝撃で倒れてしまったのだ。

「ててて ああ、思ったよりもだいじょうぶだよ。それにしても、なんだ、ありゃ?」

彼女の魔法のことをいつているのだ。オースナイトは、得意げに腰に手を当てて話す。

「へっへーん、扇風機とホースを使ったオースナイト特製人間口ケツトだよっ」

改めて正面に手を持ってきて、ジェット噴射を放ってみせる。指先に穴があき、そこから軽い気流が流れていた。

「うーん、なんか、気持ち悪いねえ」

照れながら、彼女は自分の開発した能力を気味悪がった。彼も複雑な表情でそれを見ている。

「源さんっ、だいじょうぶですかあっ」

フェンスの向こうから、イノセントナイトの声が聞こえる。半泣きで、今にもプールに飛び込みそうだ。彼女はどうかやら泣き虫らしい。

「あら？ 北島さんは心配じゃないの？」

彼女の周囲を飛び回っていたキーノが問いただす。応えたのはイノセントナイトではなく、ブレイブナイトのふところに隠れていたパツクだった。

「バーカ、お前は何でわざわざ、こいつがイルカのぬいぐるみ持ってきたか分かってないんだな。それにしても……さすがにケルピーのヌルヌルもあればっかりは弾けなかったみたいだな」

ひょいと襟元から顔を出してプールをのぞき込む。同じ動作を、キーノもした。黒く光る水底から、青い物体が浮かび上がってくる。「ぶはっ、さすがに濡れるとだめだ、ワシは」

北島さんに乗った源さんだ。浮かび上がり、プールサイドに降り立って、体を絞る。捻れた部分から水分が滲み出てきた。ぬいぐるみだと分かっているもちよっと嫌な光景だ。

「うーん……なんだかなあ」

オースナイトが苦笑いしている。ついで、水面をのぞき込んでアルテムに声をかける。

「ねえ、女王様あ。これで終わり？」

いつの間にかイノセントナイトの肩に乗っていたアルテムが顔を引きつらせながら返答する。

「女王様、じゃなくて王女です。なんだから、そういう言われ方すると、嫌な気分になるんですのよ。やめてくだらない？ それに、ケルピーがあれくらいで倒れるわけがないでしょう？ 飼われているといつても、淡水の猛馬なのですから」

ブレイブナイトがその言葉を咎める。

「なあ、姫さんよ。飼われているって、どういうことだ？」

アルテムはまたもや顔を引きつらせて、

「姫さん、もやめていただけじゃないかしら。パツクじゃあるまいし、下品ですことよ。あなた方、本当に今回のこと、説明受けていらっしやる？ それとも、単にお馬鹿さんなだけなのかしら？」
などと反撃する。

どうやら、そこまでは頭が回らないらしい。二人とも馬鹿ではないみたいなのだが、応用力に欠けている。この事件を起こしている張本人が誰かを知っていれば、何らかの予想がつきそうなものだが、
「なんだとお」

ブレイブナイトがいきりたってアルテムに食ってかかるうとした時だ。水面が弾けた。

パアン、水柱が竜巻のように昇る。その先端に、ケルピーの姿があった。

「あー！ まだ生きてるっ」

どうやら契約の騎士はケルピーを殺すつもりだったらしい。いちおう生き物なのだが……近頃の子供は未恐ろしい。

ボガードは水柱に押されるような格好で空中に投げ出される。そして、頂点まで達し、姿が豆のようにしか見えなくなったとき、いきなり、消えた。

「えっ？」

複数の声が重なる。ナイト達の興味は一気にそのことに集中する。本当はもっと大事なことがあるのに目先のことにばかり突っ掛かる。いま説明がつかぬ事を気にするよりも、知らなければならぬことを知る方がよほど大事だというのに。

その混乱に、畳みかけるようにさらに別の声が木霊する。

「みんなで飼う犬をいじめてどうしようというの？　言葉のない正義は悪と同じ。あたしがそれを教えてあげる」

ほんの少しだけ威圧的な、しかしまだ若い女性の声だ。それは、高い空から響いてくる。

「どこ……？　それに……この声って」

オースナイトが、珍しく神妙に眉をひそめている。記憶の底から何かを探し出しているようだ。私は知っている。それは、頭の引き出しの、普段から一番使っているところに入っているはずだ。なぜなら、この声は、妖精の子が出した声なのだから。可哀想な妖精の子が……。

「あそこっ！」

キーノが屋上を指さす。全員がそちらを向いた。闇夜に、漆黒の影が浮かび上がっている。その輪郭だけが、銀色の光に照らされて浮きあがっている。

「きゃあっ」

イノセントナイトが叫んだ。影が屋上から飛び降りたからだ。

「あっ」

他の皆も、つられるように声を上げる。その中で、観察眼鋭いブレインナイトが続きを放つ。

「影が、二つ……」

校舎の陰に入って、人影は見えなくなった。が、何の音もしない。何かが地面にたたきつけられる音も、それに伴うはずの悲鳴も。

数秒の間があき、今度はパックが月を指さす。

「あそこだっ」

どこかで見たような陰影を見せながら、人影は杖のようなものに乗って、空を飛んでいた。その傍らには、小さな影が、やはりあった。それだけを見ていれば、古に絶滅したはずの、魔女の姿に見える。高く、そして尖った魔女帽が、それをさらに助長させる。陰影は次第に大きくなり、やがて、影のままでプールサイドに降り立つ

た。薄暗いとはいえ、月明かりに照らされていて、まだその姿は見えないのだ。そこだけぽっかり穴が開いたように、暗い色が広がっている。そして、影は一言、呪文を唱えた。

「もつと光を」

誰かの台詞を借りて、影はそう言い放つ。すると、天に掲げる銀の弓が引き絞られ、矢を放った。いままでよりもより多く、より鮮やかな輝きをもって、その魔女を照らしている。

黒いマント、黒いミニスカート、黒い魔女帽、黒いストラップレスネックラインの服、全身黒ずくめの彼女は、赤い宝玉をその先端に抱いた杖を持っている。そして、傍らにはドレスを着た美しい妖精が空中で静止していた。

オースナイトの口が、大きく開かれる。しかし、声は発せられない。キーノや、パックも彼女ほどでないにしろ同様の驚きを見せている。もちろん、ブレイブナイトもだ。アルテムとイノセントナイトだけは、彼女にあったことがないために、驚きようがなかった。逆に皆の反応を不思議がるばかりだ。

先に口を開いたのは、魔女の方だった。

「正義の味方ごっこは楽しい？ 望、遊 そっちの子は、初めてだね。それに、妖精たちも……初めてお目にかかったよね」

矛盾した言葉に、ナイト達が気づく余裕はない。もちろん、妖精たちも。ようやく、オースナイトが一言発したただけだった。

「お姉ちゃんっ！」

そう、黒ずくめの魔女は、灯の顔形をしていた。が、彼女はそれを否定した。

「ちつつち、違うよ。今のあたしはクォーラルナイト、論争の騎士ッ。よくもあたしのペットをいじめてくれたね。せっかく首輪をはめて、大人しくしてるつてのに」

クォーラルナイトはハイヒールで床を鳴らしながら近づいてくる。少しだけ、オースナイトが後ろに下がる。そこには、ブレイブナイトの体があった。

トン、とオースがブレイブにぶつかる。

彼は、何も考えずに彼女の両肩に手を置いた。ナイトになったことで心に余裕ができた彼は今、紳士らしく振る舞うことができるのだ。

「なんで……お姉ちゃんが、妖精たちを暴走させていたの？」

独り言は、ブレイブナイトと私にしか聞こえていない。

いや、もう一人聞いていたものがいた。

「取り替え子ですね、ティターニア様」

オースナイトの側にいたキーノが飛び上がる。月の光に隠れて、彼女もシルエツトになった。

「よく分かったわね。森の司祭さん」

クォーラルナイトの後ろから、蜘蛛の巣のドレスを着た、端正な顔の妖精が姿を現す。

「お母さまっ」

アルテムが叫んだ。同時に、全員の視線が、アルテムとキーノ、そしてティターニアの間を行ったり来たりしている。キーノはその視線を無視して、ティターニアを問いつめる。

「なるほど、これで全て分かりました。フェアリードクターが望ちやんを選んだわけ、妖精王様が姿を消したわけが。つまり、私たちは口八頭の職人役者、というわけですね」

ティターニアが、その言葉を受け止めて、ふんっ、と鼻を鳴らす。「どうやら、その通りみたいね。全く……同じことを何度繰り返せば気が済むのかしら」

「それは、あなたもです。ティターニア様 以前は、ちゃんとした理由がありだったようですが、今回は、どうなのですか？」

物語との接点を見だし、キーノがチェンジリングの訳を問う。しかし、ティターニアは応えられなかった。

その隙に乗じて、イノセントナイトがアルテムに質問をする。

「アルテムさん、チェンジリングってなんですか？ それと……お母様に会えてよかったですね」

アルテムは複雑な表情をしていた。

「よかったかどうか、分からなくなってしまったわ。でも……ありがとう」

チェンジリングについては触れなかった。代わりに、キーノが説明を始める。

「妖精は、自分の子供が成長しなかったとき、種族に新しい血を欲したとき、そして、時には単なる我が侘で人間の子供をさらうの。さらわれた子は妖精の子供として育てられ、別の世界に旅立つ。テイターニア様、分かっているのですか？ あなたは、望ちゃんからお姉さんを取り上げようとしているのですよ？」

テイターニアはまた応えられなかった。代わりに、クオーラルナイトが行動で返事をする。

「水の弾丸をつ」

キーノに向かってバレーボール大の水玉が飛んできた。キーノはかわそうとするが、よけられず、球に押されてオースナイトの胸の中に押しつけられる。

「うつつ」

「だいじょうぶ？ キーノ……」

彼女には、ダメージはないようだ。それはつまり、それだけの威力がなかったということだ。

クオーラルナイトが杖に乗り、再び空を舞った。

フェンスを飛び越え、妹に手の届く距離まで近づいてくる。

上から下まで、オースナイトの衣装を見回す。頭にはカチューシャ、薄手のTシャツを二枚重ね、下半身にはスパッツと虹色のミニスカートだ。たつぷりと舐め回した彼女は、一言感想を漏らす。

「望の方がいい」

頬を膨らませる。ぷつくりとした丸顔は、望が怒ったときと同じ表情だった。

「許せないっ、あたしがこんな真っ黒な衣装で我慢してるってのに……」

自分のスカートをつまんでひらひらとかざしてみせる。中身が見えそうになったのか、ブレイブナイトが両手で目を覆った。そういうところは変身しても変わらないようだ。

そんなクォーラルナイトの様子を見て、イノセントナイトが忠言した。

「そんなの、簡単に変わりますけど……？」

どういった反射神経をしているのか、敵は、オースナイトが目玉を動かすよりも早く純真の騎士の前に現れる。

「うそっ！ どうやるの？」

彼女は、当惑気味に、しかし律儀にそれを教えようとする。

「あのーそれは――」

しかし、それをアルテムが遮った。

「マナさん、この人は敵なのですよ？ 悪い人なのです。そんな相手に教える必要など、微塵も感じませんわ」

楚々とした、しかし冷酷な言いようだった。思わずオースナイトが肩を振るわせる。

キーノは、そんな彼女の肩に乗り、耳元に囁いた。

「オースナイト……いえ、望ちゃん。あなた、お姉さんと戦える？」
彼女は暗い表情でうつむいた。

「そうよね、でも、あの子と戦わなければならない……分かる？」
うつむいたままで、うなづく。それはかすかに首を揺らしただけのように見えた。キーノはその様子を見て、パックを呼んだ。

「パック、私、儀式を始めるから、お願いっ、望ちゃん達を助けてあげてっ」

心から両手を合わせて懇願する。パックは唇を歪ませて面倒そうな顔をしたが、何か思い当たる節でもあったのか、次の瞬間には快く返事をしていた。

「よっし、引き受けてやるよ。その代わり、後で言うこと聞けよなっ？」

片目をつぶり、親指を立てる。ほんのりと、キーノの頬が朱に染

まった。

「もう許せないっ」

二度目の『許せないっ』を発して、クォーラルナイトが空に舞い上がった。どうやら口論の末に衣装替えの交渉は決裂したようである。慌てて、二人のナイトが構える。しかし、二人とも、あからさまに乗り気でなかった。

イノセントナイトが泣いている。どうやら論争の騎士の雰囲気には怯えたらしい。その周囲をぬいぐるみ二人とアルテムが取り囲んでいる。この集団は、この場ではあまり役に立たないようだ。元々、彼女には攻撃的な能力がない。それは彼女自身の性質にもよるが、大部分は力を与えたアルテムの若さのせいだ。アルテムにしても、キーノやパックにしてもそうだが、一人の人間に対し、一種類の魔法しか与えられないとは情けない。皆その力を上手く使っているようだ。ティターニアが力を分け与えた灯に、果たして通用するだろうか。

クォーラルナイトが真上に向かって指を一本立てた。

「水よ、一つの意志となり、我が敵を抱擁せよ」

プールの水が持ち上がった。我らがナイト達は抵抗もせずに逃げ出そうとしている。イノセントナイトは泣きながら、源さんと北島さんに抱えられてその場を離れる。

水は、地面に吸い込まれることなくナイト達を追いつめる。段々と近づいてくる津波に危機感を覚えたのか、ブレイブナイトが一人、振り返る。

「ユウツ、危ないっ」

「お前らはさっさと逃げろっ」

オースはブレイブを追って戻っていきそうだったが、それはできなかった。パックが後ろから押しているからだ。妖精とは思えないほど力強い。

「ちよつと、パックッ　あたしを遊の所にいかせてっ」

歯ぎしりを立てながら、パックが反論する。

「ばっかやろうつ、あいつが信じられないのかよつ。大人しく逃げてろつ、姉ちゃんと戦うこともできないような奴はな」

その言葉で、オースナイトは押されるようにして逃げ出す。それを確認して、剣を正面に構え、ブレイブナイトは呪文を唱えた。

「妖精王の名において、我、汝に命ずる……ノームツ」

柄に付いている帯のうちの一つ、黄色の紐がプツリと切れる。そして、それは彼の前に浮かび上がり、その場で小さな人の形を取った。

土を司る精霊、ノームだ。

彼は剣には宿らず、地面に手をつく。

「後は頼んだぜ」

そういつて、ブレイブはナイト達の方に駆けだした。

「何をやるつもり？ 臆病なナイトさん」

天空からクォーラルナイトが罵声を浴びせる。彼の性格をよく把握している。

それに抵抗するように、ノームが唸った。声にならない、振動のような唸りだった。

彼の眼前に津波が迫っている。

パリッ、と何かが弾けた。続いて、地面が大きく盛り上がる。それは見る間にダムのような大きさになってしまった。これが、ノームの力、土を操る力だ。

ブレイブナイトは、すでに他のナイト達に追いついていた。

「どうだつ、これでもう安心だぜ」

オースナイトがパチパチと手を叩く。イノセントナイトが泣くのをやめて同じく拍手した。

「すごいですう、お兄さまあ」

そこに、クォーラルナイトの声が響いた。

「馬鹿ねえ、あたしがその程度のこと、予想しないわけがないでしよう？」

それにつられて、オースナイトが上を見る。表情が、凍り付いた。

「ユウツ、うえっ！」

そう、確か、津波は地面の上を滑っていた。考えれば分かったはずだ。それは地面に沿って浮いていたのだ。だとしたら、盛り上がった土に対し、津波はそれを這うようにして……。

ナイトが見上げた先には、プール一杯分の水が、大きな水玉となつて漂っていた。まっすぐに彼らの方に向かっていている。

「うわっ」

叫ぶ暇もそこそこに、滝のような雨が降ってきた。

端から見ている私には分からないが、痛く、苦しいはずである。

プール一杯分といつても、一気に落ちてくるとそう多くは感じない。わずか数秒の後には、全てが地面に吸い込まれてしまった。

そこだけ黒土になったように、丸く切り取られている。その円の中で、オースナイトが首を振り、髪から滴を落とした。イノセントナイトは再び泣き出す。

「いたーいっつ」

どうやら相当痛かったようだ。その隣で、源さんが文句を言い出した。

「おやじはともかく、ワシはあんまり水に濡れるとよくないんだ」

自分の手で体を絞っている。やはり、異様な光景だ。

髪から水を払い落としたオースナイトが、顔を上げた。ブレイブナイトは、異常な殺気を感じ、少しだけ後ろに下がる。彼女から離れようとしている。

「ゆーっ？ これはいったい、なにかなあ？」

柳の下ににいるような感覚を、彼は覚えただろう。素早く立ち上がると、大急ぎで逃げ出す。

「まてえっ、この役立たずッ」

オースナイトが弾かれたように追いかける。それを、上空で笑っているものが三人いた。

「相変わらずだな」

パックと。

「痴話喧嘩ですわね」

アルテムと。

「あはは、やっぱりあんたら面白いわ」

クォーラルナイト……灯だった。

その声は、下にいる者にも届いていた。

「ずるーい、アルテムさん。私も連れて行ってくればよかったのに」

イノセントナイトがなじる。しかし、アルテムは平然と説教を始める。

「マナさん、あなたの力なら、今の津波、かわせたはずですよ。」

私は強いあなたを助ける力など持ちません。それに、重いですしね」

「ぶう、マナ、重くなんかないもん」

とは言っても、人間の体重ではアルテムには持ち上げられまい。

そして、彼女にはさっきの攻撃を避ける力があつたというのも本当のことだろう。彼女の力が無機物に命を与える力ならば、ブレイブナイトと同じことができたはずだし、それ以上のこともできたはずだ。それをしなかったのは、彼女が泣いていたからだが、その部分が、ナイトとしての本当の力を発現できない理由だ。彼女がもう少し積極的であつたなら、アルテムの言うとおり、このメンバーで一番の力の持ち主になったかもしれない。

「いてえっ」

オースがブレイブに追いついた。「馬鹿、馬鹿」と罵られながら殴られている。が、ブレイブナイトの一言でそれは終わる。逃げている最中にも、上空からの声が聞こえていたのだ。注意深い奴になったものだ。

「待てよ、望。キーノがいないぜ」

オースナイトがハツとして顔を上げる。さっきの津波で流されたのではないかと心配しているのだ。

「キーノ？ どのなの？」

取り乱し、辺りを見回す。彼女には、灯の接近が分からなかった。

「何をしてるの？ 相手はこつちよ」

肩に触れられる。途端に、オースナイトの体が宙に浮いた。側にいたブレイブナイトさえも気づかないほどのスピードで、敵は近づいてきたのだ。

中空で手足をバタバタさせながら、オースナイトが助けを乞う。

「きゃあああつ、誰か助けてようっ」

その直後、誰かがクォーラルナイトの顔面に体当たりした。悪戯妖精、ロビングットフェローだ。

「きゃあつ」

姿は魔女でも、叫び声は可愛い。パツクに体当たりされて、彼女の魔女帽が飛んだ。ウェーブのかかった長い髪が、顔を覆った手にかかる。オースナイトが魔法の呪縛から解き放たれて地面に落ちた。結構高かったので、痛くてお尻を押さえている。よろけるクォーラルナイトを尻目に、パツクが畳みかけるように言う。

「のぞみっ、あのうるさい女がそう簡単に死ぬわけねえだろ。遊のお陰で、だいぶ時間が稼げたぜ。屋上を見てみな」

誰もが、クォーラルナイトやティターニアでさえも屋上の方を見上げてしまう。

光の柱が、そこには立っていた。

淡く緑色に光るそれは、ここからでは線に見えるほど小さな柱だった。

光柱は、次第に光を増すと、一瞬だけ、揺れた。

そこから……たぶん、人間たちには見えていないだろうが……強烈な振動が放たれる。

無音の振動、それが、皆の下に届いた。

「あああああつ」

誰のものか分からない叫び声が、耳をつんざく。何もない所からいきなり衝撃が訪れて、全員が顔面を守るように手をかざす。

「なにこれえっ」

「いたいですう」

「ちきしょうっ」

「いやあっ」

「おやじい」

「源さんっ」

「もうちよつと大人しく儀式なさいっ」

「油断したわね……」、ティターニアは平然としている。私と同じくらいの力を持っていると、さすがに何ともないようだ。

「召喚終了っ」

ンンウンツ　遅れて、だいぶ遅れてから音が届く。

それを合図にしたように、ピタリと振動がやんだ。

「終わり……？　あっ！」

辺りを見回していたオースナイトが、屋上を指して声を上げる。そこには、すでに光の柱はなかった。

「失敗……ですかあ？」

イノセントナイトが指をくわえて首を傾げる。が、後ろからの声が否定する。

「いいや、失敗じゃあない。新しいナイトさん、こっちに移動しただけだ」

この勿体ぶった言い方は……。

一斉に九人が後ろを向く。

白髪の男が、そこには立っていた。そして、肩にはキーノが腰掛けている。二人は、光の柱に包まれていた。

先ほどと同じ、緑の光だ。

彼らを見て、ブレイブとオースが歓喜に叫んだ。

「木下さんっ」

「キーノッ」

二人が近寄る。木下はそれを柔らかく抱きしめた。

「よく頑張ったな。後は任せておけ」

はにかむような独特の笑いを浮かべて、ポンポンと二人の肩を叩く。キーノがオースナイトの耳元に口を寄せて、

「やっぱり、お姉さんとは戦えなかった？」

と訊く。彼女は、ちらりとブレイブナイトの方を見て、

「それどころじゃなかった」

と返した。聞こえていたのだろう、彼が居心地悪そうにしている。

「さて、ナイトの活躍の場面を取って悪いが、大事なことからここからは僕に任せてくれないかな」

ずい、と前にでる木下に、ティターニアが声をかける。

「お久しぶりですこと、フェアリードクター」

「女王様こそ、相変わらずご清勝のようで喜ばしいことです」

控えめだ。いつもなら『瞿鑠』と皮肉るところだが、子供の前なので遠慮したか。

ティターニアは少々眉を引きつらせながらも、冷静に言葉を返す。

「ドクターこそ、子供のケンカに親がでてくるとは、いささか大人げなくては？」

「いいえ、これはケンカではなく、救出劇ですから。な、灯ちゃん」
そういつて、クォーラルナイトの前に歩み寄る。

彼女が、ドクターにどう応対していいか、問いかけるような目をする。

「敵です」

ティターニアはそう言いきった。

それを真に受けて、彼女は杖を正面に構えて威嚇する。

「こらこら、僕は敵じゃあない。君に真実を教えようとしているだけだ」

意に介さず、クォーラルナイトは魔法を放った。

「石は我が思いをもって敵を貫く」

足下の小さな石ころが浮き上がり、木下に向けて放たれる。

「僕は、フェアリードクターだ」

片手を前にかざす。

石礫は、そこにまるで壁ができたかのように止まってしまふ。映画のワンシーンのようだ。

「なんで……？」

クォーラルナイトには、それが信じられないらしい。一步だけ後ろに下がってしまう。

「境界線を作った。この、石が止まっている部分だけが妖精の世界だ。つまり、フェアリードクターとは、そういった知識を持つ者のことをいう」

淡々と語る木下の後ろで、ナイト達がヤンヤと囃し立てている。

「すっごーい、木下さんっ」

イノセントナイトも、パチパチと手を叩いていた。

木下は、一步、クォーラルナイトに近寄る。

「僕は、何十年も妖精たちを助け、共に生きてきた。妖精の知っていることは、たいてい教えてもらった」

もう一步、代わりに彼女が下がる。

「同時に、妖精王の騎士となり、微力ながらその力を使わせてもらっている」

そこで、木下は後ろを振り返る。

「お前達みたいに変身はできないけどな」

次いで、敵のナイトが怯えたような声音で質問する。

「真実って……何よ」

少しだけ、息が荒い。

木下は相変わらず勿体ぶって、少しずつ順を追って話していく。

「灯がなぜ妖精妃に付き添っているのかは分からないが、お前がやっていることが何か、くらいは分かるだろう？」

木下は境界を解いて、石礫を地面に落とした。

「つまり、夫婦喧嘩のとばっちり、でしょ？」

灯がそっぽを向きながら応える。

「そう、灯は、妖精について意外に詳しいらしいな。父親から聞いたよ」

豊の名前がでてきて、彼女はさらに動揺する。

「パパは何の関係もないでしょ」

木下が優しく笑った。主導権を握ったことを確信したのだ。

「悪い夢の再現だよ。つまり、『A Midsummer Night's Dream』のね。君はインドの子供だ。そして、ナイト達が、今度は口バ頭の役者を演じる。少しだけ違うのは、今度は君が原因ではなく、先に夫婦の不仲があったことだ」

もちろん、文学に明るくない子供達には分かるまい。が、クォーラルナイトには理解できたようで、うつむきながらも納得しているようだ。

「さて、女性には男性にかしづくべきだ、なんてことがまかり通っていた頃から彼らは生きている。しかし、彼らは何ものにも囚われない。それなりに自分で良識をわきまえているからだ。けどね、今回ののは少しやりすぎだな、女王様」

キツ、とテイターニアを睨め付ける。女王はその視線を真っ向から受け止める。冷淡な、あくまで静かな目で。

「キーノ、召喚を」

言われて、キーノが言葉を紡ぐ。

「小さき、善き者の願いに応え、かの者をこの場に現せよ。汝の名は『灯』……ただし、その姿に化けている偽りの君を」

緑の柱が一段と光を増す。それは、やがて黄色から白へ、その色を変えていった。

「きやあ」

オースナイトの悲鳴が聞こえる。びっくりしたのだろう。

そのまま光は天を貫き、それが数秒続くと途切れるように消えていった。後には静けさと、一人の人物が残った。元々光柱があった場所にだ。

漆黒の、ウェーブのかかった長い髪、それを後ろで束ねている。少し垂れ目気味の細い瞳、性格の強さを表しているようだ。クリム色のパジャマを着た彼女は、全身黒づくめのクォーラルナイトと同じ容姿をしていた。

契約の騎士が、何歩か後ろに下がりながら二人を見比べる。それ

は、ブレイブナイトも同じだった。そして、純真の騎士が一言、見たままの感想を述べる。

「同じ……人ですう」

木下が、パジヤマ姿の灯に近づく。

「ここはどこ？」

灯は自分がどうなっているのか見当もつかない様子だ。ドクターはそれを無視して話し始める。

「さて、これは幻想か夢か、それとも妄想か……はたまた妖精が見せた悪戯か。真実は……取り替え子、永遠の別れ、養子縁組。そして、これはただの　嘘だ」

パツと手をかざす。その軌跡に従って、炎が迸った。

「あっ！」

オースナイトが駆け寄り、木下の胸倉をつかむ。

「お姉ちゃんになにすんのよっ」

木下は動じず、淡々と云ってのけた。

「はて？　どちらが本当の灯か……分かっていいのか？」

パジヤマ姿の灯がその姿を現す。

「燃やされて、悲鳴をあげない人間なんていないよ。これはただの丸太だ」

言葉通り、灯は太い丸太に姿を変えた。風だけが通りすぎていく中を、フェアリードクターはさらに声を張り上げる。

「チェンジリングによって妖精に魅入られた子供は、妖精の祭りをすぎると妖精の子として認められ、元の世界には戻れなくなる。明日はミッドサマーだ。君は、望や豊、そしてお母さんと離れて一生を過ごすつもりか？」

魔女帽が脱げたままのクォーラルナイトの髪が、風にさらされて乱れている。今の彼女の心も、同じように揺れていることだろう。

「あ……」

その、躊躇いの一声がそれを示していた。

「あかりっ、だまされちゃだめっ。そんなの嘘ですよっ」

ティターニアが半狂乱になって叫んでいる。が、クォーラルナイトの動揺は消せない。苦渋を示し、ティターニアはボソボソと呪文を唱えた。

ふっ、と二人の姿が消える。

「あっ、お姉ちゃん……」

オースナイトはそれ以上何もいえなかった。同時に、変身が解け、元の姿に戻る。イノセントナイトが、そんな彼女に寄り添っていた。「お姉さま、元気だしてください」

「だいじょうぶっ、ワシらに任して」

源さんも彼なりに励ましている。北島さんの姿は見えない。すでにイノセントナイトが紙袋の中に戻したのだろう。

妖精たちは、それぞれ人間たちの肩に乗っていた。砂を散らした夜空が、瞬きしながら彼らを見ている。

夜。静寂だけがそこにはあった。舞台に、全ての小道具がそろっている。後は、それをどう使うか、どういうシチュエーションで使うかにかかっている。

ブレイブナイトは、望の落胆を傍目で見ながら、変身を解き、フェアリードクターに近寄った。

彼らは文学に明るくない。

もちろん、我らの過去に、どんな催しがあったのかも知るまい。だからこそ聞くのだ。

「全て、知ってるんだろ？ 木下さん……フェアリードクター」

幕間二

幕間二

『MUCH ADO ABOUT NOTHING 空騒ぎの始まり』

「どうかこの服が似合いますように、着ないうちから心が重くって仕方がないのだけれど」

あたしは誰にも聞こえないようにそう呟いた。でも、鏡の前に立って洋服をあれこれ迷っている姿で、彼女にはすっかり分かってしまったみたいなのだ。

「どうしたの、望ちゃん。遊君とデート？」

そう、あたしは望……月森望だ。元気いっぱいの子で、恋とか、そういうことには興味がない……と言ったら嘘になる。お姉ちゃんの恋人、今もキーノが言った友達の遊のお兄さん。あたしはあの人のことが好きなのだ。

「違うよ、だって……明日は学校だし……それに、今日あんなこと言われた後じゃ、そんな気も起こらないよ」

今日は六月二十三日。一時間ほど前、あたしは学校から戻ってきた。夜の学校から。

「これは、気を紛らしてるのっ。笑わないでね？ あたしさ、こうやって鏡の自分と話すのが好きなの。だって、鏡の中の自分って、あたしと正反対な訳じゃない。そんなこと考えたら、こういうのも面白いかって やっぱり、変かなあ？」

キーノは、笑って応えてくれた。でも、あたしを馬鹿にしている笑いじゃない。あたしの大好きな、とびっきりのキーノスマイルだ。「ばっかね、そんなことある訳ないじゃない。いい、豊から聞かなかった？ 鏡ってのはね、特別なの。女の子の特別」

何のことだかちつとも分からない。木下さんもだけど、妖精の仲

問って、みんな勿体ぶった話し方をする。まるで、推理小説か劇を見ているみたいだ。それに気づかずに、キーノは先を続けた。

「鏡ってね、魔法がかかっているの。女の子にだけ効果がある魔法……鏡は、女の子の、ほんの少しだけ未来を映してくれるの。大人になつた自分、素直になつた自分、綺麗になつた自分……それは、あなたがどんな自分の姿を見たいかによつて違ってくる。望ちゃんには、どんな自分が見えた？」

あたしは、下を向いてモジモジしてしまった。だつてつ、そこには遊の顔を見ながら、顔を赤くしているあたしがいたからつ。

キーノにはそんなことくらいお見通しのようだ。さすが二百年も生きているだけはある。

「あはは、何だ、やつぱりそうなんじゃないつ」

「だつてえ、でも、違うよ」

あたし、なに言ってるんだろ？

「遊のこと、嫌いじゃないけど、でも、愛してるとか、そういうのとは違うよつ」

このませガキツ、とでも言いたそうな顔で、キーノがこっちを見ている。なんだか腹が立つたので、あたしも言い返すことにした。

「なによつ、そんなこと言つてえ。自分だつて、パツクのが好きなんですよつ」

ボツ、と燃えるようにキーノのほつぺたが赤くなつた。小さい顔が、サクランボみたいになっている。面白い。

「だつてだつて……ふう、いいわよ、自分からけしかけたんだもんね、降参する」

あらら？　なんだか神妙な顔つきになつてしまった。逆にあたしが緊張してしまう。ちよつと、からかうだけのつもりだったのに。

「そうよ、私はパツクのが好きよ。でもね、人間さんにはわからないだろうなあ、私の気持ち。はあ」

もう一度溜息をつく。そういわれると、なんだか悔しい。どうあつても力になつてやらなきゃ、と思つてしまふ。あたしは、恥ずか

しいのを我慢して、キーノを勇気づけようとした。

「キーノッ、あたしね、遊のこと愛しちゃいけないけど、でもね、この前、遊の変身を初めてみたときから妙に気になっちゃって……こういうのは、何かのきっかけがあればちよくちよく変わっちゃうものだと思うの。それに、キーノ達はまだまだ時間がたっぷりあるんだし……えっとえっと、他にはあ　うーんと」

悩んでいると、ポンポン、と鼻の頭をなでられた。キーノの寂しい笑顔が間近にある。

「アリガト、望ちゃん。けれど、問題はその『時間』なの」

やっと落ち着いたあたしは、キョトンとしてキーノを問いたです。
「時間が問題って？」

「ようするに、彼と私の年齢の問題よ」

「パックっていくつなの？」

本当は訊いて欲しくなかったんだろう。彼女はちよつと大きく息を吸い込んでから答えた。

「少なくとも、千年は生きてるわね」

「せんねんっ？」

思わず立ち上がったしてしまう。千年って、それは尋常な数字じゃないぞ？

「パックはね、神話の時代から生きている人なの……つまり、あんな馬鹿ばかりやってるけど、立派なお偉いさんだってこと。今回のことでも、フェアリードクターから……ひいては妖精王様から直々に加わるように言われてるんだから。私はパックに誘われてついているだけ、私程度の能力なら、誰だってもってるもの。ごめんね、大した力を与えてあげられなくて」

話がそんなところまで来るとは思わなかったあたしは、まだ心の準備ができていなかった。

「あのあの……うにゃあ。ああもうつ、なんて言っていていいかわかんないけど、キーノはちゃんと役に立ってるよ。今日だって、キーノがいなかったらあたし達、やられてたかもしれないんだよ？ それ

に、パックだつて、役に立たないって思ったら、キーノのこと、誘ったりしないよ　あつ！　もしかして、パックもキーノのことが好きなんじゃない？」

そう口走ると、なんだかそれが本当に正しいことのように思えてしまふ。パックの彼女に対する態度は、親しみのこもった悪戯っ子だ。

「そんなつ、そんなことないよ。それに私は……いつもトラブルメーカーで」

「ううん……そんなことない」

キーノに向かって微笑みかけた。

「でしょ？」

その後でお姉ちゃんみたいにニツ、と笑う。

結局、あたし達は自分の気持ちを隠していることなんてできないんだ。キーノを手の平に乗せ、そつと胸に抱く。

「頑張ろうね、キーノ」

あたしにしては珍しく、優しく言えたと思う。その証拠に、キーノは小さい声で一言だけ返してくれた。

「ん……」

こつん、と彼女の頭が胸に当たる。そして、キーノは飛び上がった。あたしの顔を正面に見据えて、最後の溜息をつく。

あたし達は同じことを考えていた。そして、それを口にした。

『あーあ、惚薬つてのがあればなあ』

キーノはそんなことを言いながら、隠していたのだ。

まさか、本当に惚薬があるなんて、その時は夢にも思わなかった。

第一場

第三幕

『楽しく楽しく優しくね？ 妖精王登場！』

第一場

この夏の祭りの当日に、それを喜ぶように太陽が燃えている。
太陽と月の追いかけっこもいい加減飽きてきた。私はそれをもつ
星の数ほど見てきているのだ。

祭り、ミッドサマーの夜。この地は幻想に包まれる。空は光を愛
で、月は白銀の砂をまき散らす。そして我ら妖精は、踊る。歌う。
そして、子供らの誕生を祝うのだ。

そう、祭りとはめでたいものだ。

私はそれを、心から祝いたいと思う。

何もかも、すっきりと元通りにして。

さあ、元のさやに収めようではないか。我らはいつでもそうやって
生きてきた。人間は過ちを繰り返そうとはしないが、我らは違う。
過ち是一種の変化だ。変化のない生など、何が楽しいというのだろ
う。

特に、学生は辛い職業だ。変化に乏しい。いや、日常を細かく見
ていると、人間のうちで彼らほど変化に富んだものはいないかも知
れない。だが、子供の心はもつとも変化から遠い存在だ。表面的な
性格は変容しても『子供』という事実と、それが持つ基本的な概念
だけは変わらない。それは無垢だ。

どういった意味に捉えようと、彼らは無垢だ。だからこそ、残
忍でもあるのだが。

私の頭のすぐ上にも、変化に乏しい学生の一人がいる。
望だ。

私は相変わらず木の上で一休み。しかし、彼らのことに思いを馳せると、のんびりしている場合でもなさそうだ。

望、遊、愛……彼らはナイトとして絶対的に変化した日常を体験した。だが、こうして学校に行っている。友達と遊んでいる。彼らが彼らであることは変わり様がないのだ。

「はーあ」

望が溜息を一つついた。その後ろには教師が密かに歩んできていた。

「のーぞーみーい、何回いったら分かってくれるんだ？ お前は頭いいんだから、ちゃんと先生の授業聞いてくれよお……そりゃ、確かに望は先生の授業聞いてないくせに成績はトップクラスだ。だが、しかし、学校とは、教育とはそれだけでいいものだろうか？ 先生と生徒との交流、二つの間に流れる熱い血潮、そして、私は十年後の、二十年後の同窓会で君たちにこういわれるんだ。『先生が教えてくれたお陰で、こんなに立派になりました』。うんうん、これぞ教師冥利に尽きるってもんだろ？ 聞いているか、のぞみ？」

教師は何事かを一気にまくし立てると、望の正面に回ってきた。それにつられて教室の生徒達が望の顔をのぞきに来る。

「はーあ」

望は、全く聞いていなかった。

教師の手に力が込められ、教科書が引き裂かれる。

「のーぞーみーっ！」

遊が、そんな先生を見て、望のフォローにはいる。

「先生、許してやってください。実は……本当は言うなっていわれているんですけど……昨日から望の姉ちゃんが行方不明で……」

ざわっ、と場が喧噪に包まれる。教師の表情が、一瞬、土偶のような間の抜けたものになり、それからすぐに頭を振って元の顔に戻した。しかし、驚愕は拭えない。

「そっだったのか……だから……」

教師は、あまりの事実に失念していた。望が毎日、教師の話を聞

いていないという事実を。

遊は密かに笑う。近頃の子供は、他人の不幸でも使えるものは使う傾向にあるらしい。確かにお陰で望は追求から逃れることができたのだが。

「はーあ」

今日何度目かの、もう数えることすらできないくらいついた溜息を、望がもう一度ついた。

第二場&第三場

第二場

時は、わずかに戻る。

舞台も、その趣を変えよう。

第三場

誰もいないはずの校舎の一室に、煌々と明かりが灯っている。

「便利ねえ、マナちゃんの魔法って」

つまり、鍵のかかったところでも『本人』に開けてもらえば何の問題もないわけだ。愛の魔法は『無機物に命を与える魔法』だ。ドアに命を与え、お願いして開けてもらうことなど、造作もないこと。六月二十三日の夜。ティターニアと灯が消えた後、我らがナイト達はそこにいた。

「そうでもないですう」

クネクネと体をよじらせながら愛が恥ずかしがる。いやらしくなく、媚びてもいない。彼女の自然な『照れ』に、皆が笑った。

「さて、みんなイスをもってきて座らないか？ このままでは話しくかるう」

フェアリードクターの声を聞いて、全員がイスをもちだした。とはいえ、妖精たちに人間用のイスは大きすぎるようだ。イスは全部で四つ。木下、望、遊、愛の分だけだ。そして、それぞれの宿主に妖精が座る。

パックは遊のヒップホップショートの上に。どうにもツンツン頭は座り心地が悪そうだが。

アルテムは愛の膝の上に、横座りしている。こちらは居心地がいいのか、少々眠たそうな顔をしている。

「アルテムさん、もう、おねむ？」

いや、アルテムは普段から泉家でこの位の時間に寝ているらしい。いくら妖精として幼いとはいえ、齢五十にもなるうものが……情けない……。

キーノは望の手の平の上で怒られていた。

「もうっ、心配したんだからねえっ、今度から、どっか行くときはちゃんと行く先を言ってからにしてよっ」

どうやら先ほど儀式を行うために場から消えたことを怒っているらしい。始めは素直に聞いていたキーノも、段々と腹が立ってきたようで、

「なによっ、私は望ちゃんのことを心配で、だから……ふんっ」
などと憤っている。

「こら、いい加減にしないか。話を始めるぞ」

ドクターが怒った。

『はい』

二人とも気のない返事をする。遊と愛がそれを笑っていた。

「さて、あれはいつのことだったろう。些細事がケンカの原因だった。とにかく、二人は通算で二百回目に当たる別居を始めた。それが春になりかけた時のことだ。それからしばらくして、ティターニアは灯を連れ出した。ちょうど春の祭り『ベルティナ』が終わった次の日のことだ。あの日はさすがに二人とも顔を合わせるからね。

そこでまた大喧嘩だ。売り言葉に買い言葉……最後にティターニアが吐いた台詞が『憶えておいでなさい』だった。彼女は灯を使って、妖精たちをボガードに仕立て上げていった。大抵はキーノやパツク、そして僕と豊で片づけられたんだがね」

そこで、望が大声を上げる。

「パパもおっ？」

木下はそれを当然の反応だと受け取ったのか、苦笑いを浮かべながら望の頭に手を置いた。

「そうだ。豊には君たちのような能力はないけど。それ以上に十

分な知識がある。まあ、そういうわけで退治してきたのだが、問題は期限だった。灯は六月二十四日のミッドサマーを迎えると妖精界の住人になってしまう。それだけは避けなくてはいけない。しかし、肝心の灯に戻る気がなくては帰ることはできない。もちろん、僕たちが諭しても帰ろうとはしないだろう。そこで、君たちの出番だよ。お陰で、僕たちが探しても出てこなかった灯が、君たちが表舞台に出てきたために姿を見せた。油断や、みくびっていた部分もあったんだろう。たぶん、灯は自分の置かれた境遇を知らない。だからこそテイターニアも灯を隠していたのだろうから。今日、灯に真実を知らせることができた。あとは、彼女がこの『遊び』に飽きてくれることを祈るだけだ」

遊が一言口を挟んだ。

「ようするに、オレ達がしなきゃなんない事って、何なんだ？」

相変わらず的確な意見だ。ほんの三日前まではそんな人間ではなかったのだが、ナイトになったことで自信をつけたのだ。

確かに、前にも言ったようにナイトになるとそれだけの変化がある。しかし、それはあくまで本人が元々持っていたものなのだ。つまり、遊はその優しさの裏に、これだけの力強さを蓄えていたわけだ。

木下もそんな遊の変化に驚きつつ、それでもゆっくりと微笑んだ。彼の頭に手を置いて、今度は真剣な表情に変わる。そして、一言。

「ぶったおせ」

途端にキーノが反応した。

「キヤー、ダメダメ　テイターニア様をぶったおすなんてとんでもない……って……あれ？　このセリフ、どこかで言ったような気がするなあ」

激しく手を振って抗議していたが、ふと正気に返って考え込む。そこに、望が助け船を出した。

「なんだ、やっぱりぶったおしていいんじゃない」

それを聞いて、キーノも思い出したようだ。

「あ、そうか。ブラウニーの時のセリフだ」

そうしておいて、話が本題から離れていることに気づく。

「そうじゃなくて、どうしてです？ フェアリードクター……ティターニア様を倒せなんて」

遊も不思議そうな顔をしている。その答えが意外だったからだ。フェアリードクターは妖精たちを守るために存在している。その長である妖精妃を危険にさらすようなことを依頼するなど……。

それが、私の依頼したことだとは、望たちは知りようがない。仕方がないのだ。ティターニアは掟を犯した。すでにこれは、ただの夫婦喧嘩ではなくなってしまったのだ。

それ以後、木下は口を開こうとはしなかった。それきり、自分の魔法を使って消えてしまったからだ。

第四場

第四場

結局肝心なことは分からないまま、ミッドサマーを迎えることになった。

皆、暗い。

緊張していると、その責任の重さからだ。

自分たちの活躍いかんで人ひとりの運命が決まってしまう。子供達に背負わずには、重すぎる荷物だったかも知れない。

昨日と同じく屋上で昼食を取っているとき、望が聞いた。

「ねえ、キーノ……人間の世界に戻れなかったら、どうなっちゃうの？」

それが一番気になるところだ。

望、愛、遊がキーノの顔をのぞき込む。

弁当箱の中身に爪楊枝を刺していたキーノは、それを合図にしたように動きを止める。

躊躇しているのだ。

パックはそんな彼女の思いを知っているのに、あえて何もしようとしてない。顔を背けているだけだ。

愛が望の隣で箸を口にくわえて見ている。望も同じ格好だ。しかし、それを笑うものは誰もいなかった。

「私はね、今年で、二百三十歳になるの。もう、あまりに長いこと生きていたものだから、自分が生まれたときのことなんて憶えていないけど、でも、その長い時間の間に、いろんなものを見てきた。人間たちの争いが、一番多かったわ。だって、人間の奴ったら、いつ覗きに行っても、ケンカしてばかりなんだもの」

キーノがこの町の十二夜の森に居着いたのはつい五十年ほど前のことだ。それまで、彼女は世界を旅してきた。それは、沸き上がる

好奇心を満たすためであつたらしい。しかし、百数十年ぶりに帰ってきた彼女は、ずいぶんと疲弊していた。

「戦争で辛いことってね、人が死ぬだけじゃないの。人が生きていなくちゃいけないってのも、ずいぶんと辛いことなのよ」

人生は歩き回る影法師にすぎぬ、哀れな役者だ。誰かが演じなければならぬ役、というものもあるのだ。それが望む望まないに関わらず。

キーノはさらに続けた。

「両親に死なれた子供、あれほど悲しい生き物はないわ。だって、そのままでは死ぬしかないんですもの。だから、私はその子達を妖精の国の住人にした。それが、彼らに永遠の苦しみを与えるなんて考えもしなかったから」

そういつて、キーノは一度顔を伏せた。

そして、しばらくして片手で顔を拭つて、話を続けた。

「戻れなくなつた子供達は、妖精として生まれ変わった。始めは良かったの。みんな生きていけることに喜びを感じていたの。でも、人間つて、長く生きるのには向いてないのね。孤独感、郷愁、そして、生きる事への絶望……彼らはこの暮らしがずっと続くことに耐えられなかつたのよ。妖精として、ほとんど永遠ともいえる命を手に入れた彼らは、十年もしないうちに自ら死を選んだ。妖精に生まれ変わった彼らは、死んで、もう一度人間に戻る。でも、それは死んだあとの話……」

妖精によつてチェンジングされた子供達、彼らは祭りの日に生まれ変わることができる。生まれ変わった人間は新たに妖精としての命を得るのだが……その結末はキーノが言つたとおりだ。まさかテイターニアがその愚考を繰り返すとは思えないが、どちらにしても、祭りの日を過ぎても人間界に戻らなかつた人間は、妖精界の重力に囚われてしまう。

今日が終わつた瞬間、灯は人ではなくなつてしまふのだ。

望が沈黙を破つて元気に叫んだ。

「うんっ、これですつきりした。ティターニアをぶったおして、お姉ちゃんを取り戻すっ！　よかったじゃない、目的がはつきりしたんだから。たぶん、あいつらのことだから今日もちよっかいかけてくるよ。みんなで迎え撃ってやるっ」

ティターニアはやってくる。それだけは確実だ。何しろ、昨日は木下にやりこめられてしまったのだ。女王としてのプライドが許すはずがない。リベンジを試みるのは当然だといえよう。

「そうだな、やっちまおうぜっ」

「殺しちゃいましょうっ」

物騒な結団式が執り行われている。それを見ながら、パックが一言だけ呟いた。

「変な奴ら……」

キーノは彼らの様子を見て、改めて不安になったようだった。

「ティターニア様を殺しちゃダメだってばぁ……」

呟き達は、空に木霊することはなかった。

第五場

第五場

午後からは美術の授業だった。

「じゃあ、今日はお友達の似顔絵を描いてみましょう」

いつもの男の先生ではない。まだ若い、優しい顔をした女性の教師だった。

「はい」

児童達が元気よく答える。普段の生活と、授業中では、子供達の様子が違う。普段はあんなに憎まれ口を叩く望達なのに、こうして授業を受けている姿を見るとまるで劇を見ているような気分になせられる。ようするに、猫をかぶっているように見えるのだ。

それは、日本人の社交性というものだろうか。

授業内容は単純だ。

各々、好きな友達と向かい合い、お互いの顔を写生するというものだ。

「ユウツ、いつしよにやる？」

「いいぜ。でも」

遊の様子が少しおかしい。

「なによお」

渋る遊を望がなじった。どうやら思い通りの反応がこなかったみたいだ。

「だってよ、お前、下手なんだもん」

彼がそういうと、一瞬、望は苦笑いを浮かべて、それから頬を膨らませた。おなじみの表情だ。

「ふんっ、どうせあたしは下手くそですよーだ……でも、キーノがいなくてよかったかな。笑われないですんだし……ユウツ、あたしが絵、下手だってこと、キーノには内緒だからね」

私が間違っていた。望は、こういった反応を期待して遊をなじったのだ。その話題の主だが、アルテム、パックといっしょに遊びに行ってしまった。やはり、学校は嫌いのようだ。私も、こういった用事がなければ滅多にこない場所だけに、何もいえない。

遊と望が痴話喧嘩をしていると、そこにショートボブの女の子が現れた。二人を見て、クスクスと笑っている。

「またやってんの？ お二人さん」

二人を見比べて、ニヤニヤと笑う。

「キーちゃんっ」

望と遊が同時に叫んだ。

それと同時に口をつぐんでしまう。さっきの会話……キーノのとだ……を聞かれはしなかったかと心配しているのだ。

「ほんつと、仲がいいわよねえ、あんた達。もうすぐ真夏だつてのに、そんなに熱くなつてどうするの？」

冷やかしている。どうやら会話の内容までは聞いていないようだ。それで、二人ともホツとする。それにも関わらず、キーちゃんがつつこんできた。

「あれ？ ホツとしてるけど、なんか隠してるわけ？」

相変わらず鋭い子だ。再び、ギクシャクと釈明する二人。

「いや……そのお、ホツとしているだけにホツトだなあ……なんて……」

望が洒落でごまかそうとするが、場を寒々とさせただけだった。

「のぞみい……バカ？」

言われてしまった。さすがの望も、がっくりと首をうなだれた。代わりに遊が続く。

「そんなことよりさ、お前の相手は誰なんだよ」

上手く話をそらした。質問されては答えないわけにはいくまい。

それに、キーちゃんはなんだか嬉しそうだった。

「へへえ、誰だと思う？」

チラチラと後ろを見ている。すでに皆が絵を描き始めてから数分

が経過している。静かな中で騒いでいるのはこの三人だけだ。そして、その中で相手のいないものはたった一人しかない。それが、キーちゃんの相棒に他ならないのだ。

遊がめざとくそれを見つけた。

「なるほどね」

そして、そう呟く。視線の先には、見た目、少々野暮ったい感じの男の子がいた。

「え？ なになに？」

望には事情が飲み込めていないようだ。しきりに飛び上がってキーちゃんの視線の先を見ている。

「なんなのよお」

本当に鈍感な少女だ。遊もキーちゃんも呆れてしまった。

「相変わらずねえ、ユウも苦労するでしょう？ こんなやつ好きになると」

その言葉に、遊は溜息で返事をした。

それを最後に、キーちゃんは席に戻る。どうやらキーノのことは追究されずにすんだようだ。

教師はそんな様子をずっと見ていた。しかし、何も言わない。それは、彼らが小学生で、落ち着きがないのを分かっているのもあるだろうし、特に望達だから、という理由もあるだろう。彼らが分別を持った人間だと知っているからこそ、女教師は注意しなかったものと思われる。

それが真実かどうかは分からないが、言葉なんていくら言い繕ってみたところで、事実が明らかになれば聞く人を必ず不愉快にさせるものだ。呆れてものも言えなかった、という場合もあるので、真実を究明するのはやめた方が良さそうだ。

さて、静かになった。

とはいっても、そこは子供のこと、必ずしも静閑としてるわけではない。ザワザワと忙しないことだが、それでも普段に比べれば静かな方だ。

遊が望の絵を描いている。

……少し美化しすぎてはいないだろうか？

望が遊の顔を描いている。

……なるほど、下手くそだ。

どっちもどっちだな。

と、私の感想はおいておくとして、どうにも暇になってきた。私もそろそろお暇して、悪戯妖精どもの様子でも見に行くとするか。それとも、先ほどのように木陰で一休みするか……後者の方にしてよう。いくら私でも、これだけ長い間姿を消していると疲れる。しかも、透視能力者や妖精たちに見つからないように隠れていなければならぬのだ。

見つけた瞬間に、私は表舞台に……つまりティターニアを相手せざるを得なくなるだろう。それが私の本来の役目だから。特に、ロビングットフェローなどは面白がって私を矢面に立たせるに違いない。しかし、そのことによってティターニアを刺激するのは避けたい。

ふむ、そろそろ窓を抜けるか。

そう思ったとき、私が抜けようとした窓から何かが進入してくるのが感じられた。その行為は、人間では決して行えない。姿を消し、閉まった窓から入ってくるなんて。それに、魔法の力が感じられる。どうやら、悪いところに居合わせたようだ。

せっかく今から休もうとしていたのに。

まず、黒い服が見える。それも、窓をすり抜けてくるのだ。それから、杖に乗った人の姿が順番に見えてきた。

姿を消しているのは、周りで騒ぎが起きていないことからすぐに分かる。

クォーラルナイトだ。

手にはなにやら箱を抱えている。白い正八面体の箱だ。一見した
だけではどこから開けるのか見当もつかない。

彼女は、望達の目の前を通って教室の中央にやってきた。

セコンド・サイトでも見えないほど強力な魔法が彼女にかかつて
いる。そんなことができるのは、私を除いては一人しかない。

「あーら、嫉妬深いオーベロン様、今日は祭りの日だというのに、
こんな所でのんびりなさってよろしいのかしら？」

ティターニアが、私の背後から声をかけてきた。私は、慌てて振
り返る。

「ふんっ、高慢ちきのティターニア殿、私は役目を果たしているだ
けだよ」

「あら、そうです。いいんですのよ。そうやってお仕事に励んで
いらしても。いつも女は男の犠牲になるものと決まっているのです
からね。あなたの寝間はおるか、そばにも寄らぬと心に誓ったあた
しなのだから」

「待て、世間知らずのわがままもの。このオーベロンはお前の夫で
はないのか？」

「それなら、あたしはあなたの奥方というわけ。あなたはいつもそ
うやってあたしのことを縛っておこうとなさるんだわ。そうやって
そばに置いておくだけであたしが幸せだと思っている」

「それはお前が外を出歩いて色目ばかり使うからではないか。お前
ときたら、人間の男を惑わし、犬をさかりづかせ、鳥を誘惑して空
から落としてしまう始末。かこの鳥よろしく私のそばで鳴いていれ
ばいいものを……」

「それもこれも、嫉妬がつくりあげた根無しごと。この夏の始めか
ら、そうしていつもうるさく詮議だてばかり」

返答に詰まってしまう。これでは以前の繰り返しではないか。あ
の、シーシアスの時代のケンカと。

それでも奥の怒りは収まりそうになかった。どうやら私が考えて
いたよりも、事態は悪い方向に向かっているらしい。思ったよりも

相手は堅牢で、嫌みなやり方をしてくる。

「ティターニア、そろそろ始めようよ」

クォーラルナイトが声をかけてきた。私の『奥方様』に向かって。彼女はすぐに一つうなずく。

「さーで、世にも不思議な恋物語の始まり始まり…… ってね」

正八面体の箱を両手で潰す。なるほど、道理でふたが見えたらないわけだ。『中身』が漏れないように始めからふたなど存在しないのだ。

ふと見ると、ナイトとティターニアを、薄い光の膜が覆っていた。外界との隔絶をはかる結果…… 昨日、木下が使ったものと同じだ。それに倣って私も膜を作る。

一瞬遅ければ危なかった。圧力に耐えきれなくなった箱から、中身が飛び出したのだ。

「しまったっ」

今頃気づいた。どうせならば、逆にあの箱に結界を張ればよかったのだ。そうすれば、この教室の者を救うことができたのに。

しかし、もう遅い。

そこから煙が飛び出し、一気に部屋を覆ってしまったのだ。ティターニア達が人を殺すことは絶対にないから、それだけは安心していられるが、しかしいったい、何をするつもりだろう？

煙は、すぐに具現化した。つまり、児童達に見えるようになったのだ。教室に突然湧いてきた煙に、全員が半狂乱になる。それは、望と遊も同じだった。

「やあああっ、なにこれえっ」

「ちきしょうっ、ボガードか？」

遊はそれでも冷静さを完全にはなくさない。すぐにボガード、ティターニアの仕業と勘づく所など、私のナイトにしてもいいほどだ。両手を振り回して、誰もが煙の猛威から逃れようとする。しかし、それが急に止んだ。

呆けたように立ちつくす児童達を見ながら、私はそれが何である

か閃いた。

「あら、勘がいいのね。気づいた？　あなたがむかし使ったものを、ちよつと改良してみたの。キューピッドが冷たい月の女王に向かつて放った矢が、目標を外れて間違つて小さな花に突き刺さった。うぶで真つ白な花弁も、恋の神様が放った愛の鏃に唐紅に顔を染めたつて話。その、『浮気草』をちよつと品種改良して　ほら、近頃つていろいろと便利だからそういうことができるわけ　こんな薬を作つてみたの」

ティーターニアが手を挙げると、煙が一瞬にして消え去った。どうも、皆の様子がおかしい。顔は真つ赤に染まり、目の前の相手を凝視して一步も動かない。

そして、彼女が口を開いた。

「この煙を吸つたら、思い人と同時に、目の前の人物を……男であれ女であれ……好きになつてしまつていうもの。どう？　少しは面白い余興でなくつて？」

とんでもないことをする。とつさに、私はクォーラルナイトに話しかけていた。

「あかりつ、お前はこんな事をしている場合ではないのだろう？　早く人間界に戻る決意を固めないと、妖精になつてしまうぞ」

彼女は首を傾げた。

「ふーん、でも、それもいいかもね。いい加減、人間やつてるのも飽きてきたし」

どうしたというのだ。昨日はあんなに怯えていたのに。この期に及んでティーターニアに手を貸すことといい、彼女の心が読めない。そんなことをして時間が過ぎていくうちに、児童達の様子が変化してきた。

そつと、目の前の相手に近づいていく。

そして、どちらからともなく、抱きしめあつていた。

「ずつと前からあなたのことが好きだったの」

「うん……僕も………」

その中には、キーちゃんの姿もあった。まあ、彼女の場合は目の前の相手がちゃんとした思い人だったからよいものの……しかし、それにしても薬の力で告白させられるのは気分が悪いものだ。心中を察する。

そして、望と遊も、おかしい状態になっていた。

「ユウ……あれ……おかしいな、なんか、顔が熱いよ」

そういいながらも、望は遊の方に近寄っていく。それはまるで二本の足に意志があるかのようだ。

「そっか？　そういわれれば、オレも、なんか暑くなってきた」

気づいていないようだが、二人とも呼吸が荒い。この薬、いったいどれくらいの強さなのだろう。知らずの間に二人はお互いの唇が届く距離まで近づいている。

「ねえ、ユウ……どうして近頃カツコイイの？　ちょっと前のユウなら、あたし……こんなにドキドキしなかったのに……」

ギョツと目を瞑る。それは決意の表れのようにもあつた。

「オレだって、そんなのわかんないよ。でも……オレは、オレはお前のためなら、いくらでも格好良くなってやれるぜ。だって……オレ」

言い終わる前に、望の方が行動に出た。

軽い、キスだ。

桜色にほんのりと染まつた遊の頬に、望が目を瞑りながら唇を触れさせた。緩やかに震えている。その振動が遊にも伝わったのか、彼は望を抱きしめた。

……ダメだ。このままでは望と遊に期待するわけには行かない。すぐに、私は飛び出した。姿を隠すのも忘れて、一目散に跳び去ったのだ。

早く、早く。我が信頼すべきロビンゲットフェロー、そして祭りの司祭役であるキーノ、二人の力が必要だ。もう一人のナイト、イノセントナイトの愛にも頑張ってもらわなければ。

穩便に納めようと運んできたこの芝居、どうやらまだ一混乱ある

らしい。

私の予定では、ティターニアに三人がかりならば楽々と勝てるはずだったのに。そして、打ちひしがれたティターニアを、私がそつと包んでやるのだ。いつも、そうやってきた。それは夫婦の約束事のようなものだ。こうして時々愛情を確かめることで、永い夫婦生活営むことができる。

が、今回はどうにも調子が狂ってしまったている。灯が間に入っているからだろうか。それとも、これはあいつからの、本当の宣戦布告なのだろうか。

私は、鳩の羽を広げ、空に羽ばたいていった。
全てに決着をつけるために。

第六場

第六場

「どうやら、さきほどの様子だと、ティターニアは私の存在に気がついていたらしい。」

「まったく嫌らしいやり方だ。私が見ているのを知っていて、それであんなやり方をして見せたのだ。どうしても私が表舞台に出て来なければならぬように。」

「校庭の片隅、真夏の鮮緑が青々とした光を降り注いでいる。気温もちょうどいい。そんな、一休みするのにちょうどいい木陰に、三人はいた。こんな事態だというのにのんびりと寝そべっておしゃべりをしている。」

「それが苛立たしくて、私はつい大声を上げてしまった。」

「この怠け者どもがっ！　なぜ自分の守人のそばにいないっ、望達が危ないというのに」

「ガバツ、とパツクが身を起こす。」

「続いてアルテムが、最後にキーノが目をこすりながら起きあがった。」

「オーベロン様っ？」

「お父様あ！」

「ふにゃ？　誰？」

「キーノだけはまだ目が覚めていないようだ。私は彼女の間近によつて、よく顔を見せてやる。」

「彼女はそれで、私と気づいたようだ。」

「あゝっ！　オーベロン様っ、え？　でも、なんで？　行方不明……それに……え？　どうしてえっ」

「まだ多少寝ぼけている。それに、望の性格が少し移ったような気がしてならない。これから先、望のようにつるさい妖精にならない」

ればいいが。

皆が騒ぐ。当然だ。今まで行方不明ということになっていたのだから。知っていたのは木下だけだ。全ての動向を私が見ていたということを知っているのは、彼だけなのだ。

「まあ待て」

とりあえず私は皆を鎮めた。このままでは指示もできない。

「知っていると思うが、私とティターニアは喧嘩中だ。そのせいで妖精全員に迷惑をかけた。もちろん、望たち人間にもな。しかし、私は妻から逃げていたのではない。ずっと見ていたのだ。私だけの手に負えないこの状況を救ってくれる皆の動向をな。全てが丸く収まりそうだったら、出てくるつもりだった。それまで、ティターニアを刺激しなくなかったのだ。あえば必ず喧嘩になる。それは立場を越えた夫婦の約束事というものだ。それに、あいつはボガードまで持ち出した。それはすでにただの夫婦喧嘩というには事が大きすぎる。だからこそ、木下にナイトの選別を頼み、ティターニアを追いつめてもらった。しかし、裏目に出たようだ。あいつは大人しくなるどころか、ますます助長する。今度は望たちに惚薬を仕掛けおった」

皆が目を大きく開く。最初に、パックが口を開いた。

「惚薬って……あの『浮気草』のこと？」

「そうだ。しかも、その強力なやつだ。とても私だけでは手に負えん」

私が苦渋を浮かべて下を向くと、その下からキーノが覗いてくる。「で、オーベロン様、私たちは何をすればいいんですか？ そのためにわざわざ出てこられたんでしょう？」

よく分かっている。まさにその通りだ。しかも、あまり時間はない。急がなければならないのだ。

「木下の所へ行き、あれの効果を消す薬を作ってもらえ。木下なら、症状をいえば分かってくれるはずだ。症状は、煙を吸ったら、思い人と同時に、目の前の人物を……男であれ女であれ……好きになっ

てしまうというものだ。パック、キーノ、術とスピードを駆使し、できるだけ早く頼む」

二人が元気よく返事した。

「へへ、地球ひとめぐりが、このパックにはたった四十分」

「私にかかればひとつ飛びよ」

言い終わる頃にはもう姿が見えなかった。音だけがそこに取り残されたようだ。お似合いの二人を思い、少しだけ苦笑が漏れた。その笑みを訝しげに見ながら、我が娘が問いかけてくる。

「お父様？」

「ん？ ああ、アルテム。お前にも苦勞をかけたな」

「いいえ、それは言わない約束ですよ、お父様　ふふ」

アルテムがそう言いながらコロコロと笑う。

「……お前、変わったな」

思わず笑っていた。かつては無愛想で冷酷だったこいつが、多少時代がかったものとはいえ冗談を言うとは。その仕草が嬉しくて、私は娘を抱きしめていた。

「お父様、苦しいですね。それに、そんな場合ではございませんでしょう？」

しかし、本質は変わりないらしい。少しは甘えてもらった方が嬉しいのだが。

気を取り直して、アルテムの肩をつかむ。正面から見据えて、話した。

「愛を呼びに行こう。望と遊が当面役に立たない以上、彼女に頑張ってもらわねばな」

アルテムは自信たっぷりに返す。

「もちろんです。だって、わたくしのナイトですもの。ナイトというものは、主人の……別にわたくしはマナさんの主人ではないのですけれど……とにかく契約者の……友達の……親友の……全てを守ってくれるものですわ」

何度も何度も、愛と自分の関係を言い直している。よほど彼女が

大事なのだ。言葉とは口から出てくるものだが、その行き着く先はこの胸の内だ。この世の始めに言葉があつたように、今でも言葉は全ての始まりである。それが例え、友達という他愛のない関係に對するものでも。

アルテムはすぐに空へ飛び出した。蝶の羽が優雅に広がっていく。私も、その鳩の雄々しい羽ばたきを、空に響かせた。

第七場その一

第七場

「あそこですわ」

アルテムが一つの扉を指しながら私の前に行く。廊下の一番奥に、クリーム色をした扉が見える。

そこからは、静かな話し声が聞こえていた。女性の声のようだ。当然だが、授業中なのだ。

私たちは、そのまま扉を開けずに中にはいる。私の魔法を使えば、そのくらいのは簡単だ。まあ、元々小さい体をしているのだから、そんなことをしなくても窓から入ればいいようなものだが、今はそんな暇がない。

前から二番目、窓際の席に愛がいた。

「このクラスに透視能力者はいないんだな」

娘に問いただと、黙ってうなずく。アルテムも気が急いているようだ。

しかし、この状況から愛を連れ出すのは難しい。そう思っていると、アルテムが愛の下に急いだ。

彼女はすぐに気がついて、アルテムの話に耳を傾けている。すると、突然立ち上がった。

「せんせいっ、ちょっとおトイレに行つて来ますっ！」

クスクスと笑い声が漏れる。あからさまに「まなあ、便秘なおつたのぉ？」などとからかうものまでいた。

愛は、あまりこのクラスに馴染めていないようだ。それを心配してか、アルテムが愛にすまなそうな顔をして謝る。が、彼女はそれを寂しい笑顔ではねのけた。

「いいんです。私、頑張りますからっ」

彼女も、この数日で変わっているのだろうか。また、これから変

わることができるのだろうか。

走って教室の入り口に立った彼女は、私の姿を認め、首を傾げる。
「おじさん……誰ですかあ？」

その、キョトンとした声に、またクラスから笑いが漏れた。今度はさすがに恥ずかしがって、慌てて廊下に出てくる。それに、私とアルテムもついていく。

「ついに幻覚でも見はじめたかあ？」

その声を、教師がなだめていた。

彼らの野卑を背後に、私たちは廊下を静かに急ぐ。

「あのお……」

愛が、遠慮がちに問いかけてくる。私はそれに答えず、代わりに娘が返答した。

「わたくしのお父様ですわ。マナさん」

愛は口を両手で覆って驚いていた。

「うそおつ、あの、行方不明のですかあ？」

なんと云えばいいのだろうか。私は返事に困った。それはアルテムも同じらしく、瞳を左右に泳がせたあと、愛の肩に乗り、そつと耳打ちした。

なんと言っているのだろうか。気になるところだ。そう思っていると、愛が大きな声で叫んだ。

「えーっ、ストーカーさんですかあ？」

「な、なんだとお！」

思わず私も声を漏らす。近隣の教室が騒がしくなった。のんびりとはしていられない。

「つかまれ、愛、アルテム」

そう言って、二人の腕を握りしめる。次の瞬間、視界が移り変わった。

美術室の前だ。

「あれ……？」

「マナさん、ここですわ」

アルテムが教室の上に掲げてあるプレートを指す。そこには『美術室』と書かれてあった。

「あ、そうかあ。でも、なんで？」

彼女は私の魔法に気がつかなかったのだ。その扉の先には、ティターニアがいる。

「愛、事情は分かっているだろう？ この扉の先には、ティターニアがいる。そして、望と遊はその術中にはまってしまった。いま戦えるのはお前だけなのだ」

彼女は神妙な顔でうなずいた。

「私は見ていた。お前達が私を救ってくれることを祈って。私が出てきても、あいつのことだ、反発こそすれ、決して大人しくはならないだろう。頑張ってくれ。これはもはや夫婦喧嘩の域を超えているのだ。あいつはボガードを使い、さらに灯を許可なく妖精界の住人にしようとしている。灯はそれを知っているはずなのだが、意地を張っているのか、人間の世界に戻る気はないらしい。ティターニアが倒されれば、きっとあいつも目が覚めるはずだ」

愛が唇を尖らせて、私を見る。不満がありありと顔に出ている。

「どうした？」

「妖精王さんは、奥さんがぶったおされちゃってもいいんですかあ？」

「仕方あるまい。私は調停者だ。森を、そしてこの町を守るのが私の役目なのだから」

愛はその説明を聞いても頬を膨らませるだけだった。

「ぶうつ、そんなの嫌ですう。みんないつしよに、お祭りしましよ？」

そのセリフを言った瞬間、愛の胸元に下げられているステッキから、光があふれ出した。光は星となり、愛の体を包む。その横では、アルテムがなにやら呪文を唱えていた。

「お父様も力をお貸しください。誰かが来ると、あまり宜しくないのでしょうか？」

結界を張る気だ。この教室だけを、妖精の世界に容れてしまおうということなのだ。

私も娘に倣って呪文を唱える。これならば、人間は入ってこれず、妖精だけが中にいることができる。

愛の姿が、星に隠れていく。

「妖精王さん、私は、誰かが仲間はずれなんて嫌ですっ。楽しいお遊び、いっしょにしましょ？　だって、寂しいのは、誰だって嫌いだから……私も、頑張るからっ」

次第に、星が薄れていった。彼女の姿がうつすらと見えてくる。あこがれ、なのだろう。

たった二日間のつきあいだが、元気で明るく、誰とでも親しくなれる彼女のことを、愛はあこがれの眼差しで見っていたのだ。

彼女は、花びらを模した虹色のミニスカートの下に、スパッツをはいている。上は、薄手の青い長袖のシャツに、さらにピンクの半袖シャツを重ね着していた。腰には大きなリボンのように、赤い布が巻き付けてある。頭には黄色いカチューシャはめている。いわずと知れた、オースナイトの服装だ。

「イノセントナイト、参上っ」

ポーズも同じく、片手を高く上に掲げている。そして、数秒そのままでいたあと、思い出したように首を傾げた。

「お姉さまがいったとおり、敵がいないと盛り上がりませんねえ」

私は、笑顔で彼女の頭をなでていた。妙に愛おしかった。たぶん、それが彼女の力なのだ。

「そう？　だったら、盛り上がるようにしてあげるわよ。いらっしやい、ナイトさん」

ドアの向こうから、楽しそうな声が聞こえる。クォーラルナイト、灯の声だ。待っているのだ、舞台に役者がそろってくるのを。

アルテムが、イノセントナイトの頭に座り込む。彼女は、そんなアルテムに話しかけていた。

「みてて、アルテムさん。私、頑張るからっ」

勢いよくナイトがドアを開ける。そこには酒池肉林の図が繰り広げられていた。

「カズくん」

「ようこちゃん」

甘い言葉を囁きあう二人は、机の上でお互いを抱き合っている。もちろん、服を着たままだ。

見れば、キーちゃんと思い人は手を取り合って語らっていた。女性教師は複数の男子児童を相手取り、その足下にかしずかせている。「おーっほっほ。いいこと、あなた達は私のものよ。だって私は先生なんだものつ。ほら、あなた達、もつと近くに寄りなさい、先生がいろんな事、教えてあげる……うふふ」

惚薬は様々な副作用を引き起こしているようだ。

肝心の望と遊は顔を真つ赤にしながら、お互いの長所を言い合っている。

「遊つてさ、よく気がつくよね、優しいし、近頃は頼りがいもあるし」

「望だって、元気いっぱいだし、いつもオレを励ましてくれるし、そういうとこ、好きだな」

そして、自分で言っておきながら照れているのだ。やがて二人の顔が近づき、そつとほつぺたにキスをする。小学生だけに、それ以上のことは禁忌となつていゝらしい。

イノセントナイトは、そんな風景達を見ていた。顔を覆った手の隙間から。頬が梅の花のように染まっている。気分も上気していて、なんだか足下が怪しい。子供にはまだまだきつい出し物だったかも知れない。

そんなイノセントナイトを、ティターニアが笑った。

「あらあら、お子様には早すぎたかしら。それにしても、よくのこのこ出てこられたわね。よわっちいくせに」

とても我が妻の吐く言葉とは思えない。誰に習ったのだ。やはり、灯だろつ。

そのクォーラルナイトは、これもやはりかしずかれていた。

しかし、相手は人間ではない。

ボガード達に、だ。

「あれ？ 一人？ 張り合いないなあ。せつかくこんなにおもちやを用意してあげただけだな」

そのクォーラルナイトのセリフで、ボガード達が一斉に振り向く。イノセントナイトが顔を蒼白にして一歩後じさった。

唾を飲み込む音が聞こえる。そして、辺りをキョロキョロと見回しだした。

心配してみていたアルテムだが、ナイトといっしょに辺りを見回して、ホッと一息つき、それからニヤリと笑う。深い青色をした髪を撫でつけ、彼女の頭から飛び立った。

私の下に向かってくる途中、クォーラルナイトの方を振り向く。

「ベーツだ」

舌を出して、それから慌てて私のところにやってきた。やはり、影響されている。望や愛、そして遊に。

彼女のナイトが、そんなアルテムの様子を見て笑い出した。

「あはは、アルテムさん、変なかあ〜」

彼女の余裕が不思議だったのか、クォーラルナイトが話しかけてくる。

「あんた、怖くないの？ こんなにたくさんのボガードに囲まれて」
純真の騎士は笑顔を潜め、口の端をつり上げるだけで余裕の笑みを作って見せた。胸に下がったステッキを取り、片手でクルクルと回す。

「怖くなんかないもん。私、強いからっ」

そう言いながら、ステッキを上に戻り投げる。それは弧を描いて再び彼女の手元に戻った。

反対に、敵は頬を膨らませて悔しがった。ナイトの反応が気に入らなかったみたいだ。

「あらそう、じゃ、こいつらの餌食になってしまいなさいっ。いけ

っ、ゴブリン」

ボガード達のうち、イノセントナイトの胸元くらいまでしか背丈のない、醜悪な顔をしたものが前に出てくる。陽の光が眩しいのか、額に手をかざしながら歩いてくる。

「マナさん、あの方、大きな音や音楽に弱いですわよ」

すぐさまアルテムが弱点を言い放つ。さすがに妖精王の娘だけあって、妖精のことをよく知っている。

それを聞いて、イノセントナイトがステッキを振りかざす。

「ふーん、んじゃ、こういうのはどうかなあ」

イノセントナイトが教室のある一角をさしてステッキからの光を跳ばす。そう、ここは美術室だ。無機質の物体なら腐るほどある。そして、彼女が指したのはラッパの粘土細工だった。

「ラッパさーん、おつきしましょ？」

ラッパに、ステッキからの光が当たる。それは星となってラッパを包む。そして、その星の中から声が聞こえる。

「さーて、わいの歌声、聞かせたるかいなあ」

この喋り方だけでも、これがイノセントナイトの魔法によるものと分かる。星の固まりから飛び出したラッパには、手足がついていた。まるで、初めて望たちと出会ったときに、パックが化けたキノコの化け物のようだ。

その異様な姿に、ゴブリンもクォーラルナイトも、ティターニアでさえも気持ち悪がっている。ゴブリンはその醜悪な顔をさらに歪めて、クォーラルナイトの顔色をうかがった。子供のようなその表情に、純真の騎士が思わず笑みをこぼす。

「行きなさい」

しかし、主人の返答は冷たく、厳しいものだった。それと同時に、ラッパがイノセントナイトの前に立つ。彼女を守っているつもりなのだ。

ゴブリンが振り向いた。その表情には多少の自棄が入っている。なりふり構わずつっこんできた彼に対し、ラッパはできる限りの大

きな声で歌った。

「とてちてたーっ！」

ビクッ、とゴブリンが怯える。急に耳を押さえて怖がりだした。

「とてちてたーっ」

妙にさわやかな音色で、彼は声を発する。実際、それは楽器が鳴らす音というよりも、人が歌っているような音声だった。

たまらず、ゴブリンは主人の下へ帰っていった。今度は彼女も叱咤することなく、ただ溜息をつくばかりだった。

「ふう、しょうがないわねえ。このまんまじゃ、らちがあかないじゃない。お前達、全員でかかっていったら？」

なるほど、一理ある。正々堂々と戦う必要はないのだ。こちらだって、昨日は三人がかりで戦ったのだから。それが彼女のいう『言葉のない正義は、悪と同じ』ということなのだろう。

様々なボガードが入り乱れてイノセントナイトにかかっていく。

彼女は何度もステッキを振り、ボガード達を蹴散らしていった。

私に加勢しないように、ティターニアが睨んでいる。おそらく本気だ。私が飛び出した瞬間、魔法でイノセントナイトかアルテムのどつちかがやられる。ティターニアは人を殺さないのだと信じてはいるが、それも不意の事故ではどうしようもない。それに、何もしなくても、私が加勢した時点で彼女は負けを認めようとはしなくなる。あいつはそういう女だ。

いまや、美術室内は粘土細工の騒音でいっぱいだった。それにしても不思議なのは一般児童達だ。これだけの騒動が起こっているのに、いっこうに気にしようとはしない。ボガードは妖精なので見えないだろうが、ナイトの魔法で生命を得た粘土細工くらいは見えているはずだ。それもこれも、『恋は盲目』という言葉によっているのだろうか。

しかし、イノセントナイト一人で相手するには、人数があまりに多すぎた。あと一人を残して、彼女は力つきてしまう。

「きやあああっ」

床に倒れ伏して、泣き顔を見せた。あの泣き虫の愛が、ここまで泣き顔を見せなかったのだ。

倒れた彼女は、それでも何事かを呟きながら必死に立ち上がろうとしていた。

「……まけないもん。お姉さま達に、のぞみさん達に認めてもらうんだもん。マナも仲間だつて、私も仲間だつて認めてもらうんだもんっ！」

イノセントナイトがステッキを振った。

他の誰でもない、自分に向かって。

自分を誇示するかのように、ことさら飾り立てる。その光はナイトの手元に集まって、やがて剣の形を成した。ブレイブナイトの剣に似ている。

「お兄さまみたくにはできないけど……えーいつ」

思い切り振りかぶったそれは、しかしやはり何の守護も受けていないただの剣だった。ブレイブナイトの剣は、妖精たちの加護を受けて、初めて威力を発揮する。それがなければ、ただの剣だ。彼女の剣撃は唯一残った妖精ドラゴンに向けて振り下ろされる。

しかし、あっさりと妖精ドラゴンに剣を受け止められて、イノセントナイトは逆に弾き飛ばされた。

翼を大きく広げて威嚇する妖精ドラゴンは、血に飢えた猛獣のように見える。首に首輪がなければ、もっと怖かっただろう。

「いたあ、うえーん、だめだよぉ」

ついに泣き言を言い出した。しかし、それでも彼女は立ち上がり、剣を振りかざしていく。

「でも、私は、強くないとダメなの」

妖精ドラゴンは彼女の剣撃などものともせず、余裕の表情で受け止めている。

「だって、いつまでも泣き虫のまんまじゃ、誰も相手してくれないもの」

不意に、妖精ドラゴンが剣をつかんだ。刃の部分をつかんでいる

というのに、皮膚には一筋の傷も付かない。

「きゃんっ、たたた……ひとりぼっちでも、私にはぬいぐるみがい
てくれると思ってた……でも、もういやあ、お姉さまと出会ったか
ら、お兄さまと出会ったから……なにより、アルテムさんと一緒に
暮らしたからあっ！」

ステッキから、一筋の光が漏れた。それが剣にからみつく。刃が
ドラゴンの体に触れると、その光がドラゴンに宿った。光は体中を
駆けめぐり、そして、幻獣を圧縮するように縮ませていく。

わずか数秒の後には、妖精ドラゴンの姿など、欠片もなかった。

「へ？」

イノセントナイト自身が驚いていた。

「へえ、結構やるわね」

クォーラルナイトが目を丸くしながらその光景を見ている。しか
し、驚いているのは妖精ドラゴンがやられたことではなく、ナイト
の頑張りに、だった。

「しょーがないっ。お姉さんが相手してあげましょうか」

クォーラルナイトが、杖を手にした。

乗っていた机から、静かに浮かび上がる。杖が浮いているのだ。

そして、彼女はイノセントナイトの前に降り立った。

「倒れて」

感情のない声で、敵がボソリと呟いた。瞬きした間に、ナイトが
倒れている。

「え……？」

彼女に自身にも、何が起こったか分かっていないようだ。

「なによあれ……反則ですわ」

アルテムが怒りを露わにする。純真の騎士が、半信半疑ながらも
立ち上がった。

「いま……私……」

「転んで」

両手を眺めて呆然としているうちに、もう一度クォーラルナイト

が呟く。

すると、イノセントナイトが転んだ。

「うそ……こんな……」

力の差がありすぎる。ティターニアのナイトである灯には、アルテムから力をもたらっている愛とは天と地ほど、実力に差がある。

いくら妖精の魔法が本人の夢や願いを叶える力だといっても、その根本的な容量が違うのだ。ティターニアとアルテムの願いを叶える量、つまり魔法の量は、倍以上も違っていた。

「起きないで」

また、クォーラルナイトがボソリと呟く。その途端に、イノセントナイトは床に這いつくばった格好のまま動けなくなってしまった。声を出せないくらい、体中が痛いわ」

純真の騎士がその大きな瞳を極限まで開く。頭を床にこすりつけ、口を開いている。声にならない声を上げているのだ。

「マナさん……？」

アルテムが心配そうにして近づいていく。彼女のナイトは涙で顔をぐしゃぐしゃにしていた。

「……」

そして、クォーラルナイトがまた口を開こうとしている。その時、いままで何もできないでいたアルテムが羽根を激しくばたつかせ、敵に向かっていった。

「よくもマナさんをつ！」

しかし、アルテムは何の力も持っていない。まだまだ子供なのだから。予想通り、クォーラルナイトに軽くはねのけられる。私はそれを見て飛び出そうとしたが、ティターニアに牽制されていてどうにも動けない。

忸怩たる思いでここにいると、我が妻が含み笑いをたたえて提案してくる。

「どう？ 私のオーベロン様。もしもあなたの傘下であるナイト達が私の灯に勝てたら、全て水に流して元のさやに収まりましょう。」

その時は罰でも何でも受けてあげますわ」

余裕の表情だ。絶対に負けないと信じている。せめて全員がそろえば、勝ち目もあるだろうが、肝心の望と遊がああいった状態では、どうしようもない。

いったい、何をやっているのだ。ロビングットフェローは。

何度目だろうか。再びアルテムは敵に向かっていく。

「また？ もういい加減にしたら？ あなたを守るためにいるナイトでさえも勝てなかったんだから、あなたがあたしに勝てるわけないじゃない」

そういいながら、アルテムの羽根を指でつかみ、顔の位置までもつてくる。王女は手足をじたばたさせながらも、気丈に苦言を吐いた。

「べーっだ。あなたなんかに負けるものですか。キーノお姉さま達さえ来てくれれば……あなたなんて……あなたなんてえっ！」

突然、クォーラルナイトの顔面が爆発した。音と煙が、そこにある事態を隠している。ティターニアが思わず叫んでいた。

「あかりっ、大丈夫っ？」

煙の中で、彼女は咳き込みながらも返事をする。

「けほ……んー、大丈夫……ちよつと驚いただけ」

命に別状はないようだ。どうやら、アルテムの感情が暴走した結果らしい。

それにしても、ティターニアは我が子がひどい目にあっていると、いうのに向に気にする様子がない。まったく、それでも母親だろうか。だが、妖精は皆、樹木から生まれてくる。アルテムが私たちの子供であるのは、単に彼女がそういう運命を背負っていたからにすぎない。だからだろうか。ティターニアが人間の子供にあこがれるのは。母親がおなかを痛めて産んだ子、それに憧れているのだ。

「よかった。あなたにもしものことがあつたら……申し訳ないわ」
アルテムは床に投げ出されていた。悔しさで、涙を流している。

しかし、その瞳は毅然とクォーラルナイトを睨んでいた。もしかし

たら、アルテムは母親を奪った灯を憎んでいるのではないだろうか。そんな気がする。

そして、悔し涙を流すアルテムに向けて、声が聞こえた。

「よお、姫さん。頑張ってるじゃねえか。似合わないことすんなよ。あとは、おいら達に任せときな」

声がした方を向く。そこには、窓枠に腰掛けた二人の妖精の姿が見えた。

「パツクツ！ それに、キーノお姉様も……」

急に顔を上げて、アルテムは安心したのか目眩がしたように倒れていた。それを、目にも留まらぬ速さで飛んできたパツクが受け止める。その表情はいつもの彼とは違う、全くの真剣なものだった。ティターニアが舌打ちし、クォーラルナイトが顔をほころばせた。そして、私はその間にイノセントナイトの下に駆け寄る。

「よく頑張ったな」

クォーラルナイトの魔法を解除する。イノセントナイトは、泣きながらうなずき、体が動くことを確かめるとすぐにアルテムのところに駆けていった。

「アルテムさん、大丈夫ですか……？」

再び泣きそうになる。そんな彼女に、アルテムは幼子をあやすようにして笑いかける。

「もちろんですわ。さ、やっと全員そろいましたわね。行きましよう、マナさん。とりあえずあそこでイチヤイチヤしているバカッブルの目を覚ましてあげませんと」

愛以外には、手厳しい。

イノセントナイトが敵の方を注視しながら窓際に急ぐ。アルテムは彼女の肩に乗っている。愛が元気になったのが嬉しいのだろう。やけにニコニコとしている。

二人が来るのを見て、パツクとキーノが近づいてきた。

「さあて、このバカッブルを起こさないとな。見るよ、この幸せそうな顔、おいら達のことなんか、全然目に入っていないぜ。いつもは

偉そうにしているくせに、所詮こんなもんさ、人間なんて」

「あら、そんなことないわよ。とっても素敵なことだと思わない？」

「何が素敵だよ。おいらにや分からね」

パックにロマンという言葉は似合わない。何事かを期待していた様子のキーノは、あからさまに肩を落とす。

「さあ、そんなことより、早く出せよ。フェアリードクター特製の薬を」

そういわれて、キーノも気を取り直す。皆にどくように言って、自分の周りに何枚かの花びらを撒いた。真っ白な中にも仄かに紅が差している。

「妖精王の名において命じ、そして契約す。我、汝の心に日常と常識の殻を渡す。願わくば、それが恒久に続くようにと」

花びらが燃え上がった。

炎は渦を巻くようにしてキーノを包んでいく。イノセントナイトが慌てて飛び出しかけるが、アルテムがそれを止める。

炎はやがて膨れあがり、そしてある瞬間、あっという間に消えてしまった。代わりに、大量の煙が沸き上がる。

「きゃっ」

小さなナイトが驚いて叫ぶ。煙は不透明で、無味無臭だ。それは、教室全体を覆うようにして広がっていった。

「いま、戦士の覚醒を促す」

キーノが締めくくりの声を上げる。

第七場その二

出てきたときと同じく、煙が収縮していく。

「けほけほ…… ったく、なんだよ、これ」

「けむたあい」

「きやあつ、何であんたと抱き合ってるのよ」

「いやだあああああつ」

様々な叫びと怒号が聞こえる。どうやら、ティターニアの魔法は解かれたようだ。

「ははは、一遍にやらない方がよかったかも……」

パックが顔を引きつらせながら笑っている。

「ごめんなさい……」

キーノは顔を真っ赤にしながらか下を向いてしまった。

そして、皆の注目は望と遊に向く。

二人は抱き合ったまま、固まっていた。表情も、啞然としたままだ。どうも、魔法が解けた瞬間に事態を理解したらしい。遊はともかく、望にしては判断の早いことだ。

「……見てた？」

望が口だけを動かしながら問いかける。隣で遊がこくこくとうなずいている。別に彼に向かって訊いたわけではないのに。

「……見てたっ？」

またも遊がこくこくとうなずく。その他、周りのものは誰も返事ができない。気の毒だと分かっているからだ。そうさせたティターニア達でさえ顔を背けているような状態なのだから。

「ねええ、見てたあ？」

瞳を潤ませながら望が叫ぶ。

遊がこくこくとうなずく。

その後に、イノセントナイトが一回だけ、こくりとうなずいた。望が叫んだままで固まった。

「アンテ」

ポソツと呟く。

どこから出したのか、羽根ペンとはんこが同時に大きくなった。

「お姉さま？」

イノセントナイトが不審気に話しかける。

望は黙々と変身の動作を続けていた。

「妖精王の名において、我、汝と契約す」

契約書が紙吹雪となり、望を包んだ。そして、声がする。

「子供の前でラブシーンは禁物、これはみんなのお約束。約束破つたら、ハリセンボンだぞ」

半ば自虐的な決めゼリフをはいて、オースナイトが現れた。

イノセントナイトと並ぶと、姉妹がそこにいるようだ。

「契約の戦士、オースナイト参上っ！」

右手を天井に向けて掲げる独特のポーズを取る。その横で、今度は剣が巨大化した。

「妖精王の名において、我、汝に命ず……精霊よ、集えっ」

四色の帯が遊を包んでいく。そして、声。

「イノセントナイト、一人で頑張ってたんだな。そんなちっちゃな勇氣、応援してるぜ」

光の帯は薄れていき、中から衣装に身を包んだ遊が現れる。

「勇氣の騎士、ブレイブナイト参上っ」

剣を斜めに構えて、ポーズを取った。

いつもよりも幾分速いペースに、誰もついていけない。

「オースナイト、あいつら、ぶっ倒してやるっ」

「そうだよ、もう、許せないんだからっ」

どうやら、彼らは変身することで恥ずかしさから逃れようとしていたみたいだ。変身すると気が大きくなることを、本能で悟っていたのだらう。ついでに、ティーターニア達への個人的な怒りも混じっている。気のせいかいつもより魔法の力が強いような感じを受ける。それは、イノセントナイトも同じだ。つまりは魔法の力の源であ

る願いや想いが強くなるほど、彼らの能力も上がっていくのだ。なぜなら、妖精が授ける力は、願いを叶える力に他ならないから。

二人で盛り上がっていると、周りが妙に騒がしくなっていた。「のぞみい、どうしたの、その格好？」

キーちゃんが代表で叫ぶ。そうなのだ。ここには、何の事情も知らない一般の人々がいたのだ。それに気付いて、二人のナイトが「しまった」と顔を見合わせる。そして、問いかけるように周りを見て、私に気がついた。

「あれ？ おじさん、誰？」

それに対して、私は威厳をもって答えた。

「妖精王、オーベロンだ。詳しい事情は後で話そう。とりあえず、祭りの時間まであと幾ばくもない。灯とティーターニアを倒してしまえ」

二人は、自分たちが正気を失っている間に起こった状況の変化に戸惑っているようだ。しかし、そうやっていちいち驚いている暇はないと判断したらしく、行動を開始する。

「キーノ、おいで」

「パツク、行くぞ。イノセントナイト、アルテム、来いっ」

ナイト二人が皆を誘う。そして、最後にオースナイトが姉を挑発した。

「お姉ちゃん……ううん、クォーラルナイトツ、それにラスボスの女王様っ、許さないんだからねっ、あたし達と戦う気があるんなら、ここまでおいでっ、ベーツだ」

舌を出して罵る。その後で、思い切り窓から飛び降りた。

「のぞみっ」

キーちゃんが叫び、慌てて窓に駆け寄る。それはクラスの皆、同様だった。

そんな彼女らに向けて、ブレイブナイトが言い放った。

「大丈夫だよ。オレ達はナイトなんだからな」

ブレイブナイトが、イノセントナイトが続いて飛び降りる。彼ら

は転ぶこともなく着地した。

オースナイト、ブレイブナイト、イノセントナイトが順に着地し、その肩にはそれぞれ妖精たちが乗っている。並んだ三人は、お互いに顔を見合わせ、意志を確かめ合っている。もはやクォーラルナイトに対する遠慮など微塵もみられない。やる気十分だ。

私もすぐに下におり、その後を追うようにして、クォーラルナイトとティターニアが飛び降りてきた。

「やる気？」

姉が、妹に訊いてくる。

「もちろんっ」

そういいながら、オースナイトが飛び出した。同時に、呪文を唱える。おかしい、何ももっていないはずなのに。

「妖精王の名において、我、汝と契約す……羽根ペンツ」

右手にもっていた羽根ペンが、オースナイトと合体する。彼女の右手の平が、大きなペンのように尖った。

「いっくよお」

ナイトが右手を突き出して叫ぶ。その指先から幾筋かのインクが飛んでいった。

「え？ きゃあっ」

思わずクォーラルナイトが黄色い声を上げる。まともにインクを顔に受けて、驚いたのだ。その後ろからイノセントナイトと美術室の粘土細工達が走ってくる。

「お姉さま、この人達が、いっしょに戦わせてくれってえ」

イノセントナイトの魔法で命を与えられた彼らは、もはや粘土細工ではない。オースナイトの魔法で、十分に本来の力を発揮できるのだ。

「そや、わいら、美術室をむちゃくちゃにしたあいづらがゆるせんのや」

ラッパがプープーいいながら怒っている。

「よおっしっ、んじゃ、いっくよお」

粘土細工の中から、車を選ぶ。

「妖精王の名において、我、汝と契約す……車っ」

途端に、オースナイトの足が速くなった。つまり、車の機動力を身につけたのだ。

「くそお、こんなもの、消えちゃえ」

その頃、ようやく敵は魔法で顔面に付着したインクを消した。しかし、その眼前には猛スピードで迫ってくるオースナイトがいる。

「いやああああ」

何もできずに、姉妹はぶつかつた。しかし、衝撃は遙かにクォーラルナイトの方が大きかつたはずだ。なぜなら、オースナイトは車と合体している。その体は鉄のように固いからだ。

案の定、クォーラルナイトは五メートルほど吹き飛ばされる。ナイトに変身していて、通常よりも肉体能力が上がっているからいいようなものの、そうでなければ、死んでもおかしくない。

飛ばされた敵を見て、オースナイトは満足したようにVサインを決める。

「へっへーんっだ。おもいしつたかあ、昨日の津波のお返しだよ」

しかし、あれは半分はブレイブナイトのせいだったはずだ。そう思ったがいうのはやめた。この事件が終わったあと、彼の安否が気遣われるからだ。

意気揚々と笑っているオースナイト、地面に倒れ伏すクォーラルナイト、ヤンヤと囃し立てるイノセントナイト、そして、ブレイブナイトはその隙に精霊を呼んでいた。

「妖精王の名において、我、汝に命ず……エアリアル」

黒い帯が抜け落ち、空中に舞って人の形を取る。それは薄く笑って剣の中に消えていった。それと同時に、剣が音を立てる。

蒸気が噴き出すような、厳かな音色だ。

「いづくぜえ」

ようやく立ち上がりかけたクォーラルナイトに向かって、彼が突進する。途中、剣を後ろに向けると、何事か叫んだ。

「エアリアル、たのんだぜっ」

すると、剣からものすごい勢いで空気が噴射された。その勢いに乗って、ブレイブナイトが加速する。まるで滑るように地面を走っている。

「イタタ……あいつ、手加減もなしで……」

愚痴をこぼしながら起きあがったクォーラルナイトは、その目で彼を捉えた。

「……っつ！　こんどはなにいつ？」

猛然とっつこんでくる彼に、慌てて魔法を使う。

「土よっ」

それに応えて、クォーラルナイトの前の地面が盛り上がった。

「ふんっ、ちよろいぜ」

剣の噴射をやめ、ブレイブナイトは剣を構える。目前に迫った土の壁に、そのままの勢いで突きを繰り出した。

壁に剣が突き刺さった。そこでナイトは動きを止める。

「エアリアルッ」

彼が叫ぶと、壁から蒸気が漏れだしていた。一瞬の後、土壁が破裂するように壊れていく。

「はあっ」

続けて、ナイトは精霊を呼ぶ。

「妖精王の名において、我、汝に命ず……ノームッ」

黄色の帯が小人を象り、剣に入っていく。それと交代に、黒い帯が柄に戻った。

「土塊を返してやれっ」

剣に向かって叫ぶと、ブレイブナイトはめちやくちやに剣を振り回す。それに伴って、剣に土がくつき始めた。やがて巨大な塊になったそれを、クォーラルナイトめがけて投げつける。

「なんでえっ？」

自分の魔法がまったく効かないことに対し、彼女が大声で疑問を発する。それは答えられることなく、土の塊に彼女は押しつぶされ

てしまった。

「勝った……」

殺してどうする……。そう思ったが、ティターニアのナイトがこれくらいで死ぬはずがない。

そんな風に敵を痛めつける二人に向けて、歓声を送られる。

「ゆうつ、のぞみい、かつこいいぞおつ」

「がんばれえつ」

学友達だ。事態の理解は後回しにして、とりあえず望たちの応援をすることにしたらしい。

オースナイトが彼らに向かって手を振り、ブレイブナイトが口の端をつり上げて微笑む。

「あたしの活躍、見てくれたんだあ」

のんきなものだ。私は、彼らが浮かれている間に、クォーラルナイトが土塊から脱出するのを見ていた。

それに気付いたキーノが叫ぶ。

「望ちゃん、危ないっ」

いうが早いか、彼女に向けて土塊が飛んでくる。鋼鉄の体を持っているオースナイトは、それを片手で受け止めた。

「あいたたた………よくもやってくれたわねえ。妹だと思って手加減してれば……いい気になりやがってえ」

怒りが頂点に達した。クォーラルナイトの背景が揺らいでいる。

「どうやって……いじめてやろうかしら」

瞳を光らせる。

「そうですよ、灯、やっておしまいなさい」

ティターニアがクォーラルナイトを煽る。彼女はうなずいて、言葉紡ぎだした。

「言葉のない正義は悪と同じ。あんた達、あたしの話も聞かないで一方的に攻撃してくるなんて、そりゃ、反則じゃない？」

オースナイトが少し戸惑う。吹っ切れたといっても、やはり少しは抵抗があるのだらう。彼女の言葉に動揺している。

「で、でも、最初に変なことしたのはお姉ちゃんじゃないっ、あたし達に魔法かけて……」

遊と抱き合っていたのを思い出したのか、オースナイトの頬が赤く染まる。ブレイブナイトも同じだ。

それに対し、敵は反論した。

「ばっかね、いい夢見られたでしょ？ 悪い気はしなかったはずよ、おませさん」

ナイトが、ますます頬を赤くした。

「それにね、あんなことしたのは訳があるんだから。それを確かめもしないでいきなり攻撃するんじゃ、悪人と同じだよ」

その言葉はナイト達の耳にいたく響いたようだ。急に沈んだ表情になる。

しかし、それを払拭するようにイノセントナイトがいった。

「でもでもお、皆さんに迷惑をかけたことは間違いないんですからあ。どちらもおあいこということじゃ……ダメでしょうか？」

とぼけた調子で提案する。

「ぶっ、ははは、あんた、面白いこというね。確かにそうかもね。んじゃ、おあいこということで、決着つけようか」

そう言った後、クォーラルナイトが杖を取り出した。あれだけの攻撃を食らっておいて、傷一つついてない。いよいよ、本領発揮、というところだろう。

「鏡よっ」

そう叫ぶと、杖から小さな手鏡が現れた。それが敵のナイトの正面にやってきて、彼女の顔を映す。

「アンテツ」

巨大化の呪文を叫び、手鏡を大きくする。鏡は彼女の全身を映している。

「カフレスティス」

聞いたことのない呪文を唱えると、巨大な手鏡からクォーラルナイトの姿をしたものが歩み出てきた。

「え？」

今度は丸太などではない。本物の灯だ。

オースナイトが上げた疑問の声に、クォーラルナイトが答える。

「ふふん、忍法分身の術、ってとこかな。どう？ 見分けがつかないでしょ？」

鏡から出てきたクォーラルナイトは、その通り、まったく見分けがつかなかった。真つ黒な服装も、杖も、何から何までそっくりだ。鏡から出てきた方が、ブレイブナイトに向かって突進する。そして、元からいた方がオースナイトに。

二人は戸惑いながらも身構えた。イノセントナイトが叫ぶ。

「お姉さま、私もっ」

一人だけ何もできないのが辛いのだ。

「マナちゃん、じゃあ、キーノ達にね……」

そう言つて、なにやら耳打ちする。その間にも、敵は向かつてきていた。

「はいっ、分かりました」

純真の騎士は、オースナイトの提案に納得するとキーノ達を呼んだ。

「キーノさん、パックさん、アルテムさん、私に力を貸してください」

「え……でも……」

呼びかけに、しかしキーノは躊躇した。ナイト達が心配だったからだ。

そんな様子のキーノに、イノセントナイトがこっそりと話しかける。そこに、全員が集まっていた。

「えーいっ」

折しも、向こうではオースナイトが羽根ペンで敵と交戦している。ブレイブナイトの方も、始めたようだ。

こちらでは凄絶な剣と剣の果たし合いが行われていた。

「やるな」

サラマンダーを喚び、炎をまとった剣で灯に対するブレイブナイト。一方、クォーラルナイトは杖の一部を刃と化して戦っていた。その内に、妖精とナイトとの話し合いが終わる。

「うん、それならいいよ」

「よし、じゃあ、急ごうぜ。姫さん、後は頼んだぞ」

「姫さんという言い方は好きではないといったでしょう？ 頼まれではあげますけどね。他ならぬ、マナさんの頼みですもの」

イノセントナイトとパックが急いでこの場から離れていく。アルテムは上空に飛び上がり、なにやら呪文を唱えた。キーノはその場で地面に円形を書く。

その仕草に、二人のクォーラルナイトが気付いた。

『なにやってんのよっ』

キーノに向かっていこうとする。

「させないっ」

オースナイトが羽根ペンを投げつける。姉はそれを簡単にはねのけると、止まらずに走り出した。

ブレイブナイトと戦っていた方も駆け出すが、こっちは彼に阻まれる。

「おっと、どこ行くんだよ、姉ちゃん」

炎が剣先から飛びだし、クォーラルナイトを包む。

「くっ」

燃え上がっている彼女が、腕を一振りした。その動作だけで炎が沈静化する。代わりに、今度はブレイブナイトの体が燃え出す。

「うわっ」

彼女は魔法で火を消したのではなく、相手に返したのだ。ブレイブナイトは慌ててウンディーネを喚んだ。

「妖精王の名において、我、汝に命ず……ウンディーネ」

白い帯が宙に浮かび、水で構成された人間を形作る。彼女が遊を抱いた。それにつれて炎が消えていく。水の精霊であるウンディーネにとって、この位の炎はマッチの火と同じだ。

「妖精王の名において、我、汝と契約す……飛行機っ」

一方、姉に逃げられたオースナイトは、急いで契約を済ませた。もちろん粘土細工と、だ。すでに車との契約は切れているようで、その力を使おうとはしない。

「まてーえ！」

地面を蹴り、オースナイトが低空飛行で敵を追う。さすがに人間の足と飛行機では比べものにならない。あっという間に追いついた。「もう一つ契約っ……ねんどっ」

たった一つ、まだできあがっていない粘土をさして、オースナイトが契約を申し出る。それは快く受け入れられた。

クォーラルナイトが後ろから来ているオースナイトに気付いた。杖に乘ろうとするが、もう間に合わないと思ったのか、やめて振り返る。

「しょうがないわね、それでも食らってなさいっ」

彼女の手から針が飛び出した。しかし、今度も鋼鉄と化しているオースナイトには通用しない。

「しまっ」

叫び終わる前に妹が能力を発揮する。

「やああああ」

腕を突き出すと、まるでゴムのようにのびていく。しかも先端が……つまり手の平が粘土状に……とりもちみたいになっている。

それは逃げる間もなくクォーラルナイトを捉え、身動きできない状態にしてしまう。

「くっ……とれないっ」

二人は膠着状態に入ってしまった。

「うおおおおっ」

ブレイブナイトが轟き叫んで剣を振りかざす。大上段から振り下るされた剣が、クォーラルナイトの額を狙っている。しかし、それはあっさりと杖で受け止められた。

「……くそっ」

悪態をつく。いくら力を入れても、そこから動けないのだ。それだけ、敵の力が大きいということだ。

「この程度じゃ、あたしには勝てないよ」

そう言つて、彼女が杖を跳ね上げた。ブレイブナイトはその勢いに弾き飛ばされる。

「わあっ」

尻餅をついた彼が、しきりに尻をさする。その内に、敵がブレイブナイトの首に杖を突きつけた。

「あたしの勝ちだね」

返事もできないでいる。

彼と戦っていたクォーラルナイトが、オースナイトに向かって叫んだ。

「のぞみつ、遊君を殺されたくなければ、あたしを放しな」

その光景を見ていたオースナイトは、迷いながらキーノの方を見た。すでに魔法陣はできあがっていて、キーノはしきりに上を見上げている。そこには、アルテムがいた。

「キーノお……」

キーノが、オースナイトの情けない声に振り向いた。

「オースナイト……いいよ、放して」

もう一度、空を見上げる。そして、呟いた。

「もう、喚べるから」

それを聞いた瞬間、ブレイブナイトに杖を突きつけていたクォーラルナイトが駆け出す。が、間に合わない。

「悪戯者と我らがナイト、そして、敵の愛するものを」

唱えた言葉に反応して、魔法陣が光る。緑の光が、柱のように天まで伸びた。

「しまったっ」

クォーラルナイトにも予感があったらしい。この場合、喚ぶとしたらたった一人しかない。

光が薄れ、中から三つのシルエットが浮かび上がってくる。

パックとイノセントナイト、それに、勝だ。

「兄ちゃんっ」

ブレイブナイトが叫ぶ。

走っていたクォーラルナイトが、立ち止まった。

「まさる……」

そう呟いた彼女の前に手鏡が現れる。それは、まるで彼女に何かを促しているようだった。

「カフレステイス」

そう唱えると、粘土に捕まっていた方が一瞬にして消える。それと同じくして、クォーラルナイトが元の姿に戻った。制服を着て、髪をポニーテールにした灯だ。

「あっ」

消えた灯に驚いて、オースナイトが声を漏らした。

しかし、すぐに気を取り直して、全ての契約を破棄する。もう、魔法は必要ないのだ。

私には分かった。望がやりたかったことが。

「灯……」

勝が灯の方に歩みを寄せる。ツンツン頭の、遊にそっくりな兄だ。学生服姿だということは、まだ授業中だったのだろう。

「まさる……あたし……」

急に灯がしおらしくなる。さすがに恋人にはこういうことは知られたくなかったらしい。

そんな灯に向けて、勝が言った。

「ばーか、なにやってんだ。さっさと帰ってこい」

つられるようにして灯がうなずく。それを見たティターニアが、観念したようにうなだれた。

「怒らないの？」

灯が、信じられない、とでもいうように勝に問いかける。勝は、灯の正面にやってきてその頭をなでた。

「お前には、お前の考えがあるんだろ？ 俺は、お前のこと、そん

なにバカだとは思ってないからな」

さつき『バカ』といっておいて、もう手の平を返している。さすがに遊の兄だけのことはある。

「お姉さまあ、どうでした？」

愛が望の下に駆け寄ってくる。こちらも、変身を解いていた。望はそんな愛らしい愛に、笑いかけている。

「ありがとう、マナちゃんのお陰で助かったよあ」

望が愛に耳打ちしていたことは、おそらくこうだ。灯は、勝の言うことなら聞くだろう。だから、勝を知っているパックについていつてもらい、彼を連れてきてもらったのだ。時間短縮のために、アルテムが魔法で彼らの気配を読み、キーノに知らせ、キーノは魔法陣で愛とパック、そして勝を召喚する。問題は勝がその話を信用するかどうかだが、魔法の一つも見せてやれば、十分だっただろう。

始めから勝を連れていたのでは、灯は出てこなかった。だからこそ、キーノが召喚していると知ったとき、クォーラルナイトはあんなに慌てたのだ。

「だって、しょうがないじゃない。ティターニアに頼まれたんだもん。夫の気をひくために、一芝居打ってくれて……ま、ちよつと派手にやりすぎたかなあ、とは思ったけどね」

灯があっけらかんと告白する。

「あかりっ、それは言わない約束では」

ティターニアが顔を赤くして抗議する。なるほど、そういうことだったか。

私は、静かにティターニアの方へ歩んでいった。そつと手を振って、魔法を使う。小さな風の渦が私とティターニアを巻き込んでいく。それが消えた頃には、二人とも人間並みの大きさになっていた。灯はまだ告白を続けている。

「始まりは、ティターニアが旅行に行ったこと。オーベロンはさ、ティターニアが側にいなくて寂しかったんだね。『勝手に旅行など行くな』なんて怒られたもんだから……後は売り言葉に買い言葉、

実は、あたし透視能力って、ずっと昔からもってたんだよ。でも、人に話すと気持ち悪がられるからさ。ちょうどその頃、私とティターニアは出会って……で、相談相手になってやったんだ。それなら騒動起こして、気をひいてやればいいってね。結構楽しんでたみたいだよ。ストレス解消にもなったし、オーベロンだって、ティターニアのことが大事だから、公にしないで、あんた達に手伝わせてたんじゃないか？ ま、夫婦喧嘩でボガードまで持ち出された、ってんじゃないかな」

灯の言うとおりだ。結局、この騒動は夫婦喧嘩なのだ。だが、ティターニアはそれに他人を巻き込んだ。妖精を暴走させ、ボガードとして騒動を起こしてしまった。私もことを公にするわけにはいかない。恥ずかしいから、というのもあるし、ティターニアを罰したくなかったからでもある。だから、ナイトを使った。灯がそういった事情で向こうについていたとは、私も知らなかったが。

だから、ナイト達にした説明は、全て事実だ。私にとっての、だが。

灯は自らティターニアを手伝っていた。つまり、彼女はチェンジリングでさらわれたのではないということだ。だとしたら、今日までの騒ぎは、全て夏の夜の夢のようなものだ。

私は、そっとティターニアの肩に手を置いた。

「ティターニア、もう気は済んだか？」

「何を言っているんです？ あたしはまだ、あなたに謝ってもらっていないですよ」

まだやるつもりらしい。しかし、もう意地を張ってもしょうがない。

「そうだな、すまなかった。お前をかごの中の鳥だと思っていた私が……悪かったな」

ティターニアは、それで満足したのか、うつとりとした瞳で微笑んだ。

「ええ、鳥は、自由に羽ばたくからこそ、あんなに美しく見えるの

ですからね」

妻が唇を求めているのが感じられた。そつと、花弁に触れるようにして、私は唇を重ねる。

「ひゃあ」

望たちの羞恥心を煽ったようだが、私の目にはティターニアしか見えていない。

最終話

第八場

「これ、返す」

望の手に羽根ペンとはんこ、遊の手に剣のキーホルダー、そして愛の手にはステッキのマスコットが乗せてあった。それぞれ、お付きの妖精に突きつけている。

「別に、いいんだよ？」

キーノが望に向かって言っている。

十二夜の森では、今宵、大樹の下で祭りが繰り広げられていた。そう、ミッドサマーフェスティバルだ。全てが水泡と帰した今、これ以上のものが求められようか。

この場には、ブラウニーも、ケルピーも……首輪付きで、だが……来ていた。そして、イノセントナイトに倒されたはずの妖精ドラゴンたちも。

「ああやって、子供ってのは成長していくんだね」

隣に豊が座っている。さらにその隣には木下が。

「それが親の醍醐味でもある、だろ」

二人とも、目を細めてそれを眺めていた。反対の隣では、ティタニアと恵がお喋りに興じていた。いくら鳥が自由に羽ばたいているからこそ美しいといっても、限度があると思うのだが。だがまあ、この際許してやるとしよう。今日は祭りなのだから。

「でも、あたし達にはもう必要ないから。十分、願いや夢は叶ったもの」

望が代表して皆の気持ちを話している。それを一番実感しているのは、ひよっとしたら愛かも知れない。友達のいなかった彼女は、望たちを知ることによって変わっていくだろう。その内に、同年齢の友達もできていくはずだ。そして、遊と望は……これからどうなってい

くだろうか。

「そう……じゃ、返してもらっね。でも、忘れちゃダメだよ。セコンド・サイトは一生つきまとうてくるし、このアイテムを返したからって、あなた達の心から魔法の力が消えたってことじゃないからね」

お説教のように、キーノが言葉を繰り返す。しかし、その瞳は濡れていた。望たちとの接点がなくなることが悲しいのだ。

そんなキーノに向けて、望が言った。

「分かってるよ。だって、あたし達、友達でしょ？　友達からもらったもの、忘れるわけじゃないじゃない」

ポンポンと、望がキーノの頭をなでる。キーノは泣き出していた。

「あーあ、これだから弱虫は……」

パックがそんな彼女を嘲る。だが、その口から出た音色には、暖かいものが流れていた。

「キーノさん……」

愛が寂しそうに呟く。彼女にはキーノの気持ちがよく分かるのだろう。そんな二人を見て、アルテムがさらに寂しそうにしている。

「おい、みろよ」

遊が、そんなことはお構いなしに上を見上げ、叫んだ。

大樹の枝々から、光が立ち上っている。それは陽炎のように揺らめき、森全体を包むように広がっていく。

「わあっ」

全員が様々な気持ちを抱いてその光景を見ていた。

立ち上がり、私は皆に向けて言い放つ。

「さあ、新しい命の誕生だ。それぞれの想い、願い、夢を込めて、そして、親しい者への愛情を込めて祈るがいい。その気持ちは、やがて子らへ受け継がれよう。永遠にな」

この言葉に込めた思いを、ナイト達は受け取ってくれただろうか。私の言葉を受け止め、この森にいる全ての者が地面にひざまづき、祈りを捧げた。

そんな中、キーノの眩きが聞こえる。

「ずっと友達だよ。約束だよ」

それに、望が応えた。

「うん、約束……ねえ、キーノ」

「なに？」

「約束って不思議だね」

望の声は、静寂の中、皆の心に響いていた。

「どうして？」

「だって、約束するだけで、こんなに安心できる。まるで、魔法みたいだよ」

大樹の光は増し、天高く昇っていった。

そして、再び天から光が落ちてくる。その衝撃に、大樹の枝から光の粒が降ってきた。

それらは、皆を祝福するように、静かに降り積もっていく。

新しい命が、誕生した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4298u/>

約束はマジカル！！

2011年8月14日02時36分発行